

う。かう言つて、誰も彼もその方面へと出て行つた。

象徴主義、神祕主義、さては勞働主義、その方面へと氣分が向いて行つた。これは面白い意味のある運動である。ドイツ文壇の所謂『晩近派』は新を求むること急に過ぎて、あまりに淺露なる好奇と表面的なる模倣とに墮ちたるやうな傾きがあるが、フランスとロシアとはその特色を抱いて、各々特色ある作家を出してゐる。益々見るに値ひする『スツルム、ウンド、ドラング』である。

意識せる分析と無意識に働かれた分析と、實行的と藝術的と、即いた心と、離れた心と、それがXのやうに組み合つて、複雑した内部生命を作つてゐる。混雜、矛盾、惑溺、煩悶、その中から新しい光つたものが出て来るのを待つのが今の文壇の状態である。

### デカダンの群

ナチュラリズムの影響を實際方面に受けて、デカダンの詩人の群の輩出したのは面白くもあり意味もあることと思ふ。その影響を受けたのが多くは詩人の群だから猶面白い。感情を歌ひ、情操を歌ひ、憧憬を生命とする詩人は、何うしてもさういふ風に出て行かなければならない自然の傾向と見える。

フランスなどでもさうだ。リコンド・ド・リールから、いろ／＼分析を食物にするやうな詩人の出て行つたのも、矢張さうした傾向である。分析を自己の主観にまで加へることの出来ない群から、デカダン

といふ氣分が生れた。

自己を分析しても、それは完全に施されたアナリシスではなくて、分析した自己の状態をすぐ實行に移して、悲しんだり喚いたり呪つたりする分析である。全意識的分析ではなくて、半意識的乃至無意識的分析である。

悲しむのにも、昔の人のやうに唯簡單に悲んで居ない。樂しむのにも歎くのにも矢張その通りである。普通の處を通り越して、悲哀の代りに憂鬱を、憂鬱の代りに耽溺と言つたやうな風がある。惡徳、敗徳をも猶歌ふといふ風である。

しかし矢張『歌ふ』といふ調子を脱することが出来なかつた。歌ふといふ心よりも描くといふ心。さういふ處まで行かないところに、デカダンの特徴がある。

歌ふ。其處には情操を誇張したやうな氣分が自然に出て来る。分析も本當の分析でなくて、齒を噛み切つての分析である。或はわざと極端に趨つて行つて見た分析である。モウリス・パレスの三部小説などは確かにさうした境である。

この『歌ふ』といふ境から出來た作品は、作者の心地とか情操とか言ふものが、讀者を動かす第一の要素になる。藝術的と言ふことが眞の離れた藝術的と言ふことでなくて、作者の心地の藝術的といふ處から來る藝術的である。普通人の心を披瀝した形と餘り違つたところがない。唯、普通人と違ふ所は、

作者の心持なり情操なりが誇張した形になつてゐるといふばかりである。何物にも捉へられないといふやうな再現的氣分にはまだ餘程距離がある。

しかしこの實行の加はつたデカダンの群の心が、一種の深味のある藝術を作り出したことは面白いことだ。ことに、それが詩人の方面に於て最も多く發展したのは、當然のことで、そして意味の多いことである。小説では、ダヌンチオなどがさうした領域を切開いた人と言はれるであらうと思ふ。

泉

## 泉

### 扉に向つた心

書といふものは、年齢や境遇で讀まなければならぬやうなものだ。幾度讀んでも面白くなくつて、途中で止めて了つた書が、年齢や境遇で始めて生々とした印象を與へて來るやうなことはよくある。一作家の一生かゝつて書いた全集は、讀者も一生かゝつて讀まなければわからないものだといふことを此頃殊に深く思つた。

私はこの山の中の僧房に、いろ／＼な書を持つて來た。フロオベルの全集、それはすつかりその評傳を書かうと思つてゐるので一通り讀んで見ようと思つて持つて來た。殊に歴史物を讀んで見ようと思つた。そして最初に『セント、アントアメの誘惑』といふのを讀んだ。次に、もう一度『感情教育』を讀まうと思つてその長い小説をくり返し始めた。

ところが、それをまだ少ししか繰返さない中に、ふと J. K. Huysmans の “En Route” をひらいて見た。これは、これまでも何遍となく読みかけてはよししてつたものである。何うもわからない、何うもその心持がわからない……。かう思つて私はいつしかその黄い表紙の本を伏せた。頁も半分位しか切つてない。

ふと私は思つた、Huysmans はナチュラリズムからミスチシズムに移つて行つた人である。『廣く淺く掘るよりも狭くとも深く掘らなければならない。』と言つて、そしてナチュラリズムから出て行つた人である。それに、此作者ほど忌憚なき筆を以て世間の惡徳を描いたものはないと聞いてゐる。ゾラにはまだロマンチックなところがある。ある目的の爲めにする誇張を敢てしたやうな缺點がある。ドストイェフスキーには小さな同情がある。作者が作中の人物と一緒に泣いたり笑つたりしてゐる。共に主觀的なところがある。ところが、この Huysmans になると、些の作者の同情が加はつてゐない。あるがまゝに書いてある。どんな残酷なことでも、どんな陋劣なことでも、作者はそれに感傷したり激昂したりしないで平氣で書いてゐる。かう何かの評論で見たのを私は覚えてゐる。

それに、この Huysmans といふ人は、その一生の閱歴から言つても、非常に辛い苦しい複雑した生活を経て來た人だ。現代のデカダン風な生活の中を、眞面目な心を抱いて、沈んだり、浮上つたりしてやつて來た人だ。かういふこともかねて聞いて知つてゐた。“Mathe” といふ小説などは巴里の市井のこと

を書いて、その描寫が骨に徹してゐるといふことである。私はその人の書いた心持が解らない筈はないと思つて読み始めた。『兎に角、終まで読んで見よう。何んなに面白くなくつても、何んなに解らなくつても……』かう思つて私は一頁々々繰つて行つた。

中世紀の寺の感じを書いてゐるのを面白いと思つて讀んでゐる中に、私の心は忽ちその Durtal の心持になつてゐるのを發見した。Durtal は四十をもう越えてゐると書いてある。人生の峠を越えて了つた人である。その人の性慾や快樂や放蕩や疑惑や煩悶やさういふものを背景にして、そしてその心持が肉體から精神に向つて走つてゐる形を書いているのがこの作である。ナチュラリズムからミスチシズムに入つて行つた作者その人の心持がこの作を生み出してゐるのである。

フロオベルのセント・ジュリアンの話とヘロの “Physiognomies de Saints” とを比べて、前者は藝術的技巧乃至藝術的精神に於ては殆どその完きを盡してゐるが、全體に於て人間に最も必要なものが缺けてゐるやうな氣がする。それは何であるか。信仰である。信仰の缺乏である。それに反して後者は熱烈なる心持を抱いてゐるが——それがあつたが爲めにその書は多くの價値を存してゐるのであるが、一方に藝術的精神といふものが全く缺けてゐるがために矢張十分の効果を收めてゐない。此の二つの缺點の間に煩悶してゐる Durtal の心は即ち作者その人の心ではないか。

藝術を押しつけて行つて壁にのみ向ふやうな心と信仰に信仰を進めて珠数をつまさぐるやうになる心との間に横つてゐる苦しい疑惑、それに肉體の誘惑から来る恐ろしい聲、頭も割れるやうな又はすつかり破産して了つたやうな現代的苦悶、それをこの書は極めて内面的にしかも描寫的に描いてゐる。

巴里の寺院——通俗なやかましい寺院に堪へかねて、つとめて静かな *de Goverin* のやうな寺をたづねて、中世紀のミスチシズムの匂ひを嗅がうとする心持のかけには、大きなナチュリズムの破産と言つたやうなものが隠れてゐるではないか。

四十になつても、矢張一番恐ろしいのは『*The Sin or Flesh*』である。*Madame Chant oive* といふ女は何んな女であるか、また *Florence* と單に作者が書いてゐる女は何んな女であるか、男の耳をかむ癖のある女とは何んな女であるか、馬鹿のやうな獸のやうな女とは何んな女であるか、作者はさういふ背景にゐる女のこととは少しも書いてゐない、そして唯さういふ女から離れる苦心と苦悶とをのみ書いてゐる。しかし、何うしてもそれが絡みついて来る、纏りついて来る、行つて逢はなければ何うしてもゐられないやうな心持が續く。殊に夜が堪へられない。*Durtal* が *Abbé Gevesin* に「しかし巴里の寺院は、私のやうな *A sinner* に取つて最も必要な夜中に大抵閉ぢられて了つてゐるではあ

りませんか。』と言つてゐる。仕方がないので、夜中に起きて、暗い町を選んで歩いて行くところなどもある。

*Jays of life* をつきつめて行つて、そしてゆくりなく邂逅した苦悶である。

生活に向つて突進して行く中は好い。張り詰めた心持を抱いて戦闘と労働とに携つてゐる中は好い。藝術と生活を單に一緒にして、そしてそれで満足してゐられる中は好い。しかし、それに突當ることはないだらうか。何うにもかうにもすることの出来ないやうな時は來ないだらうか。

最も善いもの、最も完いものと信じた自己の生活が、一農夫、一労働者、*Trappist* にも及ばないといふことを感ずる時が來ないだらうか。來ない人は好い。來ない人には問題はない。しかし、私の考へでは、*Durtal* の考へでは、人間は必ず一度はさういふ窠に陥るものである。

*Durtal* が *La Trappe* の寺院に赴く條は殊に精彩を極めてゐる。重い患者が——巴里にゐるは何うしても治らないやうな重い患者が病院に入院してその痛いところを切開して貰ふやうに、かれはその遠い田舎の谷合の古い中世紀の寺院へと入つて行つた。

巴里から半日ほど汽車に乗つて、そしてそこからまた五六時間馬車に乗つて、かれはその谷合の周圍に扉を取廻した古い寺院へと入つて行つた。恐怖と不安と期待と絶望との渦の中に漂ひながら……。

そこには何ういふ世界がひらけて居たか、何ういふ世離れた氣分が漂つてゐたか。巴里の一享樂者は

其處に、朝二時に起きて五時に禮拜祈禱をして、十一時半に午飯を食つて、六時に夕飯をすまして、八時に寝るといふ單調でそして寂寞を極めた生活を見たのである。互に口を開くことを禁じ、互に友情をつけることを禁じ、唯、禮拜して、勞働して、そして一生を送るといふ世界を見たのである。曉のほの暗い闇の中に白い衣を着て、頭巾をかぶつた人の行列を何とも言へない心持を以て見たのである。

其處では時代もなければ、歴史もない。唯あるのは神ばかりである。そこにゐる同胞の中には、自分が今何ういふ世の中に生れてゐるか、何ういふものが世の中にあるか、何ういふ思想があるか、何ういふ悲劇があるか。『女が何うつくられてあるか』をさへ知らない人達があるのである。そして、死は神に近づき階段として、唯、喜悅の情を以て迎へられてゐるのである。白い衣を着たまゝ、頭巾をかぶつたまゝ、棺にも入れず、死んで土に埋められて行くのである。そして中世紀から今日に至るまで、その生活はさびしくつゞいて來てゐるのである。巴里の享樂者の送つた生活に比べて何といふ對照だらう。

Durtal は池に臨んで腰をかけて、そして水を見てゐる。樹の影や雲の姿などをしづかにうつしてゐる水を見てゐる。『この水が則ちライフだ。流れて瀧津瀬のやうになつては、何等の影をも映すことが出来ない。唯、碎けて流れて行くばかりだ。かういふ風に靜かに落附いた堪へた心でなければ深く入ることが出来ない』などと言つてゐる。

僧房の中でも、Durtal は矢張その Florence を思ひ出してゐた。それが時々恐ろしい嵐のやうにかれを襲つて來た。すぐそこに來て笑つてゐる。不思議なワイルドな笑ひ方をしてかれを見詰めてゐる。かまれた耳の微かな痛みをかれは感じてゐる。

『何と思つてゐるだらう、不思議に思つてゐるだらう。』

こんなことをかれはいつか考へてゐる。

かれは眠られない夜を幾夜か送つた。悪夢に襲はれて飛び起きたやうなことも幾度もある。暗い影の襲つて來るのに堪へかねて主僧にその助けを求めるところなどもある。

私は Huysmans のすぐれたサイコロジストであることを、此の作に由つて知ることが出來た。内面の描寫、心理の描寫——それが何ういふ風に有効に運ばれてゐるかといふことを考へて見た。四百頁近い大冊は唯 Durtal の獨語と獨想とから成り立つてゐると言つても好い位である。

四十を越した主人公の心持が私にはよくわかる。四五年前に二度も三度も讀んで見ても、何うしてもわからなかつた心が、今になつて始めてわかつて來る。

人間には轉換期といふものがあるやうに私には思はれる。厄年などと言つて昔の人はそれを非常に恐れてゐるが、その厄年が則ち人間の心の轉換期ではないだらうか。その時分にならなければその時分の

心は人間には完全にはわからないものではないだらうか。

A Trappist — さういふ心持はさびしい悲しいしかし免れ難いものである。人間の必ず一度は突當らなければならぬ心持である。それは人の性質や境遇に依つて、いろいろ變つた『表現』をするであらうが、しかし、Dutailの心は四十を越した人の心であるといふ事だけは争はれないと私は思つてゐる。夕方など私は僧房からよく散歩に出かけて行く。静かな、しんとした、杉の大きな木の眞直に立つた廣い道を私は静かに歩いて行く。もうその頃には、其處には誰も通つてゐない。參詣者は四時限りばかりと跡を絶つてゐる。

大きな堂がある。そこには三尊佛が安置されてある。此處の寺の金堂である。そこを私は静かに歩いて行く。古い大きな扉がびつしやりと堅く閉つて、しんとしてゐる。何の物音も聞えない。唯、私の心がその大きな閉つた扉に向つて波立ちつゝあるばかりである。Dutailの心のやうに、ナチュラリズムからミスチスリズムに入つて行つた J.K. Huysmans の心のやうに……。

### ある友に寄する手紙

——君

君も私も好きな初冬がまたやつて來ました。久し振に此頃の私の近況をお話しするのも興味がある

ことと思ひます。

私は殆ど全く酒を廢しました。今年は夏以來の脚氣が例になく重く、一時は十分に立つて歩くことも出來ない位でしたから、酒の方も自然止すやうな形になつてゐたのですが、今ではそれが習慣になつて、他人が盃を啣んでゐるのを見ても、別に心を動かすやうなことはなくなつて了ひました。そして、しる粉の一二杯、菓子の一箇二箇、さういふものが却つて私の茶の時の伴侶となるのでした。

それに此頃はなるべく訪客を避けて暮して居ります。舊友にも滅多に逢ふ様な機會は御座いません。をり／＼小集會のはがきなどが朝の門の郵便箱に入つてゐたりすることがありますけれど、つひぞ一度も出て見ようとは思ひません。孤獨の上に起つて來る快樂、寂寥の上に伴つて來る自由、折角得たさうしたものを破壊して了ふのを私は恐れて居るのでした。

靜かにして置いて貰ひたい。もう少し考へたり讀んだりしたい。かう思つて最初は私は私の一室に閉籠つたのですが、今では十分な孤獨と十分な靜養を得たので、心も氣分も段々落着いて、以前のやうに烈しく躍つたり激したりするやうなことは滅多には御座いません。“A Rebours”の Des Fascinettesの生活の中から、デカダンと藝術とをぬきにしたやうな生活を送つてゐると思つて下されば間違ひは御座いません。

私の机の周圍には、随分いろいろものが散ばつてをります。人が見たら、その不統一と不整と偏屈と

散漫とに驚かすには居られないでせう。『考槃餘事』といふ古くさい本や、『江戸名所圖繪』や『竹堂遺稿』や、さういふものが一方にあると共に、それに交つて Huysmans や、Maupassant や Goncourt などの書があるのです。『Fool in Christ』は二三年以來の私の愛讀書で、殆ど座右から離したことは御座いません。

私は Durtal のことを考へたり Emmanuel のことを考へたりして日を暮してゐますが、時々私は私の傍にある大きな日記を繙いて見ることがあります。それは維新から維新以後にかけて、生きてゐたある無名の人の長い日記です。その日記は初めは別に私の興味を惹きもしませんでした。またその日記が何うして私の書齋の中に紛れ込んで来たかも知りませんでした。それが不思議にも、此頃では、非常に大きな Vision となつて、私の眼と私の心とに映つて来てをります。最近百年間の日本の歴史の上で、この無名の人の生きた時代ほど變遷の烈しかった、潮流の大きかつた時代はあるまいと私は思つてをります。その變遷とその潮流とについては、私は僅かにその一端を知つてゐるにとゞまつてゐますけれど、それでも私はその日記を透して、凄じく私の胸の轟くのを感ぜずには居られません。其處には複雑した潮流が凄じく渦を巻いてをります。ロオマンズがロオマンズとつゞいて生れて来てをります。ある生活から不意にある生活に墜ちて行つた慌しい光景、沈滞して亡びて腐つて行く人間の靈魂のありさま、さういふものが到る處に見受けられます。しかし私はこれを何うして描き出すか、何うしてこれを完全に

紙の上に現はして来るか。とても私の力には及ばないやうな心地が致してをります。しかし、私はその Vision の日増に大きく新しくなつて来るのを待つてをります。私は何うにかして、これを育て上げなければならぬ。

——君。

イブセンは『われ等蘇生の日に』と言つた。私も、此頃さういふ反射作用が日夕に私の周圍に起りつつあるのを感じずには居られません。私の過去は影となつて、絶えず私の周圍から私を威嚇してをります。私の亡靈は絶えず私を苦しめてをります。イブセンは青年に喜ばるべき作家ではない。又、青年に完全に理解さるべき作家ではないと君は曾て言つたが、實際それに相違ありません。人間の反射作用、それに最も痛切に觸れた作家は、イブセンを除いては外にないかも知れません。

先日、ある若い女が来て、私に言ひました。『この間お書きになつた努力の空しいといふことは一體何ういふことですか。私がかうして先生のところに上る心持とは丸で違つた反對のこのやうに思はれるのですが——』私は老建築師を思ひ出さずには居られません。塔の上から落ちて死ぬ老建築師の運命は、避くべからずに、必然に私達の前に迫つて来てゐるではありませんか。

しかしイブセンの心境には私は留り得ないものの一人です。貴族的な藝術的なあのゴントールの態度と、スカンヂナヴィアやスラブの作家の心境と、そこに踰ゆべからざる大きな溝があると同じやうに私と



老建築師との間にも大きな相違があるのではないでせうか。むしろ灰色の冷たい四壁の中に筆を持ったまゝ、斃れた作家の態度が一層私に共鳴するのではないでせうか。

われ等蘇生の日に。かう叫ぶよりは、われ等は寧ろ沈黙すべきではなからうか。その方が自然で、そして『従順』と『服従』とを持った偉大なるあるものではなからうか。

静かにしてゐたい。落着いてゐたい。かう私は思つてをります。

——君。

私達は世間に向つて、ひらいた窓を成たけ多く持つてゐなければなりません。しかしその窓は、静かで、寂寥で、些の雲影もその前に掠めないものでなければなりません。そして私達は世間の煤煙と塵埃とを避けるために、或は世間に漲る凄じい驟雨の餘沫を受けないために、一々その窓を閉めなければなりません。何故かと言へば、私達は窓の中の濡れるのを恐れるからです。窓の中の白紙や卓テーブルの汚されのを恐れるからです。

流石にゴンクールは豪う御座いました。かれは大きなエビツクを持つことを屑しとしました。又、大きなスケールを持ち出すことを敢てしませんでした。古來の大創作家の持つた Vision さういふものにも捉へられませんでした。煤煙、塵埃、驟雨、さういふものに對して、かれは一々丹念に窓の扉を閉めることを忘れませんでした。スカンヂナビアの作家の陥つた反抗、スラブの作家の持つた苦悶、さ

ういふものに對しても猶且つその静かな態度を失ふことをしませんでした。そしてその窓の中には、他に見ることの出来ない Pure observation を持つてゐました。

——君。

私は私の近況を話す筈でした。思はず話を外の方に持つて行つた私を許して下さい。此頃は朝早く起きて、残月を樹間に仰ぐのを樂みとしてをります。流るゝやうな月の光、それに雜つた微かな黎明の光、その時分起きて、窓の戸を開くと、何とも言ふことの出来ない好い心持がします。それが私の藝術のシンボルでありたいと思ふほどであります。

私は多く一室の中で日を暮すのを例としてゐます。文展にも唯一度行つたきりです。日本の繪畫界はまだ混沌としてゐます。スケイルとロオマンズと粗雑な空想とがあるばかりで、唯一つの純な觀察をも見ることが出来ませんでした。ある日は、私は郊外に向つて出かけて行きました。ある日は、農夫の大勢島に出てゐる野を汽車の窓から見て通りました。ある雨の日には、雨漏りの音を氣にしながら、終日ソファの上に横はつてゐました。

私の眼は時には外に向つて開き、時には内に向つて開く。一は人生に對する窓であり、一は空間に對する窓であります。私の内部と空間との一致について私は昨日も今日も考へることが多う御座いました。時には、私は雜誌などを讀んで見ることもないではありません。しかし、日本の今の文壇にも矢張り

Pure observation が乏しいと思はずには居られません。ボオドレールから脈を引いた傾向やら、スラブのあらゆる素樸を喜ぶ傾向やら、さういふものがX光線のやうになつて混亂して交り合つては居りませうけれど、要するに、話説と空想とロオマンズとの境を脱却しないものが多いやうに私には思はれます。ボオドレールの脈を引いた傾向は、何故もつと極端な尖つた爛れたところまで行かないでせうか。何故空想とロオマンズの間には、よつてその先に踏み出さうとしないでせうか。スラブの素樸を喜ぶ傾向は何故もつと深い鋭い形と心を取つて来ないでせうか。何も彼も其處にさらけ出して、その純な苦悶を見せないでせうか。

批評家はスタイルの大とロオマンズの創造と理想の再設と、さういふものを常に要求してゐますけれど、何故もつと徹底した、純な境を要求しないのでせうか。説話の生温い境に満足してゐるのでせうか。冷たい空氣、骨に徹するやうな空氣、魂を冷却しなければ止まないやうな空氣、さういふ空氣は何時文壇に漲るやうに流れて来るでせうか。

——君。

君は忘れはしますまい、あの時を。あの山の上の冷かな鮮かな空氣の身に染みわたるやうな爽やかな空氣を。

『山の上は丸で空氣が違ひますね。』

あの時、君も私もさう言つて相顧みた。丁度あれは今時分でした。十二月の初めでした。山にはもう雪が白く來てゐました。山の下は小春日和で、紅葉などがまだ谷合に赤く残つてゐたりしたのに、山の上になると、光景はすつかり變つて、木の葉が雨のやうに散つて、冬の日の明るい光景が眩しいばかりに荒涼とした野を照した。

其時、私達はさびしい高原の停車場で下りて、迎へに來て呉れた友達と車を並べて、山の雪の日に光る野を横ぎつて、その友達の家へ行つた。

その友達の家は靜かな山懐にあつた。窓からは、日本アルプスの日に光るさまがそれと見えた。あの時の一夜、それを私は忘れることが出来ない。私はその時少しばかりの、酒に酔つて、無遠慮の假寢をして、君や友達や友達の細君に笑はれた。

其時分親んだ作家と作品とは随分に多かつた。ダンマンチオもあれば、シエンキウキツチもあつた。希臘のビケラスなどといふ作家の短篇なども喜んで讀んだ。しかし、今日まで私の伴侶である作家は幾人あるでせうか。ドオデエも過ぎ去つた。ゾラも過ぎ去つた。ダンマンチオなどは私の伴侶としては、あまり色彩が浮華すぎる。メイテルリンクの自然と運命とは、あまりに心と態度とがわかすぎる。——君、不思議ではありませんか、その時分には何の共鳴を感じなかつた “A Rebours” の作者などが、却つてそのまことの心を私に示して見せるといふやうになつた。

山の上の冷めたい空気が、慌しい初冬の到来、雪と日との反映、それを私は忘れることが出来ない。君、あの時、馬車を一臺借りて停車場から山のスロープに添うた路をある廢驛へと行きましたつけね。あの時の興は遂に／＼再びやつて来ない。

——君。

今夜も静かに更けて行きました。夜風の落葉を動かす音が忍ぶやうに微かに私の魂をそよつて行きました。今夜は、これからまだ長く起きてゐて、例の大きな日記をくりかへして讀まうと思つてゐます。私の傍には、火鉢があり、火があり、茶器があり、菓子がある。周囲には種々なものが亂雑に散ばつて置かれてある。君の書いた本などもある。遠くにゐる君を偲ぶには最もふさはしい夜だ。……………

## 痕跡

人間には誰にでも殻がついてゐる。その殻を捨て、了ふ爲めに人間は一生を費して了ふのである。殻の取れた時分には、人間の體は生理的に陥落しつゝある。やうやく、殻が取れて萬象がはつきり見える時分になると、人間は既に死に面してゐるのである。皮肉と言つて好いか、矛盾と言つて好いか、癪にさはるつて言つて好いかわからないやうなものだ。

『二人の心は萬人の心』といふ言葉が一方にあると共に、『萬人の心は萬人の心』と云ふ言葉が一方にある。そして、それが兩方とも並存の權利を主張してゐる。

『隠居學といふものもこれで中々樂ぢやないもんですよ。何う日を送つて好いかわからなくつて困る。暮もあきる。盆栽も面倒くさくなる。酒もつまらない。さうかと言つて、一日ほんやり日向ほつこしてもゐられない。隠居學と言ふものは中々むづかしいものですよ。』かうある老人が笑ひながら言つた。かういふ人達も矢張箇々生存の權利を以て生きてゐるのである。若い心でそんな生活は價值がないと言つて一概に却けて了ふことの出来ないものである。

『さういふ生活は、今では私達にはまだかけないが、さういふ生活も藝術にはなるんですね。さういふ生活が描けるやうな心持になるのも面白いと思ひますね。』かう私はある人に言つた。

センチメンタリズムといふことは、かうありたい、あゝありたいと思ふ願を誇張して、理想的から空想的になつて行つた形を、言ふのである。つまり殻の取れないといふ程度見たやうなものである。私の考へでは、ツルゲネフよりもトルストイよりもドストイエフスキーの方に却つてセンチメンタリズムの

分子が多いと思つてゐる。

若い人の心持は、現はれやうによつて多少の相違はあるが、多くはセンチメンタルである。強く現はれてゐても、弱く現はれてゐても………

當て氣味の作が此頃は非常に多くなつて來てゐる。つまり社會とか讀者とか流行とか言ふものに作者が捉へられて行つてゐるのである。『何うかしてうまいものを書きたい。』これでさへいけないのに、今では、『何うかして當るものを書きたい。』といふ風になつて行つてゐる。イヤな傾向だ。

他人のことをよくも知らないで、——また知らうとも思はないで、自分の勝手に何の彼のと言つてゐるものがある。烈しいのは、自分で、その他人をかうだときめて了つて、それで満足してゐるものがある。さういふ人は世間によくある。知らうと思つてさへ容易に知れないと言つて慨嘆してゐる人もあるのに、知らうともせず、さうときめて了つてゐる。無論さういふ人に人間のわかりやう筈がない。さういふ人には自己すらわからない。

寄居蟹のやうな隱遁的の氣分は必ず藝術家にはなくてはならないものだと思ふ。但し藝術家が廣い人

生に觸れなくつてはならないといふことは言ふまでもないことである。或は寄居蟹のやうな隱遁的な氣分にあるが爲めに却つてより多く人生に觸れて行けるのではないかと私は思つてゐる。活躍した世間の中に出て働いてゐるといふことと、人生に觸れるといふこととは何等の交渉を持つてゐないと言つても好い位である。單に働いてゐるたからと誰でも人生に觸れられるといふものではない。その證據には人生の巴渦の中に没頭してゐる人はくさるほど澤山あるが、そこからは何等の藝術も産れて來ない。だから、戦闘、労働などといふことと、藝術とはちよつと一緒に簡單に言つて了ふことが出來ないやうなものである。此處にも自己と社會との大きな問題が横つてゐる。

人生に對する不理解やら年齢やらから起つて來る不安の念が段々除れて行つた時に、人は多くは大聲を擧げるものである。自己の發見のやうな叫聲を擧げるものである。さういふ時に限つて戦闘、努力などといふことが多く口に言はれるものである。

そしてこの叫聲から實行が始まつて來る。つまり抽象的から具象的になつて行くのである。

同じ經驗を繰返しても、人は滅多に同じ經驗だとは言はないものである。皆な自分で新しく發見したやうに言ふものである。その癖、科學は多くの實驗から出來上つてゐて、經驗者犠牲者のお蔭で、人間

は毒草を食つて死ぬのを免れてもれば、鮫や海鼠のやうな形のものまで食ふことを教へられてゐる。しかし、ベルグソンの言ふやうに、個人の経験は實際箇人その人のみの発見であることは言ふを待たないことである。それだから、人間は生きて希望を抱いて行かれるのである。一から十まですべて同じでは、第一、自然の生殖の道が營んで行かれなくなる。箇人の生存は自然である。學問はその自然を解らずなりに研究しようとするものである。學問は決して自然を律しようなどといふ目的のもとにあるものではない。藝術でさへさうである。

人間の注意力といふものは、存外徹底してゐないものであるといふことを此頃考へた。人間は毎年毎年同じやうなことをしてゐて、それでゐて毎年新しいことをしてゐるやうな氣がしてゐる。人間はあらゆることをすぐ忘れて行つて了つてゐる。しかしこれが爲めに——この忘れるといふことがあるが爲めに、其時々が新しく感じられて、それで面白く生きて行かれるのであるかもしれない。

日記などを出して見ると、殊にさういふことが深く感じられる。四月の處を見ると、毎年、其時分には、屹度同じやうに花が咲いて、風が吹いて、雷が鳴つて、霞などが降つてゐる。同じ日に同じやうにして上野から淺草の方に花見に行つてゐたりする。やつてゐる仕事なども大抵同じだ。ある雑誌記者が小説を頼みに來てゐるが、今年も矢張、其と一日おきにその雑誌記者が來て小説を頼んで行つた。これ

に限らず萬事が皆さうだ。

それであるのに、人間は天候のことにさへ完全な徹底した注意力を拂つてゐないで、今年は風が強いなどと云つてゐる。今年のやうな雨の多い時はないと言つてゐる。實は毎年同じことなのだ、大差がないのだ、花の咲く時分に、雨や風の多いのは千年も二千年も前から言つてゐるのである。

しかし、私の経験から押して行つて見ても、この簡單な四季折々の變遷などですら、近頃やうやく分明と、その節々の天候がはつきりと分つて來たやうな氣がするのである。それほど人間は忘れ易いのである。利那的に無意味に日を送つてゐる人間の多いのも無理はないと思はれる。

或は知識なしに、理解なしに、無意味に日を送つて死んで行く方が人間として幸福なのかも知れないと思はれる位である。

理解——倦怠——隱遁——さういふ形式になつて行つてゐる。聰明な人ほど功名の念に薄いと言ふのもそれである。理解と知識とは生命を生かし、また亡ぼしてゐるやうな形になつてゐる。

だから、縦から見て、理解と知識が生存に必要な時代と、生存に有害な時代とがあることを知らなければならぬ。死に面したものには、理解も知識も氷のやうになつて溶けて行つて了ふ。

矛盾と撞着と不徹底とを笑ふ人が世の中にはよくある。いづくんぞ知らん、さういふ人が矛盾と撞着

と不徹底との自然の中に安んじて住んでゐるのである。

穉樹の生長は見てゐても氣持の好いものである。四五年の中に、忽ち老木を凌ぐやうな勢を見せて來る。幹にも葉にも姿にも、生々とした氣が漲つてゐる。しかし、氣持が好いといふだけで、しつかりした氣分が乏しい。枝や幹などにも屈曲した趣致がない。長く見てゐると、その單調なのにあきて來る。

ある木に私は肥料をやつた。と、その翌年には、その木は非常な勢を見せて、葉がこんもり枝一杯に繁つた。見るも好い氣持であつた。ところが五月のある烈しい風に逢つて、他の木はちやんとしてゐるのに、其木ばかりは意氣地なく倒れて了つた。根が肥料に緩んでゐたのである。それに、餘り勢に乗じた葉の繁茂が烈しい風を一層烈しく受けるやうになつたのである。

『面白いもんだね。』

かう私は家の人に言つた。

一角を辛うじてつかみ得て、それを世間に報告すると、世間ではそれをその人の『總て』であるやうに言つて了ふのが習ひである。人間はある種の報告をも、すべて、『完成』したものと受取る癖があ

る。それほど人間は完成したものを好んでゐる。

その癖、世間には完成したものなどは一つもないのである。自然が既にさうである。人間がすでにさうである。あらゆるものがすべて不完全である。

主義と主義との争は、だから『不完全』と『不完全』との争ひである。『一角』と『一角』との争ひである。いくら意見を戦はして見ても、仕方のないやうなものである。寧ろ『一角』を一角とし、『主義』を主義として、不完全な内容を豊富にするやうな考へ方をしたいと私は思つてゐる。

ある事件の過ぎ去つた跡と言ふものは、不思議な考へを人に起させるものである。此頃は私は『跡』と言ふことを深く考へた。跡はその事件の起つてゐる當時にあつては、その事件の背景となつてゐたものである。事件が去つて背景ばかりになつたのが跡である。

いろ／＼な人間がその跡の上を通つて行つてゐる。女もあれば男もある。熱い心もあれば恐れ戦いた心もある。その舞臺の悲劇の中であはれな最後を遂げたものもある。それらがいつともなしに過ぎ去つて行つて了つてゐる。そんなことがあつたかと思はれるやうになつてゐる。野には雲雀が揚つてゐる。夕日は落ちつゝある。

『やういふことがあつたと思へないね、何うしても……』

『本當に、さうだ。夢のやうだ。』

『あの今来た老人がその事件の中の一人で、まだ若くつて、毎晩通つて来る女があつたなどとは何うしても思はれない。』

『實際さうだよ。』

『僕等の後にもすぐ『跡』だけが残るんだね、それを思ふと、不思議な氣がするね。』

『跡ばかりを書く面白ね。』

私は『跡』といふことを三日も四日も考へてゐた。

## 廣い空間

問題文藝の提唱を始める前に、私達は今の日本に於ける社會問題、社會と個人との關係、國民性の素質と心理、さういふものを研究して、それが何ういふ風に作の上には現はされて行くべきか、又は果してそれが完全に藝術品を構成して行き得るか否か。所謂、社會と個人との複雑した關係の上に、何れだけの深い重要な問題と題材とが籠められてあるか。さういふものをも研究せずに、徒らに提唱ばかりしたところで、それは何の効もないといふものである。

私達の經驗では、問題的部分は、深く個人と社會との關係に入つて行けば行くほど、社會に屬した方

面は稀薄になつて、個人の心理に屬した方面ばかり跡に残るのを發見せずには居られないのである。深く突詰めれば、社會といふものはなくなつて、個人ばかりがその底から現はれて來るのである。そしてその個人が充分に現はれて、徹底した形を帯びて來れば、社會とか問題のとか言ふことはすつかり消えてなくなつて了ふのである。解決がつかないと云つて悶えてゐたことが、ぐんぐん解決されて行つて了ふのである。イブセンの戯曲などに、煮えきらない無解決の多いのは——問題の提唱にとまつてゐるやうな作品の多いのは、畢竟その個人を深く考究しないからではあるまいか。

私達の作品の背景は、第一義的に言つて、決して社會であつてはならない。更に進んで、生活であつてもならない。或は人生であつてもならないかも知れない。何故と言へば、社會以上、生活以上、人生以上に更に大きなものがあるからである。社會、生活、人生、それを包擁した大きな空間が私達の背景を成してゐるからである。

現代の多くの作家を例に引いて見てもわかることである。ある作家は、社會に突當つて悶えた。ある作家は生活につき當つて苦んだ。ある作家は人生を對照にして煩悶した。しかし、それ等よりも一層すぐれて深いのはひろい空間を對照にした形である。現に、あの社會すきの問題すきのイブセンすら、晩年には、そのひろい空間に對する煩悶を見せてゐるではないか。『ボルクマン』や『われ等蘇生の日に』などは、その完全な例として引かれ得べきではないか。『社會の柱』『人民の敵』といふ作から、『鴨』『幽霊』

になり、それから『小アイヨルフ』『海の夫人』になり、段々『ボルクマン』あたりになつて行く作者の心の徑路は、優に、社會、生活、人生、ひろい空間といふことを年代的に見せてゐるではないか。

問題文藝可なりである。しかし、それは作者が自己を築き上げる道程の一里塚としてのみ許さるべきである。問題文藝が起ると起らないとは、藝術には何の關係もないのである。

これを横から言つて見る。ある社會では、社會が個人を壓した。ある社會では、個人が社會を壓した。時には、社會にのみ個人が執着して、生活も人生もひろい空間も見えないやうな時代もあつた。さういふ時には、社會劇、社會小説がさぞ盛んに起ることであらう。しかし、それは藝術には何の影響をも起して來ない。藝術は矢張藝術である。

フロオベルは『ホヴリー夫人』で満足してはゐなかつた。あの作は一面社會的で一面個人的であるけれども、あれだけではかれには満足は出來なかつた。かれは『セント・アントヌの誘惑』『プバールエンドベキユツシエ』に見せたやうなひろい空間を背景にしたものまで行かなければ承知が出來なかつた。J. K. Huysmans も矢張さうだ。『途上』でも『大寺院』でも皆なそのひろい空間に向つて突當つて行つた作者の煩悶だ。

社會から生活、個人、ひろい空間——すぐれた作者は、皆さうした深い考察と煩悶とを見せてゐる。ハウプトマンの『エマニエル・クイント』なども、矢張さうだ。あの作を『寂しき人々』『日出前』などと比べて見ると、作者の考察と煩悶とがいかに社會、個人からひろい空間に向つて行つたかといふことがわかる。作者はさびしい心を抱いてひろい空間に對した。今まで悶えた社會と生活から離れて、さびしく心を空間に向けた。

かういふ例は、搜したなら、まだ澤山にあることだらう。しかし、これをメイテルリンクの對自然、對運命、對死などに比べると、そこにはまた餘程の相違があるのを私は見る。メイテルリンクの對空間はシンボルとしての對空間であつて、まだ根本から動いて行つたものではない。作者の具象した方面が自然に流露して來たのではなくつて、抽象した方面から、あゝいふ形式を見せたといふやうなところがある。

トルストイの晩年の行動も矢張そのひろい空間に對する大きな煩悶である。そこには如何ともすべからざるものがある。儼として横つてゐる。

問題文藝を説く人達は、さういふ境を考へて見なければならぬ。フロオベルの『シンブルハート』などといふ作や、ゴンクールの『ルネ』や『シスターヒロメーヌ』や、さういふ作がゾラやドストイフ



スキ一の大きな作などに比べて、どれだけ価値があるかといふことを考へて見なければならぬ。しかし問題文藝を起せといふ提唱は、一面理想を起せといふことであるらしい。昔の幽霊が再び現はれて来たといふ現象である。「太陽」の批評家は、割合によくこの間の消息を説いてゐる。凝滞變ぜざる今の作家の心境にあきたらない態度はよく見えてゐる。作者は無論この道理のわかつた註文に耳を傾けなければならぬ。しかし、批評家の所謂 *Perspective* を闕いてゐるといふことに就いては、あながち異論がないとも言はれない。人間生活の内容の解釋などにも、非常に違つたやうなところがあるやうな氣がする。

藝術と人生との問題は中々難かしい。『早稻田文學』に出たメレジコウスキーの議論は、再び私にその問題を繰返して考へさせるヒントを與へた。しかし、メレジコウスキーの言の如く、藝術と人生との間に横はるものは宗教だらうか。果して宗教と名をつけて好いやうなものだらうか。

ブロークの言ふやうに、藝術と人生との間には確かに無底の深淵が横つてゐる。觸れさうでゐてそして觸れない。また同一のものであつて、そして同一のものでない。藝術と人生との關係ばかりではない、藝術家と生活との間の關係もまたさうである。それをメレジコウスキーは宗教に持つて行つて、そしてこれを一緒にした。しかし私はそれを宗教とは言ひたくない。宗教にしたくない。宗教にして人生に臨み

たくない。矢張二つ別々のものであつて、そして一緒のものであるやうにして置きたい。さびしくても好い。辛くつても好い。孤獨で堪へられなくつても好い。フロオベルのやうな死に方をして差支がない。何故と言へば、その深淵から浮び上がれば、宗教と言ふやうなものでその間を結び附ければ、藝術は忽ちそこを離れて了ふからである。

藝術と共に離れたい心と人生と共に即きたい心と、この二つの心は何うしても矛盾した活劇と悲劇とで、この私達の生命の中に絶えず暗い光線を投じて行くのであらう。離れ難い歎き、即き難い苦しみ、矢張私達は灰色の暗い壁に閉ぢこめられて、何うすることも出来ない境に住はなければならぬのであるまいか。

『別種の神聖の意義に満ちた生』とメレジコウスキーは言つてゐる。しかしこの生がさう簡単に得られるだらうか。簡単に得られる人もあるであらうが、私には何うもさうは思はれない。また一方では眞面目に考へて、さういふ生があり得ると思はれない。曾つて『フロオベル論』の中にもさういふ議論のあるのを見たが、何うも私にはさういふ風に簡単に思はれない。

孤獨——そこからのみ藝術のまことの淨い泉は湧いて来る。

他を描いて類型に墮ちた作品を見る度に、私はその作者が自己の研究と解剖とに十分でないことを考

へて自から戒める。

『考槃餘事』といふ小冊子を私は古い本箱の中から搜した。

いろいろなことが書いてある。書箋だの墨箋だの硯箋だの琴箋だの起居器服箋だのといふ目があつて、何處の紙が畫に適してゐるの、何處で出来た墨が好いの、何ういふ硯が好いの、何處の木で拵へた琴が好いのといふことが短いうまい氣のきいた漢文で書いてある。琴を研究した章などは殊に面白い。古琴の上に現はれた斷紋などを書いたあたりは殊に藝術的である。國を異にし、年代を異にした人に、かういふ細かいなつかしい研究——むしろ藝術的研究のあるのは面白いと私は思つた。私は病床に横はりながら支那の茶の産地、茶の光澤、茶の種類などといふ細かい觀察と研究とを其處に見た。

『さう捨て、了はないで、努力したいと思ひますが。』かうある女は言つた。

理想に生きる女、努力に生きる女、さういふことを私は他日ある人と話した。『何うしても女はさうです。其處が男と女との違つてゐるところです。努力が根本ではない。理想が根本ではない。もつと先きがある。無類の努力の上に築かれたあきらめ、そのあきらめを人はよく消極的だと言つて笑ひますが、そのあきらめは、努力を無數にやつたあとに起つて來た氣分だといふことを考へなければなりません。』

努力に絶望しない女は憐れむべきものではあるが、智者とは言ふことが出来ない。女には意と智とが乏しい。或は全然ないかも知れないと思ふ。『こんな話を私はした。努力の空しいことを感ずる心に、始めてひろい空間がひらけて來るといふことなども私達は話した。』

何を描いても、作者はその心境を磨かなければならない。かくさうとしてもかくすことの出来ないのは、その作者の心境である。そしてこの心境がいつもその藝術に最も主要な背景を添へて來る。かういふ感じがした、あゝいふ感じがしたといふ批評は、皆その心境に對して、ひとりで起つて來る言葉である。

従つて批評家は、その批評をするに當つて、先づ第一に、何より先に、この作者の心境に入つて行かなければならない。材料の大小、内容の浅深、さういふことも無論あるにはあらうけれど、唯さういふものを眞向から振翳して、むきになつて 藝術品に向ふといふことは、決して細心な批評と言ふことは出来ないと思ふ。題材も内容も肝心ではある。しかし最も尊むべきは、作品の背景を成した作者の心境であることは元より言ふを待たない。

私達はさういふ細心な批評のいつもわが文壇に乏しいのを憾みとする一人である。文壇何ぞ題材論、内容論の多きことよ。とかう私は言ひたくなる。

## 人生の一宿驛

今年ほど暖かな年はない。雪がまだ一度も都の瓦甍を白くしないのでもそれがわかる。それに風がない。静かなのんびりしたやうな日が毎日続く。私は長い間病床に居て、野に萌え出づる青い草を思つて居た。

病氣になどなつたことのない男が、かうして長い間身を床に横へて居るといふことは、渺くとも其男の生活の一變化であつた。昔のことがよく思ひ出された。忘れて居たことが思ひもかけず蘇つて來た。私は細君を捉へて、自分の十歳位の時の話を幾度となくして聞かせた。

「さうですかねえ、貴郎はそんな子でしたかねえ。」

細君はかう言つて笑つた。

二子縞の短かい着物を着て、前垂をした稚い自分の姿が其處にも此處にも見えた。泥濘の深い大通りを乗合馬車がガタ／＼と通つて行くと、それと自分は競争していつも驅けて行くのが例であつた。時にはまた物賣店の前に立つて、十分も二十分もちつといつまでも見て居るやうなこともあつた。腕白な悪戯な頑童！それがさまざま／＼な場所に置かれて見えた。

京橋から日本橋の間は、何んな日でも通らない時はなかつた。其頃流行つた唄などを唄ひながら、わざと家々の軒下を選んで通つた。雨の中にしるしのついた番傘をぐる／＼廻しながら走つて行つた自分は、今かうして此處に寝て居る。其間に三十年の月日が經つてゐる。

三十年と謂へば、この正月の七日に、私は義兄の家と呼ばれて行つた。それは亡姉の三十年忌に相當したからである。その姉は三十年前に二人の幼い兒を残して肺を病んだ死んだ。年は二十三位であつた。其時分、私はよくこの姉の世話になつた。蕎麥屋になど度々伴れて行かれたものだ。その三十年忌を其同じ家、其の同じ二階でやつた。

義兄はもうお爺さんであつた。後妻に來た義姉は腰を曲けて、シメのついた櫛を、その亡姉の神前に捧げた。私達は昔のことを考へずには居られなかつた。

其二階から富士が見えた。其二階の欄干は私が七八歳の頃、母親に伴れられて、凭りかゝつて富士を見たその同じ欄干であつた。私は夕日の消えて行くのを見ながら、其時分のことを話した。随分、いたづらな兒だつたよ。義兄はこんなことを言つて笑つた。

何も彼も過ぎて行く。何處へ？

さうしたことを考へるやうな氣分の日が多かつた。努力、勞働、奮勵——さうしたものに欺かれて送

つて来た日が更に振返つて考へられた。

空虚——何も彼も空虚だ。

でも、私に取つては、まださうばかり言つても居られないやうな気分が保留されてゐた。

私は絶えず五六年以來のことを振返つて見るやうな人であつた。混乱した、雜り合つた、何處からこざらがつた糸を引出したら好いかと思はれたやうなゴタ／＼した精神生活の中から、今では私は渺くとも一步を踏み出して居る。言ひかへて見れば、離れて来て居る。觀照の出来るやうな立場に立つて居る。

長いライフの中の一宿驛——私は今通つてゐる一宿驛のさまが絶えず頭を通つて行つた。前の三十年、それは現に自分が通過して来たのである。後の三十年、それは自分が通過して行つた人々の状態を明かに見て知つてゐるものである。だから今ある一宿驛に立つて展望して見ると、輪廓だけかも知れぬが、兎に角長いライフの眞の状態が分明と眼に映つて来る。其處から生れて来た気分——それを私は病床に身を横へながらつく／＼と考へて見た。

物に壓迫せらるゝやうな心持のなくなつたことが一つ。物を恐るるといふ念のなくなつたことが一つ。今一つ最も大切なのは、自己を自己としては見るが、自己を自己として他人の中に立てやうとする念の薄くなつたことである。

何うでも好い。無論さういふ心持ではない。さうかと言つて、自暴自棄と言つたやう烈しい心持では

ない。靜かに考へよう。靜かに人生のことを考へて見よう。さう言つたやうな心持である。

靜かにして居たい。世の中の波の巴渦の外に居たい。さうしてそれをちつと見て居たい。

批評家の間には客観化といふことが容易く言はれるが、實際、客観化といふことはさう容易く言はれることだらうか。

客観化と言ふことは、其人々の心持が世相の千變萬化を見たり聞いたりした上に自然につくられて来るものでなくてはならない。また、作者が自然に持つて生れて来たものから流れ出して来るやうなものでなくてはならない。

客観化の十分に加はらない作品は、決してすぐれた藝術品と言ふことが出来ない。また客観化の十分でない批評は、創作的批評と言ふことが出来ない。

病氣が治つてから、私は郊外に散歩に出かけた歸りに、ある町の大通りを通つた。それは大きな青物市場があつたり、遊廓があつたり、大きな橋があつたりするやうな通りであつた。

私は何年にもこの通りを通つたことがなかつた。で、昔のことが流るゝやうに私の胸に押寄せて来た。

それは丁度二十五年も前のことで、私はその近處に居る友達と一緒に、よくその橋の下から舟を借りて、東京のセイヌとも言はれるこの川を漕ぎ廻つた。鐵橋の桁に舟を繋いで、橋の畔で買つて来た稻荷鰯を食つたり、下流の竹藪の陰の渡船小屋に水を貰ひに上つて行つたり、蘆荻の中に、全く舟を埋めかくして、そこで空を仰ぎながら大きな聲で詩を吟じたり、私の書生時代は、多くさうしたことに日が費された。

其の河岸は依然として材木屋の多い河岸であつた。橋の袂には、矢張貸舟をするその舟宿があつた。向う側には汽船の發着所が昔のまゝになつてゐて、白いペンキ塗の汽船の煙突からは、白い煙が絶えず川になびいてゐた。

橋の上は昔のやうに矢張ぞろ／＼と車や馬車や人が通つて行つた。

其時、郊外にあるある小さいまびしい田舎町を私は通つた。

島から入つて来て島の中に出て行くやうな町であつた。それは折れて曲つた通りで、中程に広い川が流れて居た。そこに架つた橋では、五厘の橋錢を取つた。橋の板は半は朽ちてゐた。

昔は大きな街道筋の一宿驛で、大名の行列も通つた町であつた。大きな旅館などもあつたに相違なかつた。それが今では全く繁華から離れ、活動から離れ、すぐ近くを走る汽車の停車場さへも、名もない

村に奪はれて、此處にこの町があるといふことは誰も知つてゐるものはない位であつた。

町に漂つた衰殘の空氣——それが不思議にも私の心のある離れたアーチスチックな境につれて行つた。ロオデンバハのブルージュの町に於けるやうに、この衰へた町を歌ふ詩人が一人位あつても好いと思つた。白い壁、軒の低い家と家との間にある青菜の畑、大和障子のピツシヤリ閉つた茅葺屋根、靜かに餌をあさつてゐる鶏、其處等にさびしさうに遊んでゐる子供、何れにも一種面白いカラーがあるやうな氣がした。

都會近くにかうした衰へた町があるといふことが特に私の心を動かしたらしかつた。私は靜かに其町の通りを歩いた。

### ある小説の中から

かれを不安ならしめるものは他ではなかつた。本能の底から來る耻辱を知らない力強いかれの感覺そのものであつた。かれは破船した舟か何ぞのやうに悪魔と神との間を絶えず往來してゐた。悪魔ももう彼の味方ではなかつた。神もまだその顔を此方に向けなかつた。何方に行つても、かれは引返して來なければならなかつた。『何故、本能の底の聲に我々は従ふことが出來ないのか。何故それに向つて深く墮ちて行くことは出來ないのか。』一方ではかう叫ぶと共に、一方では、『憐れなる汝弱きものよ、本能に従

はなければならぬやうな弱きものよ。上を仰け！ 其處には扉が汝の前に開かれやうとしてゐるではないか。』と叫んで、怒えず其方へと心に向けてゐた。神祕な扉がかれの前に固く閉ぢられてゐた。

感激して、頬を涙が傳つてゐるやうな時に突然起つて来る汚れた不潔な不思議な奇蹟——それは火花の散るやうに、潮の横溢するやうに、自制力をも理性をも何をも彼をも破壊して、そして幕地に突進して来た。何うすることも出来ないやうなものであつた。青い、紅い、黄い火がかれの血を燃し盡すやうに見えた。

と思ふと、時には自己の内性に反抗して、自から荒々しく心に叫ぶことなどあつた。『恐ろしいことだ。汝は既に快樂にのみ向つてその勢力を浪費したてはないか。さうだ……單に快樂にのみ…… Fear にのみ進んで行つたではないか、汝はあらゆる罪惡にもあらゆる不潔な行爲にも、快樂といふものを中心にしてそして進んで行くことを悔いなかつたではないか。その報酬は今、汝の醫すべからざる苦惱になつてゐるではないか。疲勞、倦怠——さういふものを更に汝は得ようとしてゐるのか。』

かれの心は浮んだり沈んだりした。『實行の背景を成してゐるものが、何故かう悔恨とか空虚とかいふものになつてゐるのであらうか。實行は實行そのものだけで、何故その責任を完うすることが出来ないのだらうか。』

『永久に理解すべからざるものは内部の恐怖である。我々の間に互に見えずに横はつて、そして繋がつてゐる恐怖である。その恐怖で、我々は毎日生きて行つてゐる。そしてその不可思議はいかなる哲學にも書いてない。』かれの讀んだ本の中に、さういふ言葉を發見して、かれは青鉛筆で、アンダーラインを引いた。『内部の恐怖、さうだ、互に見えざる、しかし離れざる恐怖だ。』

かれは人間の感覺の中に解剖されずに永久に残つてゐる不可思議を想像した。

かれは入つて行つた。

それは短かい間であつた。一方には長い扉がついて、其の中に、古い建物が屋根と屋根の破風造とを半分ほど見せてゐた。古い鐘が其處にかゝつてゐた。

入口の處には門があつた。そこを入ると、丸い窓が見え、カアテンが見え、夕日のさしてゐたのが見えた。

『寺かしら……』かれはかう考へた。かれは入口に入らうとして躊躇した。それは其處に一人の人間がやつて来たからであつた。それはまだ若い尼さんであつた。頬のあたりには若い血が漲つてゐた。頭から足元まで大きなベールで包まれてあつた。でその尼さんは神壇に添つて靜かに歩いて、中央のところに行つて立留つて、床の上に體を投げて、烈しいエクスタシーに陥つたやうに長い間そこから身をも起

さなかつた。あたりはしんとしてゐた。夕日は靜かに右の丸窓から線を成して一面に入り込んでゐた。

かれは少くとも十分ほど其處に立盡した。神に跪く若い尼さんの祈禱は、かれの心に言ふに言はれない感激を與へた。『この心を何故私達は尊敬することが出来ないのか。何故私達はこの心の中に神を認めることが出来ないのか。私は長い間、それを無智と形式とに歸して冷笑した。僧侶達の行爲は、唯長い習慣の間に成立つた形式に過ぎないと思つて罵倒した。しかし、智は人間に何物をもたらして來たか？形式の破壊は人間にどれだけの自由を與へたか。……無智と智と……この不可思議な世界に、何が無智で何が智であらうか。』

かれは哲學や藝術にあらはれた多くのシーンを此眼前の小さな光景に比べて考へずにはゐられなかつた。

やがて若い尼さんは立上つた。靜かに神壇の方へと歩いて行つた。白いベールは靜かに暗い寺院の空氣の奥の方へ動いて、そして見えなくなつて行つた。

かれは長い間立盡してゐた。

教會堂で過した二三日の後には、かれには恐ろしい反動が來てゐた。祈禱に打込んだ心の底には、本能から來る恐ろしい衝動が凄じく渦を巻いてゐた。

其處にも此處にも、その女が見えた。自分の家の中でも、寺院の中でも、街頭でも、街道にある窓の傍でも……。その力強い引力はかれの全身に燃えわたつた。

蒸暑い天氣が一層それを堪へ難くした。空は暑い日の光で満たされ、神經は萎えてはなれんゝになり、意志は際限なく弱められ、無數のわるい考へが體の骨といふ骨に蝕ひ込んで來た。

かれは毎日日の暮れて行くのを恐れた。

夜——其處にははなやかな灯のかゝやきがあつた。八時頃から路にあるカッフエといふカッフエは皆な活々として蘇つて來てゐた。そこには酒と女と肉とがあつた。唄と舞踊とがあつた。あらゆる誘惑——あらゆる悪徳——あらゆる耽溺——人の魂をも亡くさせなければ止まないやうな妖艶な色彩——そこにはかれの Florence がゐた。黒い瞳をした、長い髪をした、男の體を自分の餌にしなければ置かないといふやうな抱擁の力を持つた女——。

かれは小さな書齋にゐた。日の暮れて行く頃が殊に堪へ難かつた。地平線の色はもう暗くなつた。それは暗い中に微かな光を雜へたやうな暗さであつた。屋根の光や、塔や、樹木の梢などが其處から見えだ。明るい灯もチラノゝした。

薄暗い空氣の中の寂寞——それは容易に堪へられないやうなものであつた。やさしい笑顔、白い肌、唇の爛れるやうな濃い烈しい酒、かれは今まで何遍この夕暮の寂寞に堪へかねて、明い灯を望んで急い

で町の方へ向つて走つて出て行つたらう。書齋の扉を後に、階梯を下りて行く自分の足音はいかに快活に響いたであらう。地獄の暗い穴の中から出て行くやうにしてかれは出て行つた。

かれは耳の痛みを感じた。軽いこころよい痛みだ。女はよくかれの耳を噛んだ。呪ふべき愛すべきわが

Florence 46。

かれはその感覚の力の強さを何うすることも出来なかつた。それほどその引力は烈しい複雑した力を持つてゐた。其處にも彼處にも其の面影が漂つて生々として動いてゐた。振り拂つても振り拂つても矢張かれの身の周囲を離れなかつた。

かれは猶その欲望を押へた。終には絶望して、せめてさういふところから遁れやうとした。かれは町から町へと歩いた。暗い巷路のやうなところをも歩いた。疲勞——それがかれを救けて呉れるだらうと思つて、體が綿のやうになるまで歩いた。しかし、矢張駄目だつた。闇の中にも、灯の中にも、かれの讀む夕刊の字の中にもその女がゐた。かれは終にはその女がゐる家の方へ足を向けて行つた。階梯を上つて、扉を明けて入つて行つた。

その翌朝、かれは何んなに悔いて、何んなに疲れてそしてまた何んな憎悪と何んな悔恨と何んな絶望とを抱いて、その階梯を下つて來たであらうか。かれは涙を流してゐることさへあつた。

一のものから二のものに移らうとして、かれは悶えた。感覚を離れなくにするといふことは、一つの

感覚を薄くする所以でないといふことをもかれは知つた。感覚を無數に分裂させても、その一の感覚を何うすることも出来ないものであるといふことをかれはやがて知つた。

祈る心と愛する心の間にかれの苦痛は横はつてゐた。愛することが何故わるいのだらう。愛する心と言ふことは、祈る心といふことと何故一致しないだらう。かれは愛する心がなければ祈る心もないものだといふことを考へずには居られなかつた。かれは廣い世の中を見渡した。愛しもせず、祈りもせず、ゐる人が多かつた。それが多數であつた。何故自分もさういふ人達と一緒になつて靜かにしてゐることは出来ないだらうか。

かれは馬車の窓から外を見た。

『もうぢきに違ひない。』

かれはかう獨語した。島と林とが路の傍にあつた。かれは御者にたづねた。

『もうぢきだらうね？』

『まだ、もうすこしあります。』

『遠くから、その寺が見えるかね。』



『いゝ見えませんね。その寺はごくひくい谷のやうなところにありますから。』  
馬車は軌つて行つた。

かれは病院に行く患者のやうであつた。『さうだ。病人だ。心の病人だ。』かうかれは自分で言つた。悲しい哀愁がかれの心に簇つて集つて來た。

かれは通れて來た都會の人達のことを考へた。はなやかに一生を送ることより他に何も考へてゐない國民のことがかれの頭に上つてゐた。French と Flemish との區別、German と Italian との區別などを考へてゐた。

馬車は丘のやうなところを通つて行つた。林が丘の縁を縫つてつゞいてゐた。薄い霧が被布のやうにかゝつて來た。ふと路は丘と丘との間から低い長い坂へとかゝつて行つた。林で蔽はれた大きな谷が前に開けた。

『寺が見えませう。』  
かう御者は指した。

成程、かれのゐる丘の上から、その大きな屋根が林のこんもりとした中に見えた。池のある庭園、森を帯びた牧場などもそれと指さされた。馬車はガタ／＼と動いて行つた。暫くすると、そのシーンはまた林に遮られて見えなくなつた。灌木の林で縁取られたヂツクザツクした路は、段々下へ／＼と下りていつた。

遂に馬車は其の寺の前に來た。長い厚い灰色の塀がぐるりとその周圍を圍んで、中央には、鐵で出來た大きな門がびつしやりと固く閉ぢられてあつた。四邊はしんとしてゐた。人の姿も見えなかつた。

『明日また迎ひに上りませうか。』  
かう御者が言つた。

『いや、いらぬ——』  
『ぢや、お寺に長くゐらつしやるんですか。』驚いたやうな顔をして御者は言つた。やがて歸つて行く馬車の姿が林の中の長い坂の上に見えてゐた。

かれは荷物を持つたまゝ其處に立つてゐた。かれの胸は烈しく波打ちつゝあつた。不知不解の世界、神祕の世界、不可思議の世界——そこにゐる前には誰も感ずる躊躇をかれは強く烈しく感じた。Florenceの顔が掠めるやうにかれの眼の前を通つて行つた。

### 僧房にわかるゝとて

あと二三日で、私はこの僧房を去らうとしてゐる。私が去つて了ふと、門も、入口の雨戸もびつしやりと閉つて、家は再び鼠の巢と黴の匂ひになつて了ふであらう。そして、誰かあとの人が入つて來るまでは、圍爐裏の上の鐵瓶も、机の前の座蒲團も、棚の上の貧乏徳利も、私の置いたまゝになつて何年

も何年も残つてゐるだらう。私が始めてこの僧房に入つて来た時、到る處に私の前に住んでゐた人の痕跡を発見した。戸棚を明けると、醬油が残つてゐた。砂糖が残つてゐた。茶が残つてゐた。罐の中の豆に蟲がついて、蓋を取ると、ワンと言つて氣味のわるいやうに飛び出した。

『もう四年になりますからね。』かうその時主僧が言つた。

私は私のおと入つて来る人のことなどを想像した。

痕跡といふことに就いて私は考へた。人間の残した跡——それは意味の深いことだ。と、私の頭には含満の淵の岸にある地藏さまのことなどが浮んで来た。獨歩と一緒に散歩した時、『この地藏さんは人間の跡だね。かういふものを人間がつくつて残して行くッていふことが意味があるね。この地藏さんの像は石で刻んだものだとは思はれないね。人間がかうした形をつくつて残して行くといふ心持が面白いぢやないか。』かう獨歩が私に言つた。私はそれを思ひ出した。

私は来た當座、一緒に来た書生に話した。『痕といふものは書けるね。残つてゐた物の形で前に住んだ人のことを想像するといふのは面白いことだね。一つ書くかね。』こんなことを私は言つた。書生はまた書生で、押入の中から、女のする船底枕などをさがし出して、『先生、先生、こんなものがありましたぜ。お寺にかういふ枕のあるのはちと變ですね。』さも大事を発見したやうな顔をして言つたりした。何かめづ

らしいものはないか、何か前に住んでゐた人の秘密をかぎつけるやうなものはないか。かう思つて私達は埃の一杯にたまつてゐる戸棚だの押入だのを明けた。

『私の後に来る人も、矢張さうしてあちこちをさがして見るだらう。』私はかう思つてさびしい氣がした。

私の僧房には、さまざまの人が来た。そしてその度毎に、いろいろな心が動いて、いろいろな言葉が交されて、そしてまたもとの寂寞へと歸つて行つた。もとの寂寞——こればかりは何うすることも出来ないものだ。

ある人は私の僧房で、生活の方法を變へようとした。ある人は靜かに疲勞をやすめようとした。ある人は、『もう東京に歸るのはイヤだ。いつまでもかうしてゐたい。』と言つた。私をこの僧房にたづねて来た故郷の妓も、短かい滞在の間にいろいろな困難に出會して、十日ほど前に暇乞に来て、そして國の方へと歸つて行つた。何も彼も過ぎ去つて行つた。元の寂寞が後を領した。

私の心の上にもいろいろな變遷があつた。私は私の半生を靜かに振返つて見るやうな人であつた。烈しく進んで行つた私、何も彼も構はずに進んで行つた私、四面の壁に突當るのも知らずに驀地に出て行つた私——それを私は離れて見ることが出来た。個人と社會といふことなどを深く考へた。私は開かな

い扉に向つて立つてゐる人であるといふことをつくづく感じた。私はさういふ心持の中で、Huymansの『En Route』を読んだ。Elaubertの『Bouvard and Pecuchet』を読んだ。テカダンのかけにあるシンボルといふことを考へた。

私は好んで老いた人と話をした。八十三になる婆さんと圍爐裏の前で長い間話をしたりした。年を取つた僧は、私の爲めに長い昔話などをして聞かせた。

しかし、私は矢張都會の色彩を忘れることが出来なかつた。私は新聞すら讀まないやうにしてゐるが、それでも都會の色彩と響とは、絶えず私の胸を躍らせた。心の消長、心の盛衰、心の躍進、それにはいつも私は征服されてゐた。

加行の徒にならうと志したことも一度や二度ではなかつた。しかし、その加行の徒が矢張惡魔の障礙を防ぐことが出来ないのを見て、私はいつもその願ひから後に戻つた。『流轉か？ 躍進か？ それ以外にライフの真相はない。』かう私は思つたりした。

私の寺の門を出て、輪王寺の傍を通つて、そして東照宮の正門に行く間を、私は午後四時過によく歩いた。其時分には、其處を誰も通つてゐなかつた。大きな杉の間の路がしんとしてゐた。私は其處でよく過ぎて行くライフを頭に浮べた。

私はさびしくなると、いつも輪王寺の方へと出かけて行つた。大きな門を入つて、三佛堂の扉の固く

閉つたのを左に見て、そして黒い板塀の處に行つた。そこにある木戸を明けると高く四邊に音を立てた。其處に私の友達のと尚さんがゐた。

『ゐますか。』

かう言つて私は上つて行つた。

『もう何うしても歸りますか……。もう少ししたら好いでせう。まだ、今月一杯はそんなに寒くなりませんから。』

『でも随分長くなりますからな。』

『五月でしたね。』

『……。だから、もうかれは半年ゐるんですよ。大變お世話になりました。』

『それでもちつとは何か出来ましたか。』

『思つたほど出来ませんが、いろ／＼なことを考へましたよ。それだけでも此處に来てゐた甲斐はあると思ひますね。』

『もっ少しゐらつしやい……。この下旬には、立木の觀音堂の入佛供養があつて、中禪寺が賑やかですから。』

かう和尚さんはとめて呉れた。

馴れた空気に離れて行くのは、何となくさびしいものだ。僧房に馴れた私は、僧房をたづねて来る人にも馴れた。御用聞の商人達とも懇意になつた。中禪寺のつた屋の主人からは、お客をつれて私が度行つたので、大きな罎を苞に入れて、熊笹で包んで、そしてわざ／＼送つてよこして呉れたりした。毎日煙草や繪葉書を買ひに行く店の頼の赤い上さん、髪を綺麗にかけた番頭さん、東京の橋場から來てるるといふ元氣な豆腐屋の小僧さん、八百屋の息子、蕎麥屋の若い衆——さういふ人達とわかれて行くのも何となく物さびしかつた。

神橋の傍の雜貨店にゐる娘は此頃姿が見えないが、何うかしたんぢやないかなどと私は思つた。それはお伊勢さんと呼ばれてゐた。瘦せた、細つそりした娘で感じの常に變つて見える人であつた。あの娘は時によると非常に綺麗に見える時があるよ。さうかと思ふとそれほどでもないと思はれる時もあるがね。矢張、氣分の始終變つてゐるやうな氣質の娘だね。何處か複雑した心を持つてゐて、始終動いてゐるんだね。などと私達は評判した。夏の夕方などには、派手な中形に黒縞子の帯なんかをしめて、薄くお化粧をして、店の前に立つてゐたりした。『まア……』なんと言つて笑つて奥の方から立つて來たりした。私が歸つて行つたあとでも、そのお伊勢さんは、矢張、さびしさうに白い弱々しい顔を見せて店に坐つてゐるのであらう。紅葉の客もやがては來なくなつて、雪がこの町を白くするであらう。かう思ふと、私は

一層さびしい心持がした。

五六日前には、東京から大勢客が來た。そして一緒に伴れ立つて、中禪寺から湯元の方へ出かけた。來た日は曇つてゐたが、其翌日は一點の雲もないといふやうな晴れた日であつた。僧房に半年ゐた紀念として、今日は大いに遊ぼう。かう私は思つた。東京から來た頭の丸い人の背には、三味線が一挺、風呂敷に包まれて負はれてゐた。『これをおかつかいで、山の上まで行くやうな特志なお客さんは、滅多にないだらうね。』などと私達は言つて笑つた。一行の中には、小唄の上手な姐さんと無邪氣な女學生とが雜つてゐた。

私達は明るい湖水を前にした室で、早くも三味線の棹をつないだ。訝えた撥の音は靜かな空氣の中に際立つて鮮かに響いて聞えた。實際明るい感じがした。紅葉に照つた日影は、鏡のやうに澄んだ湖水の周囲を取巻いてゐた。

『見てる、見てる。』

かう誰か言つたので、後を振り返ると、隣の普請場にゐた大工達は、めづらしいので、手をとめて此方を見てゐた。家の女中達も驚いたやうな顔をして、廊下に来て私達の唄つたり躍つたりするのを見てゐた。

私達のゐる三階の欄干からは、湖水の岸にある雁木がすぐ下に見えた。大きなスワンが一羽綺麗な碧い水に浮んで泳いでゐた。雁木のところには、傳馬が一隻つないであつて、赤いメリンスの座蒲團が五つ六つそこに置いてあつた。いつでも漕ぎ出せるやうに、櫂がもうちやんとつけてあつた。『あれで行くんだね。』友達の一人はかう言つて楽しさうに私の方を見た。

麥酒に果物に煙草盆を乗せた船！ 『中禪寺の湖水で一つ大に三味線を鳴らすんだね。』かう言つて私達はやつて来たのだ。やがて三味線の音は流るゝやうに湖水に響いて聞えた。

菖蒲ヶ濱では、中禪寺で頼んで置いた馬車がもう先に行つて待つてゐた。その黒い馬車は船がまだ岸につかない中から見えてゐた。『もう、馬車が來てるぞ。』かう言つて私達は笑つた。

友達の一人はわざと頬被りをして、御者臺に上つて、老いた御者と並んで腰をかけた。喇叭を鳴して見たりした。瀑のある或る谷川の淺瀬では、そこに泳いでゐる鱒を見附けて、それを捕らうとして、私達はざぶざぶその中に入つて行つたりした。戰場が原は時の間に過ぎた。

湯瀑の上のところに行つた時には、もう日が全く暮れてゐた。奥の奥の靜かな温泉場、湖水を隔て、灯のチラ／＼する温泉場——その奥にある旅館の二階の間は其夜、何んな賑やかな光景を呈したであらう。十年以來の流行唄といふ流行唄は皆な其處で唄はれた。清元も出れば常磐津も出る。小唄も出れば、奈良丸くづしも出る。後にはカツボレから手品まで出た。それに引よせられて客と言はず女中

と言はず主人主婦と言はず、家にゐるすべての人達は皆な廊下に來てずらりと並んでそれを見てゐた。賑やかな一夜であつた。

あくる朝は宿の船で送られて、靜かな湖水の上を湯瀑の落口まで來た。そこでも私達は訝えた三味線の音の朝の空氣に漂ふのを聞いた。絃聲和籬聲——何とも言はれない靜かな靜かな氣分であつた。

湖畔で折つて來た八汐の紅葉の大きな枝は、笈の大きな桶に一杯になつて挿されてあつた。笈の水はその紅葉の下からちよろちよろと小さな音を立て、落ちてゐた。昨日はそれに雨が降りかゝつて、一層鮮かな色を見せた。

『しかし、もうお別れだ。』

私は半年の僧房生活を振返つて見た。さらば、山よ、水よ、笈よ……。

東京の三十年

## 東京の三十年

### その時分

その時分は、東京は泥濘の都會、土藏造の家並の都會、參議の箱馬車の都會、橋の袂に露店の多く出る都會であつた。考へて見ても夢のやうな氣がする。京橋日本橋の大通の中で、銀座通を除いて、西洋造りの大きな家屋は、今の須田町の二六新聞社のところにあつたケレー商會といふ家一軒であつた。それは三階の大きな建物で、屋上には風につれてぐるぐる廻る風測計のやうなものがあつた。何でも外國の食料品か何かを賣つてゐた。

三越はまだ越後屋と言つて、大きな折れ曲つた店に黒い中に白く抜いた字の暖簾が長くかゝつてゐて、中から、番頭や小僧の「おー、おー」と言ふやうな一種諧調のある呼聲が聞えた。通りも狭く、成ほどロチの眼には汚い狭い暗い東洋の都會といふ風に映じたであらうと思はれる。須田町の突當りは、楊柳などの氈々とした廣い火除地で、例の昔の錦繪にある東京新名所の石造の目鏡橋が架つてゐた。

『お天保、一枚にまけーてあけます。』

餅か、それともカステラのやうなものか、それは忘れたが、元氣の好い江戸式のはつぴ股引の男がかう言つて觸れて歩くと、大通の店から子供や娘や上さん達が争つて出てそれを買った。その天保錢一枚の餅は非常に賣れた。私は丁度その頃、十一位の小僧姿で、よく立留つては、指を叩へて、人々のそれを買ふのをちつと見てゐた。

それにしてもなつかしい天保錢！ あの小判形の大きな天保錢！ 其時分には、それ一つ投げ出して簡単に買へたものが澤山にあつた。一錢に二厘足りないの、馬鹿者、うつけ者の渾名に使はれたが、實際は何うして！ 中々便利な通貨であつた。豆腐、蕎麥のもりかけ、鮭の切身、湯錢、さういふものがすべてそれ一枚で間に合つた。『あの小僧、寒いのに可哀相だ。天保錢でも呉れてやれ。』かう言つて、私は處々でそれを貰つた。

今では餘程の田舎でなければ見ることも出来ないガタ馬車が、例の喇叭を鳴して、雨後の泥濘の中を凄しくはねを飛ばして通つて行つた。私はよくそれと競走して走つた。時には車掌の先に走つて行つたあとをめぐらして、その車掌臺に小さな胸を當て、脚を空さまにして得意さうに唯乗をした。『この小僧奴！』車掌にはかう言つて常に叱られた。

小さな小僧は、道草を食はずにはゐなかつた。その大通でも、よく立留つて長い間何かを見てゐた。

漆を大きな盤でかき廻してゐる店、錦繪で一杯に店を飾つてゐる繪双紙屋、大晦日近い羽子板屋の店、其時分には、大通に、まだ店先で、はぜや蝦のゴミを長い箸で小僧が振り分けてゐるつくだに屋の店などもあつた。さういふ處にも私は立盡した。其處にゐる小僧と舌の出しつこなどをした。

随分いたづら小僧であつたに相違ない。京橋と日本橋とをいかな日でも渡らないことはなかつたが、大抵其時分流行つた唄なんか唄つて通つた。『てけれつつのば』といふ唄の流行つた頃で、『合乗、ほろかけ、てけれつつのば』などと大きな聲で唄つて通つた。

娘は島田鬚に鹿の子しほり、赤い前懸などをして歩いた。麻の葉なども私に眼についた。夜になると、通に並んだ街燈、その時分はまだ石油であつた街燈を、點火夫が一つ一つ走りながら點けて行くのが面白かつた。私はそれと一緒に走りつこなどした。

時には必要な書籍の名を書いた紙乃至は帳面を持つて、通りにある本屋を一軒々々訊いて歩いた。私の奉公したのは、今も京橋の大通にあるIといふ本屋であつた。其頃はまだ須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛などといふ古い大きな本屋があつた、四角な行燈のやうな招牌が出てゐたり、書目を書いた厚い板が並んでかけられてあつたりした。私が主人から命ぜられた書附乃至帳面を一々見せてきいて歩いた本屋で、今日猶残つてゐるのは――昔に比べて更に繁榮の趣を呈してゐるのは、丸善一軒ばかりである。

夜は通りに種々な食物の露店が出た。鮎屋、しる粉屋、おでん燗酒、そば切の屋臺、大福餅、さうい



ふものが小さい私の飢をそつた。中で、今は殆どその面影をも見せないもので、非常に旨さうに思はれたものがあつた。冬の寒い夜などは殊にさう思はれた。それはすいとんといふもので、蕎麥粉かうどん粉かをかいたものだが、其の前には、人が大勢立つて食つた。大きな井、そこに入れられたすいとんからは、暖かさうに、旨さうに、湯氣が立つた。そこにゐる中小僧が井を洗ふ間がない位にそのすいとんは賣れた。

京橋の橋の西の袂には、今では場末でも見る事の出来ない牛のコマ切の大鍋から、白い湯氣が立つて、旨さうな匂ひが行きかふ人々の鼻を撲つた。立派な扮装をした人達も平氣で其處で立つて食つた。

食物と言へば、橋の袂には、大抵何處の橋の袂にも、さういふ露店が澤山に出てゐた。今日考へると、成ほど支那の市街といくらも異つてゐない。營口、牛莊、遼陽あたりに行くと、今でもさういふ光景を目にすることが出来るが、中でも日本橋の袂と、江戸橋の袂と、荒目橋の袂とが一番盛んで賑やかであつた。大きな傘を張つた鮎屋、眞鍮の大釜を光らせた甘酒屋、さういふ屋臺の向うには、例の魚河岸の白壁が晴れた碧い空に浮き出して並んでゐて、錆びた川には、傳馬や荷足が一杯につまつて見られた。

魚河岸はその位置も組織も今と變つてゐないが——家のつくりなども昔のままだと思ふが、雜糞と不潔と混雜とは、更に一層夥しかつたやうに私は記憶してゐる。一度其處に行つて、押せ押せで、出られなくなつて、泣きさうになつてから、懲りて、二度と其處に私は入らなかつた。

兩國橋の橋の袂は、昔、石川雅望の書いたやうな趣は、もうその時分は澤山残つてゐなかつたけれど、それでもまだ見世物はかなりに残つてゐた。センチメンタルな節で客を引くのぞきからくり、大蛇の招牌、不憫な小人島、さういふものが店を並べて、大きな聲で客を呼んでゐた。

京橋から、江戸橋を渡つて、兩國橋に行く間、その間にはいかに多くの江戸式の細い露地が縦横につけられてあつたであらうか。見馴れた大通りばかり歩いてゐるのは、平凡で退屈なので、私はめづらしい露地から露地へと後には歩いた。京橋の通りの向う側に、つまり大通りと中通との間に、細い露地があつて、それを抜けて行くと、海運橋の内國通運會社に突當つて、それでおしまひになつてゐるが、そこを出て、第一銀行の大きな建物を見て、鎧橋の方へと私はよく歩いて行つた。濱町、薬研堀の方へも私は毎日のやうに行つた。報知社の『郵便報知新聞社』といふ大きな招牌も、私には忘られないもの一つだ。

銀座の通りは、今もさう大して變りはない。勿論、家屋は大きくもなり立派にもなつたが、全體としてはあの通りである。尾張町の角に、博聞社と言ふ木屋があつて、後にそれが兎屋書店となつたが、その兎屋も今は跡方もない。

私の小さな小僧姿を私は東京の到るところの町々に發見した。最初、私は年上の中小僧に伴れられて、或は車を曳いたり、或は本を山のやうに負つたりして、取引先やお得意の家を廻つて歩いた。ある冬の

日は、途中から俄かにほた雪になつた。雪に艱まされて、背中には澤山な重い本、下駄にはごろごろと柔かい雪がたまつて、こけつ轉びつして、漸く一緒に行つた番頭に扶けられて車で歸つて來た。私はまた満九年十月になつたばかりの幼い子供であつた。「無理はないよ。まだ小さいんだから。」かう人々の言ふのを私はよく耳にした。私は田舎の城下町から祖父に伴れられて、寒い河舟の苦の中に寝て、そして東京へと出て來た。その時その長い碧い川の土手には、雪が白く處々に残つてゐた。舟の苦の上にも雪があつた。

私は祖父の手から離れ、叔父の手から離れ、私の奉公先の世話をして呉れた山王下あたりに住んでゐた役所の屬官らしい人の手から離れて、京橋の大通の角のその本屋へと來たのであつた。それは士族から商業に轉じたやうな家族で、主として農業の書を出版してゐた。今はもうあの主人も、眼のわるい主婦もこの世には居らぬであらう。一人息子は病氣で若くて死んだといふ話を後に私は聞いた。總領娘はその時分十八九で、綺麗な人だつたが、今居れば、もう五十四五になつてゐる筈だ。逢つただけでは無論、此方から名告つて行つても、さうした小さい小僧を記憶して居るか、何うか。

重に、私は本を負つて得意先を廻つたが、店にゐる時には、終日長く今もそのまゝになつてゐる風月堂の暖簾に對して坐つてゐた。隣は經節商、その隣は大西白牡丹であつた。前には角に袋物商の店があつた。

今年四十九になるある中老の主婦は私に言つた。「まア、さうですか。貴方がその時分、あそこに小僧さんをしてゐたんですか。さうですか。わるいことは出來ないもんですね。私の家は横町にありましたけれど、その時分、あの家の娘さんと懇意で、よく一緒に長唄を習ひに行つたもんですがね。何でもあの娘さんはお玉さんとか言ひましたよ。丁度あの横町の二三軒入つたところの右に長唄の師匠がゐるましてね。私なんか、その時分、随分お轉婆でしたよ。」従つてその主婦は、其時分のことを種々知つてゐて、私と話がよく合つた。「てけれつつのば」節も知つて居れば、すいとんも知つてゐた。大晦日の通の植木の賑かであつた話なども出た。

「あの時分、世界が何月何日を以て破滅するといふ大袈裟な讀賣が市中に出て、大騒ぎをしたことがありますか、覚えてゐらつしやいますか。」

私はかう訊くと、主婦は、

「さう、さう、さういふことがありましたね。よく覚えてゐらつしやいますね。幾日が大雨、幾日が大地震、幾日が大海嘯つていふ風に、その讀賣の紙に繪が書いてありましたね。」

「さうでしたね。」

かう言つて私は其時分のことを思つた。さういふ亂暴な、人の心を騒がせるやうな讀賣をして歩いて、その時分は、警察はまだそれを取締らうともしなかつたのである。それほど暢氣な野蠻な無智な都

會であつた。

「それから、今もありませんが、通四丁目の東側の角に、蕎麥屋がありますね。」

「え、え。」

「そこに、大晦日の夜、十二時過ぎになつてから、主人が小僧に蕎麥を奢るといふので、ぞろぞろ引張つて行かれたことがありますね。それをちやんと覚えてゐますよ。通りが賑やかでした。」

「あの蕎麥屋は、あの通りでは、中々舊いんですから……。」

遠い昔だ。實際夢のやうな気がする。しかし、家屋こそ立派になり、通りこそひろくなつたが、今でもまだ處々に、其の昔の商賣の店があるのを見ると、そこを通る度に、私は昔を思はずにはゐられなかつた。淋しい都會を、土藏造の家並の都會を、泥濘の中をガタ馬車の通る都會を……。

私の使ひに行くところで、一番遠いところが二箇所あつた。一つは高輪の柳澤伯邸で、一つは駒場の農學校であつた。其處に使にやらせられる時には、小さい私はことにうんざりした。表面は元氣よく飛び出して行くけれども、その道の遠いのはいつもへこたれた。殊に、高輪と青山の丁目の長いのが閉口した。何丁目、何丁目と書いてあるのを見い歩いて行くのであるが、それが八丁目、九丁目、十丁目と續いた。駒場の農學校は殊に遠かつた。

しかし、宮益の坂を下りると、あたりが何處となく田舎々々して來て、藁葺の家があつたり、小川が

あつたり、橋があつたり、水車がそこにめぐつてゐたりした。私はそこを歩くと、故郷にでも歸つて行つたやうな氣がして、何となく母親や祖父父母のゐる田舎の藁葺が思ひ出された。小さい私は涙などを拭き拭き歩いた。

駒場の農學校の廣々した校内の光景は、今もはつきりと私の眼の前にあつた。廣場の中に、ほつつきりさびしさうに立つてゐる校舎、その校舎の入口から入つて行くと、『よしよし、I堂の小僧か。』かう言つて、其處にゐる役人達が迎へて呉れた。暖爐などといふめづらしいものを私は初めて其處で見た。役人達は私に菓子などを呉れた。

高輪の柳澤伯邸に行く時には、海を見ることと、その岸を走つて來る汽車を見ることとが楽しみであつた。田舎に育つた幼い私には、海も汽車も何んなにめづらしく思はれたことであらう。帆や船や汽船の通つてゐる上に白く大きく鳥の翼のやうに浮んでゐる雲、それに私は何んなにあくがれて見入つたことか。又、その岸を縫つて、品川の方から煤烟を漲してやつて來る小さな汽車、それを何んなにめづらしかつて見たことか。その時分には、日本には汽車はまだ東京横濱間の一線があるばかりであつた。『汽車は出て行くサイサイ、烟は残るサイサイ、残る烟は癩の種サイサイ』などといふ唄が流行つて、汽車は都會に住む人達に取つても、まだ眼新しいめづらしいものであつた。その頃、フランスのあのビエル・ロチが日本に來て、この東京横濱間の汽車を罵倒して、寧ろ憫笑して、『日本にも汽車！ 小さな小さな汽

車！ がたがたと體も落附けて居られない汽車！」と言つてゐるが、それほど小さなあはれな汽車であるが、それでも此汽車の出来たのは、日本の政府に取つての最初の大事業であつた。私は十間ほど間を隔て、立つて、そして、その前を怪物のやうにして、凄しい音響と煤烟とを漲らして通つて行く汽車を眺めた。

芝の神明宮に入らうとするところの太々餅の店、そこから露月町に入つて行く細い長い通は、東京でも特色に富んだ面白い人通の多い通であつた。そこに、何でも山中何兵衛とかいふ大きな本屋があつたが、そこに私はよく使にやられた。私はその古本屋の多い露月町の通りを何遍歩いたか知れなかつた。金杉の大通りの何も見るものもない殺風景な光景に比べて、其處には、種々なものが巴渦を卷いてゐた。飲食店もあれば、繪草紙店もあつた。小さな本屋は軒を並べてゐた。その混雜した狭い通りを、本を負つた小さな幼い私が通つて行く……。

其處にも此處にも、さうした光景はいつも歴々と思ひ起された。この小さな幼ない姿が伴つてゐるために、その時分の東京がいかにはつきりと私に思ひ出されることであらうか。薩摩原の大きな荒涼とした原、仲店がまだ今のやうに賑やかではなく、觀音堂の裏に、砂書きや、猿や、居合拔や、いろいろのものゝゐる浅草の奥山、此方の門から向うの門まで、易者の店や見世物や飲食店で一杯になつてゐる西本願寺の境内、參謀本部の下の土手を下りて、濠端近くに湧き出している櫻田義士の首洗の清水、目鏡橋

からすつと上野の廣小路へと通つてゐる狭いゴタゴタした御成道、湯島の切通しの折れ曲つた細い通、さういうものが一つ一つ私の記憶へと蘇つて來た。それにしても、其時分の私は何を思つてゐたであらうか。商人になるつもりでゐたであらうか。

本當に、本當に遠い昔だ……。

### 川ぞひの家

深川の高橋を渡つて、それについて左に行くと大工町。その小名木川の水に臨んだ二階屋の入口の格子を明けて、その板敷で、幼ない私が何か音を立てゝゐると、

『何だね、録かえ……。』

かう言つて伯母が驚いたやうな顔をして出て來た。

母の姉で、やさしい芝居好きの伯母だつた。伯母は亭主に早く死なれて、針仕事などをして獨居してゐた。

『何うしたんだえ？』

私は鮭を二疋ほど持つてゐた。主人の使ひで、此方面に、歳暮の使ひに來た次手に寄つたのであつた。それを聞いて、安心したやうに、又は同情したやうにして、私を上にあけて、チャホヤして呉れた。長

火鉢の傍には、裁縫が置いてあつて、貸本屋の草双紙が読みさしてあつた。芝居好きの伯母は、そのをりをりの見物をつひぞ缺かしたことがない位で、團十郎、菊五郎、もつと以前の役者の藝などにもよく通じてゐた。私の母、それよりもこの伯母から私は文學的血統を引いたのではないかと思はれる位で、顔のくしやくしやした、優しい神経質の、話をする時にも、いかにも感激して聞くといふ表情をした。その眼からよく涙の流れるのを私は見た。

『芝居も好きが、お錢がかゝるから、それよりも貸本が一番安くつて好い。』

伯母はこんなことを言つて、春水物、近松物などによく讀耽つた。一日裁縫をして、夜、寝る前に二時間それに讀耽けるのが何よりも楽しみだといふことであつた。伯母の胸は、男女の情話や心中や悲しいあはれな物語などにいつも震へてゐた。長押には三味線があつた。伯母は常盤津をかなり巧に弾いた。

その時分伯母は四十五六になつたらうか。息子が一人、娘が一人、それも義理ある子で、伯母には肉親の子といふものがなかつた。それに、娘は後まで伯母の世話をしたけれど、息子は無頼漢で、其時分もう家にも寄りつかぬやうになつてゐた。

その近所には、殿様の下邸があつて、藩のものの上京したものが大勢住んでゐた。

二階から眺めた小名木川の朝夕の景色は、今だに見えた。通つて行く舟、ギイといふ櫓の音、をりを

り帆が大きな家のやうな影を欄干に漲らした。朝早く、川に臨んだ家々のまだ起きない中から、「あさり！むきみ！」かう叫んで、小さな權をあやつつて、ゆたゆたと流に漂ひながらあさり舟が通つて行つた。それをあちこちで呼び留めると、小舟は靜かに岸に寄つて來た。舟の中はあさりや蛤で一杯に滿されてゐた。伯母はよく呼びとめては、目ざるを持つて行つてそれを買つた。

午後には、蠣殻町から出て高橋に寄つてそして利根川へと出て行く小さな蒸汽がいつも通つて行つた。此汽船は私にはなつかしかつた。何故なら、それは私達が故郷から乗つて都會へ出て來た汽船であるから……。

母親も私達も東京から田舎に往來する度毎、いつもこの伯母の川添ひの二階屋に泊つた。母は伯母と殊に仲が好かつた。伯母は私の母を「おてつ、おてつ」となつかしさうにして呼んだ。

其時分、東京に修業に出てゐた私の兄も、日曜などによく此處にやつて來た。「この間、實が、好い天氣なのに、高い足駄を穿いてガラガラ言はせて來たよ。」こんなことを伯母は幼い私に話した。

いづれ其時は、御馳走になつたり小遣を貰つたりしたであらうと思ふが、私ははつきりとその時のことを記憶してゐない。唯今も覚えてゐるのは、私が鮭を二疋小さい體に負つて、寒さうにして出かけて行くのを門口に立つて遠くまで見送つた伯母のやさしい顔！あの世の中の艱難にやつれた皺の多い神經性のなつかしい顔！

## 讀書の聲

私は歩み寄つた。

讀書の聲は湧くやうに中から聞えた。それは昔の大名の長屋のやうなところで、なまこじつくひの塀の上に、處々街頭の塵にまみれ、西日の暑い光線に焼けた小さな窓が、つゞいて見られた。包荒義塾といふ大きな招牌がそこにかゝつてゐた。

路の此方側には、大きな榎の樹があつて、それが夏の日に涼しい蔭をつくつてゐるので、車力や立坊や乃至は其處等を通る人達が休んでゐた。

湧くやうに聞える讀書の聲！

私はなつかしくなつて、小さな姿を其窓に寄せた。其處には修業に出てゐる兄がゐるのである。しかし一面には、かういふ小僧姿の弟を他人に見られる兄を氣の毒がつて、私は公然兄を訪れて行かうとはしなかつた。無邪氣な憐れな小さな氣兼よ。

私は兄がひよつくり出て來れば好いと思つた。そして『お、お前か。』かう言つて、肩から手をかけて呉れ、ば好いと思つた。兄は一家の運命を双肩に擔つて、寝る目も寝ずに勉強してゐる。下駄を買ふ錢もなく、着たきりの着物で、ほろ袴を穿いて、そして一生懸命に勉強してゐる。それを思ふと、私の艱

難などは、まだ言ふに足りないかと幼心にも私は思つた。しかし、一面では、かうして兄が勉強してゐるのが羨しく且悲しかつた。

私は本郷の其の近所まで使に來た。弓町三丁目……包荒義塾……さう言つて私はたどつて來た。しかしそこが近くなつて來るにつれて、私はもう人に訊かうとはしなかつた。私は勉強してゐる兄の邪魔をしてはすまないやうな氣がした。

湧くやうな讀書の聲……

ふと格子戸を明けて出て來たものがあつた。私は慌て、其處を離れた。それは矢張兄と同じやうに破れた袴をつけて太いステッキを持つた書生であつた。書生は別に氣にも留めずに、そのまま向うへ歩いて行つた。

あの書生が兄だと好かつた。かうまた私は思つた。

しかし私は再びその窓際には立寄りなかつた。私は淋しい心を抱いて、其處から向うの方へ行つた。不都合があつて、一時私が歸されたのを、詫びて再び其店に行つた時のことなどが私の胸を往來した。その時、もう、そんなことをするんぢやないぞ、忘れても……な……』かう言つて、町の裏通にある小さな蕎麥屋で、なけなしの財布の錢をはたいて、天ぷら蕎麥を二つ奢つて呉れた……。私は私の眼に涙の滲んで來るのを覺えた。それをまぎらすために、私は路傍の小石を拾つてそして投げた。

兄の通つたやうな漢學の塾は、其頃到着の處にあつた。中村敬字の同人社、三島中洲の二松學舎、その時分の書生は、劔鋒を鳴して天下の事を談ずるといふ風なものが多かつた。弊衣破袴、蓬髮亂頭、さういふことを見得にして、中でも殊に脂粉の氣に近づくものをいやしんだ。包荒義塾は、八家文の素讀では名高い塾で、先生は、中村謙、峰南と號し、昌平黌の助講をしたことがあつた。その先生に、私も後に二三度逢つたが、今は生きてゐるか死んだかわからない。

## 再び東京へ

二間しかない田舎の藁葺の家、廣い煤けた臺所、そこから出て行くと、赤い素焼の土器の井戸側があつて、つるべはそれに伏せてある。井戸端には、夏は草がしゆつて、滴す水が夜の涼しい月の光に美しく碎けた。その近くにある梅の古い幹には、いつも美しく白く花が咲いた。

残つたお城の土手の萱原の中で、日和ほつこをしながら、揚つた風の動くのを楽しい心で見てる私、裏の切通を抜けて地藏裏といふ田圃の堀切の中に魚をすくひに行つてゐる私、いろいろさまざまな想像に耽つて將來をあれかこれかと夢んでゐる私、釣魚に夢中になつて釣竿とびくとばかり心を入れて母親に怒られた私、田舎の町をにきびの出た顔をして通つて行く私、小學校の庭で悪戯をしてゐる私、そろそろ色氣がついて來て藩の家老の家の娘を戀した私、その娘に途中で逢つたりすると、何うにもかう

にもしやうのないやうにとちつて顔を赤くした私、漢詩を作つて、『顕才新誌』といふその頃唯一の少年投書雜誌であつた雜誌に投書して、それが誌上に載せられたのを天にでも登つたやうに喜んでゐる私、城を取巻いた沼の四季の風物を拙い漢詩や和歌にして得意になつて、『城沼四時雜詠』などといふ本を作つた私——それが突然再び東京に出ることになつた。今度はすべて一家族を擧げて……。

十六歳の少年の眼には、十一歳の少年の眼に映つた東京とはもう餘程趣を異にしてゐた。それでも私は同胞中では、東京通であつた。少年などの知りさうにもないやうな通や巷路などもよく知つてゐた。その時は私は小網町の船宿で舟を下りて、そこから車で以前よく歩いた思案橋だの、爺橋だのあるところを通つて行つた。常盤橋から鎌倉河岸の方へ行く處に、唐辛を賣る古い家があつて、そこに大きな女の人影が置いてあつたが、——それを小僧時分によく見て通つたものだが、それが車の上から見えた。

十四年頃の東京と十九年頃の東京ではかなりに夥しい變遷を少年の私の眼に映じさせた。竹橋から半藏門へと抜ける宮城の松のたたずまひも、靜かに美しく湛へた御濠の水にも、一種變つた氣分と姿とを見せてゐた。私達は取敢ず牛込の奥のある大名の下邸の一部に住つたが、其年はコレラが流行つて、何處に行つてもその噂ばかり、避病院に送られる吊臺があとからあとへと來るやうな光景で、魚類などは一切食ふことが出来なかつた。黄い紙、立番の巡查、さういふものは到着の處で見られた。外になど出歩いて、いつコレラに襲はれるかも知れないので、私の少年の心は絶えずそれにおびやかされたのを覺

えてゐる。

其頃、例の保安條例が出て、名士が東京以外に追拂はれたので、新聞は一にその記事で賑つてゐた。しかし其時分には、段々開けて行くと言つてもまだ山手はさびしい野山で、林があり、森があり、ある邸宅の中に人知れず埋れた池があつたりして、牛込の奥には、狐や狸などが夜毎に出て来た。永井荷風氏の『狐』といふ小説に見るやうな光景や感じが到る處にあつた。

私は兄に就いて漢詩や和歌を學んだ。依然として、『穎才新誌』の投書家であつたが、一週間毎に出る一枚二錢の雑誌が買ふことが出来ないで、その毎週の發行日の土曜日の夜には、いつもきまつて遠い路を四谷の大通の錦繪双紙店に行つた。ところが、それが旨く店頭に並べられてある時は、自分の作が出たか出ないかを見るために手早くそれを翻すのはわけはなかつたが、運わるく錦繪と交せて挿んである時には、それが出来ないでした、か困つた。一度取つて貰つたのを買はずに歸つて亭主に睨められたことも一再ではなかつた。

私は英語を麴町の番町あたりの小さな餐舎に習ふ傍、内務省の官吏をしてゐた舊藩士の息子の許に種な話を聞きに行つた。その息子は今の高等商業のある護持院原にあつた大學豫備門に通つてゐたが、英語は殊によく出来て、學校でも秀才の名が高かつた。床次氏と同級であつた。石橋思案氏、山田美妙氏なども知つてゐた。

私は牛込の奥から、監獄署の前を通つて、士官學校の前の長い道を市谷見附へ出て、通は行かずに、わざと土手際を通つて、招魂社の裏門から九段の方へ出て行く弊衣破袴の少年姿を眼に浮べることが出来る。九段の下にある小さな公園、その緑の蔭は、私の少年期の空想を靜めるのに恰好なところであつた。その内務省の官吏の息子は名を野島金八郎と言つて、途中で學校を止してから、轆轤不遇、多くは支那や外國に官職に轉々して、副領事までは立身して、そして去年死んで了つたが、其時分、かれの父は内務省の向うの官舎に住んでゐた。私は暇さへあると、常に其處に出かけて行つた。

『おい、何處かへ行かう。』

私が行くと、其息子はいつもかう言つて私を誘つた。年少の私はこの人のハイカラな文學好きな竹を割つたやうなサクイ氣分にどれほど感化されたか知れなかつた。私はいかれと共に其時分の東京の市街を其處此處と言はずはうつき歩いた。神田橋の外のゴタゴタした下宿屋の並んだ汚ない空氣、元、學習院のあつた錦町から護持院原の傍を掠めて一つ橋通に出て行く路、鎌倉河岸から今川橋の方へ行く通などをも私達はよく歩いた。小川町の角にあつた三角堂といふ小さな店では、かれはよくインキやペンや鉛筆などを買つた。そこには肥つた豊かな頬をした娘がゐた。

かれには文學的氣分が非常にあつたにも拘らず、また絶えず英語の小説や歴史や傳記を繙讀してゐるにも拘らず、漢學の力がないので、文章が旨く書けなかつた。その方にかけては、兎に角漢詩や歌など



を作る私にいつも一目を置いてゐた。『僕も、もう少し文章が書けると、文學をやるんだがな。文學者、藝術家が何と言つても、一番すぐれた高尚な事業なんだからな。』何處からさういふ知識をかれは得たらうと思はれるほど、文學者、小説家に就いての新しい知識を持つてゐた。或はかれも紅葉や思案や眉山が養はれたその同じ空氣の中に住んでゐたためであるかも知れなかつた。かれは紅葉が豫備門で三馬研究をやつてゐる批評などをした。『でもな、君。今の奴等のやうに、三馬なんか研究してゐちや駄目だよ。西洋にはいくらでもえらい文學者がゐる。すぐれた小説がある。これからの文學をやる奴は、何でも外國のものを讀まなければ駄目だ。』かう言つては、かれは、『ヂツケンス、サツカレエ、ユウゴオ、ヂユマ、ゲエテ』などと言つて、昂然として、指を折つてその大文豪の名を挙げた。

かれはまた政治と文學との一致に就いてはなやかな空想を抱いてゐた。かれはよくビイコンスフィールド侯の話を持ち出した。『議會に出でては議長、内閣に入つては總理大臣、そしてあゝいふ小説を書く。實に理想的だ。』などと言つた。ビイコンスフィールド卿の作もかれは澤山に持つてゐた。『Venetia』、『Vivian Gray』などの話を私によくして呉れた。『佳人の奇遇』や、『雪中梅』などといふ新刊書もかれは常に讀んだ。

丁度須藤南翠が改進黨新聞にその『新粧之佳人』を連載してゐる頃で、その中には多少井上侯爵の舞踏熱の時分の空氣や人物が書いてあるので、かれは頗るそれを愛讀した。齋藤綠雨は、江東みどりといふ

名で、『今日新聞』といふ新聞に、一時代前の假名垣魯文張の戯作風の小説などを書いてゐた。

『この小説を書いてゐる男は、君、まだ小僧だぜ。』

かれはこんなことを言つた。

漢詩と、八家文と、和歌と、ビイコンスフィールド卿の小説と、『佳人の奇遇』と、英語と、馬琴と、春水と、岩見重太郎傳と、『穎才新誌』と、さういふ雜然とした空氣が、私の十六、十七の二年を領した。

かれはまたよく私を大通の方へつれて行つて、東京で名高い店の食物を食はせた。天金の天ぶらを始めて私に食はせたのもかれであれば、淡路町の中川の牛肉を御馳走したのもかれであつた。兩國につれて行つて松の鮓も食はせれば、不忍池畔の蓮玉の蕎麥も教へて呉れた。『まだ、一軒麻布に旨い蕎麥があるんだが、あそこのを食はなければ、蕎麥すきとは言はれない。その内、是非行かう。』

かうかれは言つた。

かれは感情的で、一人の姉の病死した話をしてはよく泣いた。家庭も好い家庭であつた。昔風によく働くあひその好い母親、厳格な頑固な背の高い父親、二人とも戦死した私の父親とは別懇にしてゐたので、孤兒の私達を氣の毒とも思つたのであらう。行くと、親類か何ぞのやうに常に私を款待して呉れた。私がすり減らしてかゝると土の附くやうになつた駒下駄をはいて行くと、その母親は、『録ちやん、古いのがあるから、これにおしよ。』と言つて、その友達の中古の駒下駄と取換へて呉れた。

## 憲法發布の日の雪

議會の開會式やら何やら、さういふ祝日が其所に澤山にあつたけれども、私は何も覚えて居なかつた。唯、憲法發布の日、その日の雪を私は覚えてゐる。

その前の日から俄かに雪模様になつたが、夜は人通りが絶える位に、凄しい大雪になつた。

『生憎だな、目出度い日だと言ふのに。』

かう私の母親は言つた。

私の家は、其時には、田舎から出て來た最初の山の手の奥の家からN町へと引越して來てゐた。兄と結婚した従妹の丸鬚には、赤い派手な手絡がかけられてあつた。

二疊、六疊、四疊半の三間。

それほどに降り頻つた雪もそれでもあくる朝はからりと晴れて、路は泥濘ではあるけれども、下町の方へ祝典を見に出かけて行く人達が澤山にあつた。日本橋、京橋には屋臺だの藝者の手古舞だの茶番だのがあつて、賑やかだといふことであつた。

『行つて見ないか、録。』

兄も母もかう言つて勧めて呉れたけれど、私は丁度何か文章か詩かを昨夜から作つてゐたので、『面倒

臭い』と言つて、終日家に引籠つて暮した。兄は弟をつれて賑やかな方へと出かけた。

近所の町々でも、種々祝典の催しがあるので、處々に出來た屋臺からは、賑やかな太鼓や囃の音が私のある窓の障子に響いてきこえた。障子には梅の花の影やら椿の緑葉の影やらが靜かに映つて、雪が白く庭に積つてゐた。

私は賑やかな外の氣勢を他ににして、獨り靜かに、机の上の白い紙に向つて、頻りに苦吟した。

伸びた頭髮の下からは、蒼白い私の顔と暗い私の眼とが光つた。水仙の花が黄く雪の中で咲いてゐるのを、私はをり／＼障子を明けて見た。

『録ちやん、行つて見ないんですか。』

かう丸鬚姿の嫂は、私の傍に來て言つた。外では賑やかな物音がした。誰も彼も出て行くらしかつた。今しも丁度町内の催しの假裝行列が、賑やかな囃につれて、私の家から少し出たところの通りを通つて行くのであつた。

奥の家主の若い娘達も、慌て、出て行く氣勢がした。

餘りに賑やかに、餘りに人がめづらしさうにして出て行くので、私もついそれにさそはれて、苦吟した筆を捨て、そのまゝ泥濘と残雪との午後の日影の中を、通りの方へと出て行つた。

近所の人達は皆な集つてそれを見てゐた。奥の十六位の若い娘の唐人鬚もその中に雜つて見られた。

私はほつと顔を赧くした。

假装の行列はやがて通つて行つた。武士に扮して長い兩刀を挟んだ男、奥女中に扮した女の白粉は少し剥けて、あとから腰元だの仲間だのが續いた。その前後を笛やら鼓やら鉦やらの囃しが賑かについて行つた。残雪の後の泥濘のハネがお姫様に扮した男の衣の裾にあがつてゐた。日が美しく輝いた。……

### 明治二十年頃

その時分は、大通に馬車鐵道があるばかりで、交通が不便であつたため、私達は東京市中は何處でもてくてく歩かなければならなかつた。牛込の監獄署の裏から士官學校の前を通つて、市ヶ谷見附へ出て、九段の招魂社の中をぬけて神田の方へ出て行く路は、私は毎日のやうに通つた。今日と比べて、人通は多く、車馬が絡繹として、九段坂の上などは殊に賑やかな光景を呈してゐた。

大村の銅像、其頃はまだあの支那から鹵獲した雌雄の獅子などはなかつた。丁度招魂社の前のあの大きな鐵製の華表が立つ時分で、それが馬鹿けて大きく社の前に轉がされてあるのを私は見た。そしてそれが始めて立てられた時には、私は弟と一緒に、往きに歸りに、頬をそれに當て、見た。夏のことなのでその鐵の冷めたいのが氣持が好かつた。私と私の弟とは一緒に神田にある英語の學校に通つた。

九段の坂の中ほどの左側に今でも澤山鳥のゐる鳥屋の舗がある。それが其頃にもあつて、私と弟とはよ

く其處に立つては、種々な鳥をめぐらしさうにして眺めた。インコ、鸚鵡、カナリア、九官鳥、さういふ鳥のゐる籠に朝日が當つて、中年の爺がせつせつと餌を店の前で播鉢ですつてゐた。目白、ひわなども居れば、雲雀、郭公などもゐた。

路が遠いので歸りにはいつも腹が減つて困つた。途上にある菓子屋、ことに餡パンを賣つてゐる店の前では、懐にいくらか金さへあると、何うしても足を留めずには通ることが出来なかつた。餘り意氣地がない。今日こそは、錢はあるが買はずに行かう。』かう固く決心しても、その前を通ると、ぴたりと止つた。不思議に思なれる位ひたりと留つた。

家近く來ると、屹度弟と次のやうな會話をした。

『今日はお菜は何だか、當つてこしよう。』

『僕は豆腐。』

『豆腐なんかあるもんか、屹度香々だ。』

『あるよ屹。』

こんなことを言つた。豆腐の煮やつこか、油揚げの焼いたのかがある時は、それでも御馳走であつた。大抵は澤庵の漬物か赤漬蓋かで、さらさらと飯を食つた。瘤寺の前に、旨い雪月花の鹽煎餅があつて、それを湯に行つた歸りなどに、兄と一緒に買つて歸るのも楽しみであつた。

私は其時分からかなりの健脚家で、東京のあちこちを地図を見い見いひとりで大抵は歩き盡した。高輪の泉岳寺、芝の公園、神明前、石川島、築地の居留地、東本願寺、さういふところをよく歩いた。殊に、漢詩と和歌とをやつてゐるので、近い名所——上野、浅草、向島などにもよく出懸けた。

それから、古本屋を見てひやかして歩くことが私には楽しみであつた。其頃には、東京市中には、到る處に古本屋の店が、丁度今日の雑誌店のやうになつてあつて、文集詩集などが澤山に並んでゐた。池の端の二三軒、芝の露月町の細い巷路、神田の明神下、湯島の細い坂路、さういふところを私は好んで歩いた。『東京才人絶句』とか、『天保三十六家詩集』とか、『竹外二十八字詩』とかいふ書を錢もありもしないのによく買つて来て兄に叱られた。

『こんな今の日本の人の詩なんかよむより、詩をやるなら、唐……宋……明……』かう兄に言はれたがしかし私の稚ない頭には、唐詩や宋詩よりも日本人の詩の方がよく解つた。

歌を詠むやうになつたのは、漢詩、漢文より後だが、その辭、歌の本は私の宅にかなり澤山あつた。それと言ふのも、父が多少歌詠みで、明治の初年の勅題に當選したことがあつたためであつた。恰野集、草野集などといふ歌集が澤山に宅の本箱の中にあつた。

その時分歩いた町で、私の記憶に残つてゐて、そしてすっかり變つて了つたのは、御成街道と、湯島の切通坂と、萬世橋附近と、浅草雷門前と、神田の神保町通りなどであつた。湯島の切通の坂の細いゴ

タゴタした通などは、今でも別の世界ではないかと思はれる位に違つて私の頭に残つてゐる。そこには古本屋や古着屋やが吹きまく春の塵埃の中にゴタゴタと店を並べてゐて、人が肩を摩るやうにして歩いて行つた。

御成街道も細い通であつた。幅三間位しかなかつた。従つて、今と比べて、何んなに賑やかであつたらう。人が行く、車が行く、荷馬車が行く、やれ子供が轢かれた、人が轢かれたといふ騒ぎである。又軒を並べた店にも、何んなに濃やかな複雑した不整な不揃ひな氣分が漲つてゐたであらう。汁粉、壽司、大福餅、鰻井、さういふものが古本屋、古道具屋、古着屋と一列に軒を並べてつゞいてゐたのであつた。目鏡橋の橋の畔も賑やかであつた。今日さうした光景を私は東京の何處に求めることが出来るであらうか。露店、露肆、立ん坊、土方、さういふものが橋の袂に一杯に集つてゐて、橋畔にある共同便所の繁昌は一通りでなく、五人も六人も待たなければ用を足すことが出来ないといふ風であつた。まだその時分には破壊しても破壊し切れない昔の江戸の繁榮が残つてゐたのであつた。

外國風の家屋と純日本式の家屋と相並んで軒をつらねてゐるのが、その頃の生活の状態のシンボルを成してゐた。それに、區劃をわけて、江戸風の町と外國風の町とが出来てゐた。一方は開けて行く形、一方は衰へて行く形、一方は急進的、一方は保守的、さういふ二つの氣分が東京の何處にも絡み合ひもつれ合つて巴渦を巻いてゐるのを私は見た。

さうかと思ふと、麴町の番町あたりに来ると、當路の大官……昔の書生……の大きな邸宅などがあつて、ひろい平坦な通を箱馬車が勇しく驅けて行つた。参議、卿から漸く大臣などといふ官名の出来た頃で、伊藤公の名譽が噴々として社會を壓してゐた。

### 新しい文學の急先鋒

私の通つた神田の英語の學校は、自由黨の時の有力者林包明といふ人の建てたもので、星亨などが其顧問であつた。あの學校は後に、佐々木侯爵の子息の學校になつて、明治學館と言はれたが、尠くともそこで三年ほど私は英語を習つた。

漢學へ行かうか。英語に行かうか。それとも政治に行かうか。法律に行かうか。かういふ惑ひが、絶えず私の稚い頭を動搖させた。そして其間にも、私は絶えず内務省の官舎のN氏の書齋に行つた。

N氏は法律と文學とをやれと勧めた。Macaulay 卿のことなどを例に引いた。其時分の青年の愛讀書が Macaulay の『英國史』や『ピット傳』であつたのでも、その當時の状態を彷彿することが出来る。又一方政治法律に心をそぐ青年の多かつたことも事實である。丁度この時分だ、徳富蘇峰氏が『將來之日本』といふ本を提けて田舎から出て来て、あゝ國民の友生れたりと言つて、平民主義の提唱を爲したのは……。

國民の友……あの女神のペンを持つて立つてゐる黄が、つた表紙、殊に忘れられないのは、その最初の春季附録に出た山田美妙齋の裸體の繪を口繪にした小説であつた。何といふ題だか忘れたが、安徳天皇の埋れた事蹟を題材にしたもので、かういふ Virgin Soil, が日本の文學にあるのかと私を驚嘆させた。それに、同じ號に、坪内博士の『細君』といふ小説があつた。

坪内博士の『書生氣質』に於ける名聲は、既にその一年ほど前に世に喧傳されてゐただけけれど、Y新聞も何も見てゐない私には、博士の名に接したのはこれが始めてであつた。それに、一層私を驚かした。のは、その一二號前に出てゐる二葉亭譯の『あひびき』であつた。粗大な經書や漢文や國文に養はれに私の頭腦や私の修養は、この細かい不思議な叙述の仕方をした文章に由つて一方ならず動かされた。これが文章かとも思つて惑つた。しかしさういふ細かい叙述法は、外國の文章の特長で、日本の文章は、これからは是非さうなつて行かなければならないと思つた私は、それから注意して、雜誌や新聞を見るやうになつた。

私は會話や英文法の時間には、いつも缺席した。會話などは私には何うでも好いといふ氣がしてゐた。で、私は教場の上草履のまゝで、神保町通や小川町通を歩いた。貧しい書生達に取つて幸ひなことには、その小川町を少し行つて右に折れて又左にちよつと入つたところいろは屋といふ貸本屋があつた。今では本の代價を拂はないでは貸して呉れる貸本屋もないやうだが、その頃はその金がなくつてもドシド

シ借りて來られた。『我樂多文庫』『新著百種』『國民之友』其他新刊の雜誌を読むことの出來たのは、その書店のお蔭であつた。

『新著百種』の第一號に出た紅葉山人の『色懺悔』、それがまた非常に私を動かした。尠くとも、『色懺悔』はその文體に於て、その叙述に於て、當時の青年を魅することの出來る力を持つてゐた。それに、『かういふものなら書けぬことはない。』といふ感を私達に持たせた。遠い漢文漢詩や、和歌や、乃至は難かしい英文よりも親しい新しい感を私達に與へた。それに、作者がまだ若くつて、自分より五つか六つしか年が上でないといふことも私にある力と發奮とを與へた。

それに、『穎才新誌』の同じ投書家であつたSといふ友達が根岸に住んでゐて、それが矢張文學愛好者で、新刊物や雜誌をよく讀んでゐた。一緒に集つて話をする同好者もあつたらしかつた。で、私の足はそのSの家の方へ引寄せられた。

Sは歌も詠んだ。しかし歌は拙かつた。私は日曜日などには、よく上野の森を越してSの家に出かけた。それは丁度、今の伊香保の裏の方に當つてゐるところで、離座敷などがあつて、大きな家だつた。Sは私が行くと、喜んで迎へて、例の芋坂の澤野屋の團子などを御馳走して呉れた。『青絹草紙』といふ本を拵へて、それに、私達は合作小説『あやにしき』といふのを書いた。

私達は硯友社の人達——紅葉、眉山、漣、水蔭、思案などといふ人達を中心にして議論したり、饗庭

篁村の『むら竹』を研究したり、『新著百種』の三卷に出た幸田露伴の『風流佛』を話の種にした。りした。

それに、一方硯友社に對して、例の美妙の『都の花』と『いらつめ』とがあつた。露伴が『露團々』といふ小説を書いて、その原稿料を持つて、野州から木曾の山中まで旅行したといふ話はたまたまなく私達を羨しがらせた。『兎に角露伴は天才だ。『風流佛』だつて、とても硯友社の人には書けない。』こんなことを私達は言つた。

そしてその間には、私達は歌の百首よみなどをした。O、I、Tなどといふ人が段々そのグループの中に入つて來た。柳田國男君がまだ十四五で、非常な秀才で、丁度其時下谷の御徒町の兄の井上通泰氏の許にゐたが、そこをSと私とが訪れて行つて、同じグループの一人にしたのも、何でもその年の冬であつた。

そのグループの中に、異色とすべきは、太田春山と言ふ其頃三十三四の易者が雜つてゐたことであつた。勿論、この人は小説の方には興味を持つてゐない。單に歌の同人として入つて來たばかりであるが、その商賣が面白いと言ふのでSも私もよく出かけた。それは御成街道の黒門町から少し左に入つたやうな處で、二階の一間に、算木と易書とを並べて、しかつめらしく、來る客に應對して、一件五錢十錢で易を見てやつてゐたが、『滑稽だね。春山のいふことを本當にして見て貰ひに來る奴があるんだから。あれでも少しは中るのかねえ。』こんなことを言つて私もSも笑つた。『易なんか、僕にでも出来る、今度行

つたら、注意して見てる給へ。先生、客に對して最初に何と言ふかを……。屹度「あなたは動く心がありますね。」つて言ふが、誰だつて動かないで、あゝいふ處に易を見て貰ひに来るものはありやしない。あゝいふ處が易のコツだね。」Sはかう言つて笑つた。

しかしこの若い易者は面白いところのある男だつた。歌も旨かつた。この二階で、佐々木信綱氏の父弘綱翁に来て貰つて一席歌の會を開いたことがあつた。SもOも春山も信綱氏の門下に一度籍を置いた。たしかその時信綱君も来た。

尠くとも三四年は、その春山の家によく出かけた。上野の花を見に行つた歸途などに寄つて、「さきにほふ上野の山の櫻花ことしも見つる妹なしにして」と詠んで笑つたりした。この春山は四五年して仙臺の方へ流浪して、不遇な死を遂げたと聞いた。今、生きてゐたら……などと私は時々思ひ出した。この春山が私の運星を見て、「君は好い。君は努力さへすれば立派な出世が出来る。拘泥するところが無い。」かう言つたが、その顔色が今でも眼に附いてゐる。

### ゾラの小説

N氏の書齋を私は私の書齋のやうにしてぐんぐん入つて行つた。私は其處から種々な本を借りて来た。キクトル・ユーゴオ、アレキサンダー・デュマ、つゞいてウイルキー・コリンズ、チャアルス・ヂツケ

ンス、かういふ本を引張り出して来ては、わからずなりにも日課にして讀んだ。

『君は豪い。よく讀むな……。』

かう褒められるのが嬉しかつた。で、それが例になつてN君がゐないでも、ぐんぐんその書齋に入つて行つて本を借りて来たが、ある日、突然、N君の父親から嘔罵られた。

『他人の家の書齋に入つて、本を黙つて持ち出して行く奴があるか。』

私は面喰つた。一面ではまたさう嘔罵られたのが腹立しかつた。其處にN氏の母親が来て取りなして呉れたりしたが、私は黙つて低頭した。私は言はれない悲哀を感じた。

N氏が歸つて来て、私の爲めに辯解して呉れたか何かしたが、それ以來、私はそこに行きたくなくなつた。エミール・ゾラの小説、その時分はかれの全盛期で、英譯になつたかれの本などはまだ日本では何處でも見られなかつた。それをN君は三四冊持つてゐた。"Conquest of Plassans"と"Nana"と"Le roman-moir"などがあつた。N君はそれを私に示して、「今、フランスでこの人の作が流行つてゐるんだ。しかし、ひどいんだからな。君なんか讀んでは、却つて害になるやうな作だからな。もう少し経つてから貸してやるよ。」かう言つて深く藏つて置いたが、その爲め、その見たいエミール・ゾラの小説も見られなくなつた。それが悲しかつたのを今でも覚えてゐる。

それから數年経つて、私は神保町の通の古本屋で、ふと、"Conquest of Plassans"を發見した。その時

は、無理を言つて、金を母から貰つて、辛うじて買ふには買つたが、その時分にはゾラの小説はまだよくわからなかつた。何うしてこれが面白いんだらうと思つた。

### 紅葉と露伴

紅葉山人の『伽羅枕』、露伴の『ひけ男』、それが一緒にY新聞に連載されるといふ廣告が出た時は大した噂だつた。一方は寫實派の統領、一方は理想派の領袖、これが並んで同じ新聞に筆を執るといふのであるから、その當時の文學愛好者を動かしたのも無理はない。それに、新聞社でも、それを盛に廣告して、繪ビラなどを拵へて、それを町の辻々に掲げた。

何でも九月頃の事であつた。

處が、紅葉は書き始めたが、露伴は五六回書いて止して了つた。その辭、何方が面白かつたかと言へば、無論『ひけ男』の方が面白くもあり評判も好かつたのである。従つていろいろなゴシップが彼方此方に聞えた。露伴には煩悶があるのだなどといふことが盛に噂された。例の中西梅花道人に聯關した戀愛談があつたのである。

この時分には、美妙齋の勢力は餘程落ちてゐた。『都の花』に書くには書くが、『いちご姫』などといふ大きな作があつたが、何うも餘り評判が好くなかつた。それに比べると、紅葉の艶筆はいよゝゝ榮えて、

『風流佛』で博し得た露伴と共に、その時の文壇に雄飛してゐた。露伴はその夏、赤城山にこもつて

『一劍』といふ短篇を國民之友夏季附録に寄せた。

『切子、これを……たしかに二つになつて見せん。』

この結末の一句、それが若い人達の血を燃やした。お蘭といふ女の描寫も批評家の中に評判が好かつた。

その時分の批評家の權威は石橋忍月氏で、つゞいて正直正太夫が『國會』にゐて、鋭い皮肉な批評振を以てきこえてゐた。鷗外漁史はまだドイツから歸つて來たばかりで、さういふ人があるといふ噂はきこえてゐるが、まだその批評と作品とは認められなかつた。

で、紅葉だけ獨りその艶麗な西鶴張の筆を『伽羅枕』に振つた。

その時分、私は牛込の納戸町にゐたので、北町の通りは常に往來した。初めはそれと氣がつかなかつたが、Sが『紅葉は北町にゐるぢやないか、』と言ふので、ある日、それとなく注意して歩いて見ると、長屋と長屋との間に小さな門があつて、そこからずつと奥に入つて行くやうになつてゐる家に、硯友社、尾崎徳太郎と蜀山人風に書いたかれの自筆が際立つて目に附いた。

『はゝア、こゝにゐるんだな。』

かう思ふと、私の胸は夥しい鼓動を感じた。自分より四つか五つ年上の一青年、それでゐる日本の文



壇の權威、かう思ふと、自分もかうしてぢつとしてはゐられないやうな氣がする。羨しいと共に妬ましいといふ氣が起る。若い血汐がわきかへる。急に、書きかけた小説を一刻も早く完成しなければならぬといふ氣になつて、急いで家の方へと戻つて來た。

紅葉も羨しいが、それを取巻いてゐる漣とか眉山とか水蔭とか言ふ人も羨しかつた。兎に角かれ等は出發の道程に上りつゝある。それであるのに、自分は……自分は……。髪の毛を長くして不健全に蒼白い顔をしてゐる私は……。かう思つて自から奮ひ立つた。『今に、今に、俺だつて豪くなる……豪くなる……日本文壇の權威になつて見せる……』

今に比べて、文壇的ゴシップはその時分の方が多かつた。やれ、紅葉が何うした？ 露伴がどうした？ さういふ噂が若い人達の噂の中に盛んに繰返された。

私はもう二十一二であつた。二度目に東京に來てから、もう四五年は経過した。私はもう昔の『顕才新誌』の投書家でもなければ、漢詩漢文の研究生でもなかつた。『色懺悔』『風流佛』以來、私の頭は新しい日本の文學に對する憧憬で燃えた。私は一二年前から、進まぬながらも小説の筆を動かしてゐた。

近松、西鶴の復興、それにつれて、十錢位で買へる小冊子、『好色一代女』とか、『好色一代男』とか言ふ本が、武藏屋、丸善あたりの書肆から盛んに出た。小使錢で私の買ひためた『山陽詩鈔』とか、『遠思樓詩鈔』とか、『蘇東坡全集』とか言ふものは、今ではもう私に必要がなくなつた。私はさういふ本を古本

屋にかついで行つては、近松や西鶴の書を買つた。

それに、私は何方かと言へば、熱い、強い、執着の深いのに拘らず、内氣で、臆病で、隅の隅の方にいつも押しつけられてゐるやうな性質であり、また境遇でもあつた。七圓位の家賃の狭い家屋、庇の低い暗い室、さういふところに住んでゐてさへ、兄の月給では、生計が月々足りないで困るほど私の家も貧しかつた。従つていかに社會が美しく派手に、且つ羨しく妬しく私の眼に映つたであらうか。何處に行つても、何を聞いても、何を見ても、私の體はすぐ戦へた。大きな邸宅、深い裁込、美しい娘、街頭を輾つて行く馬車、私の若い血は燃え上つた。

さういふ境遇にゐて、私と私の弟とは腸チブスにかゝつた。明治二十四年の夏から冬まで。其時分は、家賃が高いと言ふので、納戸町から甲良町の親類の借家に移つてゐたが、その年の春ほど人生が私につらかつたことはない。私は家計困難のために、折角Sと一緒に通ひ始めた日本法律學校を退學しなければならなかつた。それに、一方母親と嫂と兄との間柄が圓滿に行かないので、それを傷く苦しまなければならなかつた。私は忘れることが出來ない、漸く病氣の治りかけた體を快い日向の縁側に横へて、將來のことを思ひわづらつた時のことを……。

その甲良町の家は二間しかなかつた。長火鉢の置いてある方が六疊、座敷が八疊。その座敷の裏の所に面した窓のところに、私は机を置いて、精々と筆を動かしたり、限りなく甘い空想に耽つたりした。

机を押つけて置いたところが壁で、右の障子に一枚硝子が大きく入つてゐたが、その硝子を透しては何もない狭い汚い小さな庭が見えた。そこで私はよく涙を流した。思ひのまゝにならぬ涙、少女にあこがるゝ涙、嫂の不意の死に對する涙、社會に出て逸早く成功した人達を羨む涙、家計の貧しさを悲しむ涙、焦せつても自己の力の足りないのを悲しむ涙……。それに、「いつまで遊んでゐるんだか、宅の録も……。何處へでも出て五圓でも十圓でも取つて呉れ、ば好いの……。」「といふ母親の愚痴も散々其處で聞いた。

鷗外漁史の『しがらみ草紙』は明治二十四年の後半期に出て、漁史はその翌年の新年の『國民之友』に『舞姫』を書いた。で鷗外漁史の名は一躍して文壇の權威となつた。其時分には、私は文學書生としては、割合に外國の知識を持つてゐる方の青年になつてゐた。それに、ドイツ風のキビキビした鷗外漁史の批評に深く引寄せられた。『舞姫』について出た『文づかひ』も面白いと思つた。紅葉、露伴以外に行くべきところがあることを、私は『しがらみ草紙』から教へられた。

その頃、紅葉山人の結婚の噂が文壇のゴシップの中心となつた。樺島菊子……菊に紅葉、非常に美しい人で、紅葉山人も惚れてゐるといふことであつた。菊と紅葉の座蒲團が出来たなどとも言はれた。その噂を聞くのも私は痛かつた。

### 紅葉山人を訪ふ

私も矢張大家の許に最初の手紙を書く一文學書生であつた。其時分は、紅葉は北町からかれが最後までゐた横寺町の住居に移つてゐたが、いろいろ思ひ悩んだ揚句、他に文壇的に行つて行く方法がないので、私は遂に決心して、紅葉山人に宛て、手紙を書いた。

何んな文句が書いてあつたか、今は覚えてゐないが、矢張多くの文學書生のやるやうに、空虚な文句が澤山に並べ立てられてあつたことであらうと思ふ。それを思ふと、今でも私は顔が赧くなると共に、當時いかに窮境に身が置かれてあつたかと思つて、黯然たらざるを得ない。

と、返事がすぐ來た。

或は先方にさういふ要求がなかつたなら、私のやつた手紙もそのまゝ、紙屑籠に投げ込まれて了ふのであつたらうが、幸に、紅葉は自分の門下達の書いた文章を集める雑誌『千紫萬紅』といふのを、會員組織で、不足なところは自分でその費用を補ふ覺悟で拵へてゐた。で、私の手紙が行くと、かれはすぐその成春社の規約の刷物を送つてよこした。會員の一人になれと言ふのであつた。

それでも私には……取附く島のない私には嬉しかつた。それに規約を卷いた上に書いた朱書の字が紅葉の筆であるのが嬉しかつた。で、一日二日置いてから、私は初めて紅葉を訪問した。

キャラコの三紋の黒の羽織か何かを着て、すり減した下駄を穿いた、顔のイヤに蒼白い神経性の私は、訪問するとすぐ、玄關の二疊——鏡花や風葉や春葉などの後にゐた——のすぐ隣の八疊の座敷へと案内されて通つた。その室はヤヤ低い、下にゴタゴタした家屋を見るやうな小さな庭に面してゐた。私を導いて通して呉れたのは、五十位の品の好い老婦人であつた。

私の胸はドキドキした。

それに、その室に置いてある新しい二棹の箆笥……それは新婦の持つて来たものであるに相違ない箆笥が、すぐ私を刺戟した。そればかりではなかつた。その他にも美しい新妻を想像させるに足りるやうな人形やら着物やら道具やら鏡臺やらの色彩が私の眼に輝いて見えた。私は暗い佻しい心持がした。

『何うぞ、二階へ。』

かうさつきの老婦人がやがて入つて来て言つた。五月二十四日、新緑が爽やかに日の光にかやく頃なので、室々は皆な障子が明け放されてある。で、立つて廊下に出ると、座敷の隣の長火鉢の置いてある六疊の間に、その若い美しい花のやうな菊子夫人が、白粉を眞白につけて、ばつちりした眼をして此方に向いてゐるのに出會した。私は慌て、お時儀した。

その光景は完全な繪になつて、今でもはつきり私の眼に見える。

階梯を上ると、二階は八疊に六疊。明るく初夏の日影の光線がさし込んで、一六居士の書いた新婚の

祝の壽といふ字の幅物がかゝつてゐたり、ソファが置いてあつたり、書籍が散らかつてゐたり、座蒲團が置いてあつたりする向うに、かれのゐる机が置いてあつて、その前の長火鉢のところに、紅葉は坐つてゐた。

『此方に來給へ、』

で、私は其の長火鉢の前の赤い模様のある派手なメリンスの座蒲團に坐つた。しかしその座蒲團は噂にきいた菊と紅葉の模様ではなかつた。傍には茶器、茶碗、薬罐、さういふものが本やら雑誌やら新刊書やらと一緒にごたぐたと散らばつてゐるが、案内して來た老婦人は、茶器を洗ふべくそれをかれの手から取つて下りて行つた。

かれについての最初の印象は、好い感じであつた。いかにも江戸兒らしい快活な城府を設けない話し振、若い文學書生をも別に侮りもしない態度、黝くとも私の動搖する心を靜めるに十分であつた。かれは西鶴を話し、近松を談じ、つゞいて今Y新聞紙上に書いてゐる作の話をした。その時出てゐたのは『焼燵茶碗』(全集では袖しぐれ)といふ三四十回の小説で、鷗外漁史を主人公にしたといふので評判であつた。

それから話は外國文學の話になつて行つた。紅葉の眼から見たら、私はさぞ生意氣な文學書生に見えるたであらうと思ふ。初めの中こそ、遠慮して餘り話もしなかつたが、外國文學の話になると、私はユーゴオを説き、ヂッケンス、サツカレーを説き、ヂュマを説き、更に『しがらみ草紙』でやゝ知りかけた

ドイツ文學の話までした。

かれはやがて立つて、棚の上から、一冊の洋書を取つて私に示した。私はそれを手に取つた。それはゾラの“Abbe Mouret's Transgression”であつた。

話はゾラの話に移つて行つた。

『評判の作家ださうだが、成ほど細かい、實に書くことが細かい、一間の中を三頁も四頁も書いてゐる。日本文學にはとても見ることが出来ないものだ。』かう言つて、傍にあつた扇を取つて開いて見せて、『この影と日向とを巧く書きわけてあるからね。それに、話の筋と言つては、ごく單純で、僧侶が病後色氣のない娘に戀する道行を書いたものだが、その段々戀に引寄せられて行く心理が實に細かく書いてある。日本の文藝もかう行かなくつちやいかん。』

兎に角かれは其時分既にゾラを讀んでゐたのである。私もまげぬ氣になつて“Conquest of Plassans”の話をした。

今日考へて見ると、紅葉の寫實は、三馬から西鶴、それから一飛びにゾラに行つたといふ形であつた。ゾラの作は、かれは常にその傍を離さなかつたらしい。

『二人女房』『紫』『多情多恨』さういふ順序で、かれは西鶴の寫實から出て、ゾラに行かうとしたのであつた。

欠

# 欠

みた。

この玉川上水に沿った路、この路を歩く間、私の頭はいつも熱い創作熱に燃えてゐた。私は絶えず書くべき短篇の題材に心を悩ました。私の若い心は躍つたり沈んだりした。

『傑作、傑作を書かすには置かない。』  
をりをり私は心の中に叫んだ。

時には萱原の中にしやがんで、ちつと夕日の落ちて行くなどを眺めた。私の若い頬は赤く落日に輝いて見えた。

この川ぞひの路を、私は歩くとも三年乃至四年は歩いた。従つて毎月二篇乃至三篇をかくことにきめた短篇は、後には私の机の抽斗に餘つた。

『明治文庫』といふ安い小説集がH書店から出た時、乙羽君にすゝめられて、その短篇を皆な持ち出して見せたが、その半分ほどはたしか二十五圓で賣れた。

『三年かゝつて、二十五圓、これぢやとても駄目だ。とても文筆では身を立てることが出来ない。』金を貰つて歸りながらかう思つて私は悲觀した。

何うかしなければならぬと思つた。何とか方法をかへなければならぬと思つた。私はもう二十五だ。いつまで兄や親の脛ばかりかじつてゐるわけには行かない……。しかしさう思つたところで仕方がな

かつた。兎に角、その金を有効に使はう。かう思つて、その頃、早稻田の文科にゐたO君をさそつて、その金で、房州から箱根、熱海の方を旅行した。

日清戦争のすこし前で、外國の侮辱に對する國民の憤怒がその頂上に達してゐるやうな時であつた。

### 私の最初の翻譯

丸善の二階はまだ狭く、外國の本なども今のやうに澤山は來てゐなかつた。私はをりをりそこに行つて、成るだけ安い本をさがして買つたり、欲しい本を注文したりした。ツルゲネフの『親々と子供』ドウヂエの『流竄王』、ある日ふとトルストイの『コサツクス』の五十錢本、海邊叢書の一冊を其處にさがし出したが、それを讀んだ時には、夥しく感動させられた。

丁度内田君の『罪と罰』の最初の一卷が公けにされた頃で、その世評は噴々としてきこえてゐたが、ラスコリニコフの心理描寫よりも却つて此方の方が好いやうに私には思はれた。私はE君にその話をした。

と、E君はある日、

「一つ翻譯して見たまへ、H書店の翻譯の叢書の中に入れても好いつて言ふ話だから……。」  
「ちや、やつて見よう。」

私は喜んで引受けた。

その叢書はロビンソン漂流記やドンキホテなどの出る叢書であつた。恐らくH書店の主人は、丁度日清戦争時代であつたので、コサツクスといふ名に惚れて、トルストイの傑作をコサツク騎兵のことも書いたものと思つたのであらう。それで、無名の一文藝書生の翻譯をも引受けやうと言つたのであらう。

しかし私にはそんなことは何うでもよかつた。さういふすぐれた作品を翻譯し得るのは嬉しいと思つた。その夏は丁度私は柳田君などと日光の寺に行つてゐたが——そこで日清談判破裂の騒がしい號外の聲を聞いたが、歸つて來ると、丁度好い鹽梅に、裏の大きな二階屋が貸家になつてゐたので、そこに机を持つて行つて、そして夏中一生懸命にその翻譯に従つた。

勿論その時分も矢張歴史家の二階に寫字には通つてゐたので、夜と日曜と朝としかそれをやつてゐるわけに行かなかつた。それに、語學は不完全だし、翻譯も初めてなので、初めはとても出來さうには思はれなかつた。しかしそれも何うやら彼うやら曲りなりにも漕ぎ附けた。

従つてその翻譯は滅茶苦茶であつたに相違なかつた。それに、その臺本にした本も、省略の多いものであつた。

しかしその奥の二階での仕事は今でもはつきりと私の記憶に残つてゐる。裁込の深い庭に夜遅く月が

登つて、それが葉間から洩れて來たり、西日が暑く窓からさし込んで來たり、蟲の音が湧くやうにあたりに繁くきこえたりした。ランプが遅くまで二階についてゐるのが外から見えた。

そこで私はオレニンの苦悶を考へたり、ルカシカの生活を思つたり、チエロチカといふ老人の自然に對する感慨を思つたりした。カウカサスの不思議な生活は、この極東の文學青年の空想と煩悶とに雜り合つた。

で、三月かゝつて完成した。紙數六百餘枚。

それを清書して、E君から紹介書を貰つて、私はそれをH書店に持つて行つた。H書店もまだその時分はさう大して大きな書肆ではなかつた。本石町から本町へはもう移つてゐたけれども、編輯局も何も出來ず、主人の新太郎氏は、表の通に面した店の隅の帳場に坐つてゐた。新太郎氏もまだその頃は若かつた。

E君の手紙が添つてゐたので、新太郎氏は私をその帳場のところへと引見した。髪の毛の長い蒼白い顔をした私を、いやにじろじろと神經的に人の顔を見るオドオドした一文學青年を。

小僧が本を運んで來た。

新太郎氏は、厚い私の翻譯の原稿をバラバラと明けて見て、

「コサツクのこととはかなり詳しく書いてありますか。」

「え。」

又、開けて見て、「一體、あの叢書は、あんまり賣れんで、あとは何うしやうかと思つてゐるんだが、……これは、まア、しかしお頼みしたのだから、出版するつもりですけれど……あれは、一冊三十圓づつになつてゐるんだが……」

六百枚の翻譯——三十圓。しかし私は別に苦情は言はなかつた。私はやがて急いでそこから出て來た。で、あのトルストイの『コサツクス』の拙いひどい翻譯が出た。

### 出發の軍隊（日清戦争）

私の家から青山の練兵場へは、距離がいくらもないので、私は夜など出發の軍隊の光景を見るために、よくひとりで出かけて行つた。

外國との最初の戦争、支那は弱いとは言へ、兎に角アジアの大勢力なので、戦争が始つてからの東京の騒ぎは非常であつた。號外の鈴の音が絶えず街頭にひびきわたつて聞えた。

時には軍隊が軍歌を歌つて勇しく列をつくつて通つて行つた。

銃劍が日に光つた。

かと思ふと、捷報の號外で、街が日章旗で埋められるやうなこともあつた。繪草紙屋——まださうい

ふものが澤山に残つてゐたが、そこには、松崎大尉戦死の状態だの、喇叭を口に當てて斃れた喇叭卒だのの石版畫がこてこてと色彩強く並べて見られた。いろいろな軍歌なども出来た。

青山からレールを大崎の方へ連絡させて、出發の軍隊は、皆なそこから立たせることになつてゐたので、夜の青山の原の光景は、悽愴の中に別離の悲哀をこめて、何とも言はれない張りつめた感じを人々に與へた。

何でも其頃は別々な方面に上陸する軍隊の輸送が始まつたといふ噂で、都會の人々の心は皆な熱心な熱情と好奇心とに驅られて、ソハソハと落附かすに絶えず何物にか奪はれたやうな形になつてゐた。成熟した人でさらさうである。まして私のわかい張り詰め心をや。

私は遠い戦場を思つた。故郷にわかれ、親にわかれ、妻子にわかれて、海を越えて、遠く外國に赴く人達のことを思はずには居られなかつた。また、さびしいひろい野に死屍になつて横はつてゐる同胞を思はずには居られなかつた。私は戦争を思ひ、平和を思ひ、砲烟の白く炸裂する野山を思つた。自分も行つて見たいと思つた。牙山の戦、京城仁川の占領、つゞいて平壤のあの大きな戦争が戦はれた。月の明るい夜に、十五夜の美しい夜に……

青山の原はすべて柵で圍はれて内部は少しもわからなかつた。しかし喧燥と混雜とは、軍隊の出發して行くさまを私に想像させるに十分だ。人の歩く音、馬のはねる響、汽車の機關車からは、黒い白い烟

が絶えずあがつて、晝のやうに明るい瓦斯燈の青白い光を掠めては消え、掠めては消えた。

軍歌の聲が遠くできこえる……

それは悲壯な聲だ。人の腸を断たすには置かないやうな、又は悲しく死に面して進んで行く人の爲に挽歌をうたつてゐるやうな聲だ。

烟は絶えず瓦斯の光を掠めた。

やがて汽車の動く音がする。ゴオといふ音、ゴトンゴトンと動く音、續いて、「萬歳！」といふ聲が夜陰を破つてきこえた。

私は淋しい悲しい思ひに包まれて家に歸つて來た。

これに限らず、すべて——都會も田舎もすべて興奮と感激と壯烈とで滿されてゐた。萬歳の聲は其處此處できこえた。

その年の秋、私は一簑笠、一草鞋で、濱街道を水戸から仙臺の方へ行つた。どんな田舎でもどんな山の中でも、戦捷の日章旗の風に靡いてゐないところはないのを私は見た。人々は戦捷の祝だと言つては飲み、出發の別離だと言つては集つて騒いだ。

それに砲兵工廠の活躍した煤烟の光景は、今でも私の眼にちらついて見えた。勿論、その時は日露の戦役の時ほどはなかつたけれど、それでもその水道橋、小石川橋の一區劃は、青い、黒い、白い煤烟



で凄じく塗りつぶされてあるのを私は見過さなかつた。

海ゆかば、水つく屍

山行けば……

さういふ氣が全國の民に一體に漲りわたつて居た。

維新の變遷、階級の打破、士族の零落、何うにもかうにも出来ないやうな沈滞した空氣が長くつゞいて、そこから湧き出したやうに漲りあがつた日清の役の排外的氣分は見事であつた。戦争罪惡論などはまだその萌芽をも示さなかつた。

### 『かくれんぼ』の作者

私は齋藤綠雨に就いては多くを知つてゐないが、しかし二三度逢つたことはある。私の家へかれ自身やつて來て呉れたことなどもあつた。

綠雨——正直正太夫。その前生は江東みどり、藤堂家の藩士で、幼い頃から聰明であつたといふ。『油地獄』かくれんぼ後に『門三味線』を半分ほど新聞に出したが、それから後は全く小説に筆を斷つて、鋭利な諷刺に富んだ斷片語のみを書いた。

當時はかれは戯作者といやしめられ、やかましい小舅と言はれ、旋毛曲りと評され、ある作家の群か

らは、けじけじのやうに嫌はれて、その人格をさへ疑はれた。しかしあの鋭利な皮肉の筆は、かれ逝いて後、再び文壇にあらはれたであらうか。『みだれ箱』の中に見るやうな氣のきいた批評を見ることが出来るであらうか。

私もいろいろな噂を聞いてゐるので、何方かと言へば、初めはその傍に寄るのを氣味がわるいやうに思つたが、しかし、『油地獄』などは感心して讀んだ。最初に、私は本郷の弓町の下宿屋で逢つた。

何うして逢ふやうになつたかと言ふと、何か書いたものがあるなら、北海道の新聞に、二人合作の名の下に載せないかといふことであつた。それを誰か仲に入つて話したのか、それは忘れたが、兎に角その用で私はかれの下宿を訪ねた。

忘れられない印象が今でも私の頭に残つてゐるのであるから、その人の平凡でなかつたのがわかる。その時Y新聞に出てゐた眉山の『暗潮』を評して、あの空氣がもつとわかればあゝは書かない筈だなどと言つて通な批評をして私に聞かせた。地の文と會話との不自然、それから飽まで平面的に書かなければいけないといふ議論、その他いろいろなことを聞いたが、哲學的な議論、宗教的の議論は遂にかれの口から一言も出なかつた。かれの話はいつも世間と文壇とが對象になつてゐた。

ゾラの小説の雛案したのがあつたので、私はそれを『朝月夜』と題して、綠雨と合作の名の下に、北海道の新聞に載せた。

噂と違つて、金のことはキッチンキッチンとしてゐた。約束通り、いつでも封筒に金を入れて車夫に持たしてよこした。

それに、かれは車に乗ることが好きであつた。何處に行くにも車で、そして何時間でも平氣で外に待たせた。硯友社の悪口、大學派の悪口などは常に口を絶たなかつた。

男女の苦しみ、又は愛著に深く浸つた人であるといふことは、書いたものを見なくとも、その人を見ればすぐわかつた。いつも沈んで、深く物を思つたやうな顔の表情をしてゐて、をり／＼鋭い皮肉な批評をその言葉の中に混ぜた。私の考へでは、徳田秋江氏が正太夫の皮肉を除き去つた人のやうな氣がして仕方がない。

ある日、かれは車で私の家へやつて來た。其時分私の兄の家は、牛込の喜久井町にあつたが、先方は文壇の先輩、私は一文學書生なので、それを款待する方法に困つた。それに、生憎Nといふ友人が來てゐて、牛鍋などを出して、これから酒を飲まうとしてゐた。

困つたが何うも仕方がないので、私はそこにかれを案内した。かれは別に何とも思はないらしかつたがそれでも私達の牛鍋の肉はいくら勸めても遂に口にしなかつた。酒も飲まなかつた。その癖、早く歸りもせず、一時間二時間と話した。『矢張、正太夫らしいね。皮肉だね。』かう後で其友達は私に言つた。

その後、淺草の鳥越にゐた時に、一度私は訪問した。病氣で醫師に行つてゐたが、やがて歸つて來て、

醫師が名を書かずに、號を書いた。』などと言つて、藥瓶を私に見せた。

小田原に行つてからは私は逢つたことはない。唯一度、私の編輯してゐた『太平洋』にその斷片語を載せると言つて、H書店の應接間に來たことがあつた。その晩年の世話をした女は、パリでハイネの晩年の世話をした女のやうな女ではなかつたか。私は正太夫のあの暗い、男女の活闘に悶え且つ勞れた顔を今でもをりをりは思ひ起す……。

### 最初の原稿料

此間O家の葬式に列する爲めに、私は山手線の電車で、日暮里に行つて下りた。ところが、大勢の乗降客の中に、久しい昔に見たT、F氏の老いた顔を認めた。もうすつかりお爺さんで、顔には深い皺が刻まれ、髪は眞白で、腰も體もいくらか曲り加減であつた。私は餘程聲をかけて挨拶しようと思つたけれど、混雜の中であつたのと、先方で氣が附かなかつたのとで、私はそのまますれ違つて了つた。

もう私はこの後T、F氏に逢ふことなどはあるまいと思ふと、私は不思議な氣がした。當年の『都の花』の主幹、烈女お藤の傳を書いたり、年に似合はない好色者らしい短篇を書いたりした人、當年の露伴、紅葉其他あらゆる文學者に先生、先生と言はれた人、そのTF氏は、その時分猿樂町の横の通りのところに住んでゐた。こじんまりした瀟洒な家であつた。そこには、大家も行けば中家も行き小家も行った。

一躍して文壇に出ようとすする貧しい文學青年の群も行つた。當年の雑誌の權威、今なら『中央公論』と言はるべき『都の花』に掲載して貰ふために、澤山な澤山な原稿が、あちこちからTF氏の机邊に集つた。

美妙が『都の花』の主筆であつたが、實際の勢力は矢張TF氏が握つてゐた。私は江見水蔭氏の紹介で、拙い短かい小説を氏の許へと持ち込んだ。

さう大して旨いものでもなかつたけれども、それでも水蔭氏とTF氏はかなり懇意だつたので、私の原稿は兎に角、あそこを直せ、此處を直せと言はれた後に、辛うじてその難關を通過した。そしてその年の十一月の『都の花』に載せられた。

その號に、丁度一葉女史の處女作『うもれ木』が、友人花園女史の紹介文つきで同じく掲載せられた。女にしては、男のやうな文を書く人などとTF氏が一葉を評したのを私は聞いた。

私は二三度TF氏の猿樂町の寓居を訪問した。そして私達青年には何等の共鳴をも感じない昔の文章談などを聞かされた。TF氏はまだその頃四十五六であつた。私の號の花袋と言ふのに首を傾けて、袋山をかしい、俗字だ、糞でなければならぬ。袋に是非したいなら、俗にするが好い。俗は山だ。花の(は)は、それなら意味を成す。こんな話をしたが、いざ雑誌に載せられたのを見ると、花袋でなくて花俗になつてゐる。怒つて見たが、仕方がない。江見君に行つてその話をする、けしからんな、文章を直す

ならまだ好いが、名を直すつていふ奴があるもんか。』かう言つて笑つた。

H しかし何うすることも出来なかつた。

その小説の原稿料は、私は其時分、今の三越の横町かその次の横町かを西に曲つて行つて左側にあつたK書店の大きな應接間で受取つた。TF氏はかなり長く私をそこに待たせた後、封筒に入れて、一枚三十錢の割で七圓五十錢私に渡した。

それが私が原稿料を取つたそもその始めである。私は何はさておいて、自分で働いて最初に社會から取つた金と言ふことに一方ならぬ愉快を感じた。多くても一圓か二圓しか入つてゐない汚ない財布に八圓近くの金！

私は得意な、大文豪にでもなつたやうな氣がしながら、あの長い濠端の路を九段の方へ歸つて來たのを今でもはつきりと思ひ浮べることが出來た。

そして記念の金だからと言つて、弟にいくら、母にいくらといふ風に、少しではあるがわけてやつた。兄や嫂には金でなしに鰻飯か何かを取つて御馳走した。田舎にゐる姉にも何かを記念としてやりたい。かう思つて次手に金を一圓封筒の手紙の中に挟んで入れてやると、姉はやがてその禮の返事を書いてよこした。その手紙は今でも取つてある。『……お前が初めて小説で取つた金を何より嬉しく頂戴しました。お前も望みが叶ひ、私もお金を貰つてうれしい。しかしこのまゝつかつて了つては、あとに残らないか

ら少し足して、鹽を買ひました。不自由してゐた鹽を……」

## 神田の大火事

「ひどい火事ですな、まだ燃えてるさうですな。」

かう御用聞が朝来て言つた。昨夜、風の凄しく吹荒るゝ最中に、半鐘が鳴つた。何處か火事だと思つたが、寒いので、出て見もしなかつた。それが非常な大火事で、神田一面は既に灰燼に歸して、今は火は日本橋、淺草に及ぼうとしてゐるといふことであつた。風はいくらか風いだが、まだかなり強く吹き荒れてゐる。そのためか何うか知らぬが、今朝は新聞も來ない。私は朝飯を食ふと急いで飛び出した。

明治二十五年三月某日だ。

神樂坂まで出ると、四邊がそこなくそはそはしてゐるのが目に附いた。人々が其方に向つて走つてゐる。もう、消防が勞れて、何うすることも出來ない相だ。などと誰か言つてゐる。牛込見附を入ると、人は織るやうに行きちがつてゐる。で、私は急いで、九段の上へと行つた、先づ最初は、高いところから見下ろす方が好いと思つたのである。

九段の坂の濠に面した土手の上には、群集が黒山のやうに集つてゐた。そこから、昨夜の火事の跡が一面に打渡されて見えた。成ほど凄しい光景だ。焼拂つて行つた街々は、一面の焦土と化して、薄い烟と塵埃とで包まれ、その向うは火の手が二つにも三つにもわかれて、黒い烟が簇々とむらがりわたつてゐるのが見える。鍋町だ、もう。一方は大通りに出たかも知れない。十軒店も危い。こんなことをそこで見てゐる人達は言つた。

「夜なら、見ものだらうな。」

かう一人が言ふと、一人は、

「昨夜は綺麗だつた。何とも言へない位だつた。」

かう言つて眺めてゐた。

私は九段の坂を急いで下りて、鎌倉河岸の方へ行つた。濠端——高等商業あたりは、人やポンプや警官が群集してゐるので通ることが出來ない。仕方がなしに、丸の内の中を通つて、印刷局の前を通つて、常盤橋へ出て、本町の方へ行つた。到るところすさまじい光景である。明曆の大火——振袖火事などの思出さるゝ光景である。何の家でも、類焼を覺悟して、庫はしつかとぬりこめ、荷物は出し、老若は避難し、出入の薦のものは、火事装束で、ポンプをかけたたり、屋根に上つたり、火の來る方向を望んだりして、夢中になつて働いてゐる。黒い烟が湧くやうに凄しく此方に靡いて來る。家屋の焼ける音、物の滅びる音、それに人間の抵抗する音、ゴオと電信柱に鳴る西風の音、さういふものが一つになつて、

凄じい地震か、でなければ海嘯でも押寄せて来るやうな氣勢がするのである。……何とも言はれず凄じい。

私は大通に出て、十軒店に行つた。今川橋以北は丸で烟と焔と人とボンブとで埋つてゐる。とても通れない。『鍋町へ出た。角へ出た！』かう言ふ聲が何處からとなくきこえて来る。

今川橋はとても渡れさうにもないので、その次の橋を渡つて、元の昌平橋の通りを向柳原の方へと私は辛うじて行つた。矢張到る處混雑と喧燥と恐怖とで街はざわ立つてゐる。

しかし幸に、大通にちよつと出ただけで、火は消しとめることが出来た。

それから数日、数週の間は、新聞は火事の記事ですべて埋められた。人々の噂も火事の話ばかりである。昔の丸山の火事、つゞいて振袖火事、さういふ時の大火の話まで人々の頭に蘇つた。

丁度その頃、私の書いた小説が、かなり長い小説が、國民新聞の月曜附録に載せられてゐるが、その火事のために、折角人の注意を惹き始めたのがすつかり駄目になつて、月曜日毎に載せられてあつても人が何とも言はなくなつた。私の周囲のものなどでも、私の小説なんか何處に行つたかといふ顔をしてゐる。私は淋しいかなしい氣がした。『火事の記事に興味が移つて、もう誰も見て呉れないからね。』かう私は友達に愚痴をこぼした。

そんなことには頓着しない弟は、その火事の爲めに出来た童謡らしいものを平氣で唄つた。『半鐘ジャ

ンジャン。神田の煉瓦がくづれつほう、すつちやん、ボンブが廻らんかいの、おつべらほうに燃えるぞよ。』節が面白いので、私も後にはその弟の眞似をしてそれを唄つて笑つた。

### 九段の公園

九段の招魂社は、私に取つて忘れられない印象の多いところである。上野公園もかなり印象が深い。がそれよりも一層九段の方が深い。

其處は私の六歳位の時から始まる。富士見町に叔母がゐるので、田舎から母親と一緒に出て来た私は、いつも伴れて行つて、噴水やら池の緋鯉やらを見せられた。

それに戦死した父がそこに祭祀されてあるといふことが、大きくなつてからも私を其處に引寄せた。四月十四日に父親は戦死してゐるので、春の祭祀の時は、兄はいつも一日役所を休んで、そして袴をつけてそこにお詣りに行つた。

その頃は境内はまだ淋しかった。櫻の木も栽ゑたばかりで小さく、大村の銅像がほつくり立つてゐるばかりで、大きい鐵の華表もいやに圖抜けて不調和に見えた。私は朝に夕にその境内を抜けて行つた。考へると細かい氣分が浮み出して来る。正面社殿に向つて四方を取巻いた塀、その左の塀の下の石の上を、若い私は毎日毎日傳つて歩いて行つた。或は弟と共に……。或はひとりほつちで……。

『今に豪くなるぞ、豪くならずには置かないぞ。』かういふ聲が常に私の内部から起つた。私はその石階を昇つて歩きながら、いつも英雄や豪傑のことを思つた。國の爲めに身を捨てた父親の魂は、其處を通ると近く私に迫つて来るやうな氣がした。

境内は花の頃よりも新緑の頃が殊に美しかつた。日影にさわさわ動く新緑、雨にしつとりぬれて見える新緑、傘をさしたまゝでその後苑の噴水のある池の畔に私はよく立つてゐたりした。

今でも其處に行くと、さういふ光景をよく眼にするが、若い母親が子供を負つて来て、そこにある麩を買つて、それを池に投げてやると、金魚や緋鯉がぞろぞろと出て来て、バクバクそれをつついた。

『それー むたらうー』かう母親が背中の子を揺つて見せると、子供も面白さうに熱心にそれを見てゐた。

春秋二季の祭祀の時の見世物小屋の光景がまた私に親しいなつかしい感じを起させた。『招魂社へ行くんだからお錢をお呉れ!』かう言つて私の二人の男の子などは、今も出かけて行くが、私も矢張さうした男の子であつたのだ。

かなり大きくなつてからは、夜一人で、見世物ではなしに、街頭にランプなどをつけて、いろいろな男が店をひろげてゐるのを見て歩くのが樂みだつた。易者、アセチリンランプ、焼つき屋、さういふいろいろな男が、巧に客を寄せてゐるのを見ると、その口上が一種の藝術であるかのやうにすら私には思へた。くどき節をセンチメンタルな聲で唄ふものもあれば、劍舞をやつて人をその周圍に集めてゐる書

生らしいものもあつた。あゝいふ人達は今何うしたらう? 何處にゐるだらう? かう思ふと、人生の悠久なことがつくづく胸に上つて来る。

大村の銅像の立つた時も私は知つてゐる。その周圍に櫛の取廻された時も知つてゐる。日清戦役に海城で鹵獲した雌雄の獅子の奉納された時も知つてゐる。吉田晩稼の『靖國神社』といふ大きな石柱の立つた時も知つてゐる。私は時には無邪氣な少年として、又時には志を抱いた有爲な青年として、時には又戀に思ひ屈して、その美しい幻影を頭に描きながら、センチメンタルな思に胸をむしられた若者として、その境内を社の方へ行つた。

『花見に行くと、場所々々に由つて、娘の種類の違いが面白い。上野ではまだ綺麗な娘が見られるが、浅草から向島に行くと、娘の種がすっかり落ちる。けびてゐていけない。そこに行くといふ段だ。あそこに行つて、運が好いと、非常に美しい高尚な氣高い娘が見られる。矢張、種が違ふよ、君。それに、あそこは静かで、雑沓しないで好い。静かに花を見るには、あそこに越したところはない。』かう言ふ時分には、私はその櫻の木と共に餘程大きくなつてゐた。

九段の公園のベンチの上で、私が幻影に描いた娘は少くとも三四人はある。初め一年間位思つたのは、背の高い姿のすらりとした琴の上手な娘、その次に思つたのが、下町の銀杏返しに結つた元氣な色の白い娘、二十歳以上になつてからは、眼の涼しい髪の濃い頬の豊かな東髪の娘……。私の今の妻の娘姿など

も矢張私は其處で思つた。

しかしそこはその時分の記憶ばかりだ。世間に出てからは、私は滅多にそこに行つたことがない。その印象の最も後なのは、二十六七になつて、島崎君と一緒に、君の大根畑の寓を出て、『何處か歩いて話ませうぢやないか。』などと言つて、戀を論じ、人生を論じ、藝術を語りながら、ぶらぶらと賑かな町を歩いて、そしてこゝまでやつて來た。それは晩春の頃で、遅い八重が美しく新緑の中に雜つて咲いてゐた。池では蛙の聲などが鳴いてゐた。

『休んで、茶でも飲んで行きませうか。』

かう島崎君は言つた。

しかし茶店などに腰掛けたことのあまりない私は、いくらか躊躇したが、折角島崎君がさう言ふので、そのまゝ、その茶店の毛布の榻の上に腰をかけて茶を飲んで靜かに話した。『ラヴといふことはもう私達にはおしまひですね。春も過ぎましたね。』かう靜かな憂鬱な聲で島崎君は言つた。

一時間ほど休んで、私達は其處を離れた。島崎君は財布から十錢出して、それを靜かに毛布の上に置いた。

然しそれでも興の盡きない私達は、それから番町の土手際に出て、市ヶ谷見附を通り越して、匹谷近くの濠の土手の上で、前に士官學校の建物を見渡し乍ら、『あひゃき』の話や近松の話などをした。私達の若

い顔に午後の日影が明るくさした。

### 山の手の空氣

牛込市谷の空氣もかなり細かく深く私の氣分と一致してゐる。私は初めに納戸町、それから甲良町、それから喜久井町、原町といふ風に移つて住んだ。

今でも其處に行くと、所謂山の手の空氣が私を堪らなくなつかしく思はせる。子供を負つた束髪の若い細君、毎日々々倦ますに役所や會社へ出て行く若い人達、何うしても山の手だ。下町等では味はひたくても味ふことの出来ない氣分だ。

山の手には、初めて世の中に出て行つた人達の生活、新しい不如意勝の、しかし明るい若い細君のゐる家庭、今に豪くならなければならぬといふ希望の充された生活、さういふ氣分が到る處で巴漣を巻いてゐる。その證據には、新世帯の安道具を賣る店とか、牛肉の切賣店とか、安い西洋料理とか、さういふものが際立つて眼に附くのが牛込の街の特色だ。

其處にも此處にも私がゐた。汚い袴をはいた私、すり減した下駄を穿いた私、蒼白い神經性の顔をした私、髪を長くして變な風にわけた私、兄と伴れ立つて歩いてゐる私、母親と一緒に買物に出かけて行つてゐる私、戀の思を闇に包んで人知れず娘のゐる家の周圍を彷徨してゐる私、燒芋を買つてゐる私、將

來の青雲を夢みつゝ得意さうに歩いてゐる私、考へ出して來ると、その私の姿は際限なく、其處の町の角、彼處の町の通、屋敷の前などに見えた。

牛込で一番先に目に立つのは、又は誰でも頭の頭に残つて印象されてゐるだらうと思はれるのは、例の毘沙門の縁日であつた。今でも賑やかださうだが、昔は一層賑やかであつたやうに思ふ。何故なら、電車がないから、山の手に住んだ人達は、大抵は神樂坂の通へと出かけて行つたから……。

私は人込みが餘り好きでなかつたから、さう度々は出かけて行かなかつたけれど、兄や弟は縁日毎にきまつて其處に出かけて行つた。その時分の話をすると、弟は今でも『毘沙門の縁日にはよく行つたもんだな。……母さんをせびつて、一錢か二錢貰つて出かけて行つたんだが、その一錢、二錢を母さんがまた容易に呉れないんだ。』かう言つて笑つた。兄はまた植木が好きで、ありもしない月給の中の小遣ひで、よく出かけて行つては——、躑躅、薔薇、木犀、海棠花、朝顔などをその節々につれて買つて來ては、縁や庭に置いて樂んだ。今、私の庭にある大きな木犀は、實に兄がその縁日に行つて買つて來て置いたものであつた。

神樂坂の通に面したあの毘沙門の堂宇、それは依然として昔のまゝである。大蛇の見世物がかゝつたり何かした時の毘沙門と少しも違つてゐない。今でも矢張、賑やかな縁日が立つて、若い夫婦づれや書生や勤人などがごろごろと通つて行つた。露肆や植木屋の店も矢張昔と同じに出てゐた。

さうした光景と時と私の幻影に残つてゐるさまとが常に一緒になつて私にその山の手の空氣をなつかしく思はせた。私の空想、私の藝術、私の半生、それがそこらの垣や路や邸の栽込や、乃至は日影や光線や空氣の中にちやんと混り込んで織り込まれてゐるやうな氣がした。

『録、芋を買つて來ないか。』

かうした母親の聲がきこえると共に、狭い六疊と八疊にさし込んで來る夕日の影があざやかに眼に見えるやうに思はれる『また焼芋か?』かう言つて、私は風呂敷を持つて出て行く。例の山伏町の通、そこには未だその焼芋屋がある。旨い、胡麻の入つた、近所でも評判なその焼芋。

その焼芋屋は、爺さん婆さんが携人で、金を澤山貯めたといふことであつた。そこにはたしか不器量な娘が一人ゐた筈だ。

魚屋、蕎麥屋、酒屋、すべて追憶をさそふ材料とならないものはない。平目、鯛、ほうほうのしやちこぼつた赤い色、鯖、烏賊、蝦、そこに私の母親か、でなければ私の妻のやうな若い女が立つて肴を切つて貰つてゐる。

中町の道——そこは納戸町に住んでゐる時分によく通つた。北町、南町、中町、かう三筋の通りがあるが、中でも中町が一番私に印象が深かつた。他の通に比べて、邸の大きなのがあつたり、栽込の綺麗なのがあつたりした。そこからは、富士の積雪が冬は目さめるばかりに美しく眺められた。



それに、其通には、若い美しい娘が多かつた。今、少將になつてゐるIといふ人の家などには、殊にその色彩が多かつた。瀟洒な二階屋、其處から玲瓏と玉を轉したやうにきこえて来る琴の音、それをかき鳴らすために運ぶ美しい白い手、そればかりではない、運が好いと、其の娘達が表に出てゐるのを見ることが出来た。

私にはさういふ娘達に話の出来る若い軍人などが羨しかつた。それに比べて、貧しい一文學書生のいかに惨めであつたことよ。『小説なんか書いて、ぐづぐづしてゐる奴は、何うせ碌なものになれやしない。』私の周囲のものでさへ、さうした冷めたい批評の目と言葉とを私に浴せかけた。

寒い正月の夜の歌留多會、美しい色彩の中に膝と膝とを交へて、ムツと蒸すやうな一間に、黄い蜜柑を白い細い手でむいて、すうと吸ふといふやうな繪のやうな光景——それが徹夜にでもなると、氣が張り、眼が冴えて、互に自分を忘れて、平生はきけないやうな會話を娘達とした。そして、朝明けの霜の白い路を家へかへつて、そのまゝ、午後はぐつぐつと寝るその楽しさ！ 頭には不健全に娘達のチラチラする色彩を種々と思ひ浮べながら……。

納戸町の私の家は、その中町の略々盡きやうとする處にあつた。私の借りてゐる大家の家の娘、大藏省の屬官をつとめてゐる人の娘、その娘の姿は長い長い間、私が私の妻を持つまで常に私の頭に絡みついて残つてゐた。その父親といふ人は、毎年見事に菊をつくるのを楽しみにしてゐた。確かその娘も菊子

と呼ばれた。『わが庭の菊見るたびに牛込のかきねこひしくおもほゆるかな。』『なつかしき人のかきねのきくの花それさへ霜にうつろひにけり。』かういふ歌を私は私の『歌日記』にしるした。

その娘は後に琴を習ひに番町まで行つた。私は度々その後をつけた。納戸町の通を淨瑠璃坂の方へ、それから濠端へ出て、市谷見附を入つて、三番町のある琴の師匠の家へと娘は入つて行つた。私は往きにあとをつけて、歸りに又その姿を見たい爲めに、今はなくなつたが、市谷の見附内の土手の涼しい木の蔭に詩集などを手にしながら、その歸るのを待つた。水色の蝙蝠傘、それを見ると、私はすぐそこらかけ下りて行つた。白茶の繻子の帯、その帯の間から見ると白い柔かな肘、若い頃の情痴のさまが思ひやらるゝではないか。『今でも逢つて見たい。否、何處かで逢つてゐるかも知れない。しかし、もうすつかりお互に變つてゐて、名乗りでもしなければわからない。』不思議な人生だ。

私の作に『小詩人』といふのがある。處女作ではないが、それが出て、いくらか文學者仲間に滿更でもないと思はれた作である。その作はその菊子がヒロインである。眉山君は、この作を読んで、始めて私に手紙を呉れて、『姫百合や草鞋も知らぬ岩の下。』といふ俳句を寄せて呉れた。

こんなことを考へるかと思ふと、今度は病後の體を母親につれられて、運動にそこ此處と歩いたことが思ひ出される。やきもち坂はその頃は狭い通であつた。家もごたんと汚く並んでゐた。坂の中ほどに名代の鰻屋があつた。

病後の私は、そこからそれに隣つた麴坂の方をよく散歩した。母親に手をひかれながら……。小さな溝を跨がうとして、意氣地なくハタリと倒れたりなどした。母親もまだあの頃は若かつた。

柳町の裏には、竹藪などがあつて、夕日が靜かにさした。否そればかりか、それから段々奥に、早稲田の方に入つて行くと、梅の林があつたり、畠がつゝいたり、昔の御家人の零落して昔のまゝに残つて住んでゐるかくれたさびしい一區劃があつたりした。山の手はさびしかつた。早稲田近くに行くと、雪の夜には狐などが鳴いた。『早稲田町こゝも都の中なれど雪のふる夜は狐しばなく』かう私は詠んだ。

早稲田の學校なども小さかつた。建物が二つか三つほつんと畑や田圃の中に立つてゐたといふ風であつた。その附近の町家も軒は並べてはゐたが、到底今の繁華を夢想することも出来ないほどさびしかつた。生徒も少なく、大抵は和服で、ヒヤメシ草履などをはいてO君などは通つた。

今では郊外近くにも、さうした光景を見ることが出来なくなつたが、或はそれは維新以前の江戸の近郊の面影の残つてゐたさまかとも想像されるが、其時分は到る處に、團子に鮎位を置いた休茶屋がよく見出されたものだ。寺参りなどに來た人達が、皆そこに休んで行くのである。車や電車の便のなかつた昔は、人は大抵のところは皆歩いて行かなければならなかつたのである。近郊の趣味を全く破壊し去つた電車！

早稲田から鶴巻町へ出 來るところは、一面の茗荷畑で、早稲田の茗荷と言へば、野菜市場にもきこ

えたものであつた。私達はその茗荷畑の中に細く通じて末に野の雑木林の中に入つて行く路をよく歩いた。時には又、婆さんがその取り立ての茗荷を籠に入れて負つて賣りに來た。

靜かに入つて物を思つたり何かするに好いやうな林は、まだその頃はそこゝに残つてゐた。茶菓の實が赤く人知れず熟してゐたり、初茸が出たりするやうな松林もあつた。冬は裏の林に風が來た。それに、その時分は一つしかなかつた山の手線の汽車の音が、夕暮に遠く野を掠めてきこえた。

喜久井町に住んだのは、それから五六年経つてからだが、私が二十四五になつた時分からだが、そこは、元、ある大名の下邸のあつた跡で、立派な泉水があり、すぐれた庭であつたらうと思はれる。ところが、人工から再び自然に返らうとして、築山は丘に、池は田になつてゐた。邸の趾はひろい原で、そこにほつねんと一軒私の借りた家が建てられてあつたのだが、そのさびしい靜かな光景が、私の心を惹いて、兄や母の反對するにも關せず、四谷から引越して來たのであつた。私は朝に夕にそのひろびろとした田と丘とに對して、盡きない空想に耽つた。

それに、田を越した向うにある丘の上の眺望が非常に好かつた。丘の向うには、榛の並木が並んで立つてゐて、彼方の路を通る車の音が靜かに秋の空に響いた。

私は一人で又は友達と一緒に、よくその丘の上に立つた。今ではもうさうした眺望臺を私達は何處にも得ることは出来まいと思ふ。ひろいひろい地平線の上に漂つた雲、向うに連りわたつた目白臺の翠微、

下に江戸川が細く布を引いたやうに流れてゐるのが手に取るやうに見えた。秋の静かな日の夕ぐれなどは殊によかつた。それに、丘の上には一面に萱原がさらさらと鳴つた。

自分の所有か何かの様に、友達が来ると、屹度私はそこに伴れて行つた。

『好いだらう?』

『これは好い。かういふ處がこんなところにあらうとは思はなかつた。』かう友達は言つて、踞して詩や小説の話などをした。友達の歸る時には、『それぢや、丘の上まで送らう。』かう言つて私は家を出た。

その丘の上から見ると、桔槔、庭、私のゐる狭い書齋、さういふものが唯一目に見わたされた。又、反對に私の家の縁からは、丘の上に立つてゐる人の顔が赤く夕日に照されて見えた。私は月の夜などに、榛の林をぬけて、丘の上を通つて、そして家に歸つて來たりした。

私が新婚した時、歌の師匠が、『なひきふす向ひの丘にふる雪を妹とうちとけて君は見るらん。』かういふ歌を詠んだが、その靡き伏した丘のなつかしさよ。

明治の文藝に携つた人達の追憶なども、かなりによくその丘と混り合つてゐる。獨歩もその丘の上に登つた。眉山も、宙外も、紅葉も皆私と一緒にその丘の上に登つて、あたりを眺めた。風葉とは曾てその丘の上で、ツルゲネフの『浮草』の話をした。ゾラ、ドオデエ、さういふ人の作を私はよくそこで讀んだ。

牛込の山の手には、明治の文壇の人達がかかりに多く住んでゐた。坪内博士の大久保、紅葉山人の横寺町、江見水蔭君の北町、川上眉山君は小石川の富坂から牛込の北山伏町に移つて住み、後藤宙外君は私の家と丘を一つ隔てた辨天町に住んでゐた。そしてその牛込の山の手の文壇的空氣は、一面早稻田派一面硯友社派の混り合ひ纏れ合つた空氣であつた。

『早稻田文學』は鷗外漁史の『しがらみ草紙』と兩々相對した。一方はイギリス文學、沙翁、一方はドイツ文學、輓近派、その對立は文壇でも稀に見ると言つて好い好對照であつたが、その中に介在して、創作専門の硯友社があつたのは奇觀であつた。そして早稻田派も硯友社派も黨とか團結とかいふ氣分が非常に多かつたが、鷗外漁史が、それに反して、徹頭徹尾、その孤獨の勢力を發揮して、縦横無盡に文壇になで斬を試みたのは、當年の若い文學書生に深い深い影響を與へた。鷗外漁史は、その時分から、子分を拵へることが嫌ひであつた。

しかし文章の重んぜられた當時にあつては、作家として世に立つには、何うしても創作専門の硯友社に趨らなければならぬやうな形があつた。坪内博士は、『どうも、君の方には作家が多いが、僕の方には、どうも書く奴がなくなつていかん。何うも學校では、十分に文章をみがくわけに行かないから。』かう紅葉に言つたといふ。以てその當時の形勢を知ることが出来る。

兎に角Y新聞紙上の紅葉の作品は、今日では想像することが難い位に讀者に喜ばれたのであつた。誰

も彼もかれの朝の新聞の一回を待ちかねた。一日休んでも、人々は失望した。「紫」「紅白毒罌頭」後には『多情多恨』『金色夜叉』など。

早稲田の文科の一期卒業生に金子筑水氏があり、二期に島村抱月氏、後藤宙外氏があつたが、金子島村兩氏が全然早稲田を離れなかつたのに反し、後藤氏は、その卒業論文に『紅葉論』を書き、それによつて、次第に硯友社に近寄つて來た。かれが主裁した『新著月刊』に硯友社の秀才が多く紹介されたのもそのためであつた。

島村氏はその時分よく創作を公けにした。すぐれたものが多かつた。何方かと言へば、西洋かぶれのしない、近松張りの簡潔なものが多かつた。『めをと波』などといふ作は評判が好かつた。

内田不知庵氏も矢張多くは牛込に住んでゐた。氏は千駄木派にも、早稲田派にも、硯友社派にも出入したが、自由に、勝手に、氏一流の議論をやるので、何方かと言へば、どの派からも敬して遠けられてゐた『文學者となる法』といふ一書は、殊に硯友社の人達に嫌はれる材料となつた。

兎に角、牛込の山の手は、私に取つて忘れられぬところである。一つの通りでも、一軒の家にも、又は一草の動きにも……。

## 卯の花の垣

私の歌の師匠は松浦辰男先生であつた。桂園の直系、香川景恒の門下で、景樹には師事しなかつたが、その晩年の高弟松波遊山（資之）とは殊に交際が深かつた。

名聞を好まなかつた師匠の名は、今日では誰も知る人はあるまい、特殊の歌道の人でない限りは……。しかし私はその師匠の人格と歌論とには、尠なからざる影響と感化とを受けた。

私の藝術の Realistic tendency の大部分は、實に先生の歌論から得たと言つて差支ない。私は歌に由つて、藝術の深いところに入つて行つた。

その頃、先生は牛込の田町にゐた。古い黒い冠木門、白壁の色の褪せた土蔵、垣の上には、先生の手づから栽ゑた卯の花が夏は白く往來の人の眼についた。私は柳田國男君や宮崎湖處子や、『ねさめてもねさめても猶長月のあり明の月ぞまどに残れる』といふ名歌を詠んだ同氏の故の夫人や、Sや、Oや、さういふ人達とよく其處に出かけた。

當時四十五六であつた先生に取つては、一日歴史研究に大學に勤めて來られる先生に取つては、私達若い者が不斷に訪問して行くといふことは、一方ならぬ迷惑であつたに相違なかつた。しかし先生はそれを少しも面に現はさずに、諄々として教へて下さつた。

『歌はことほるものにあらず、調ぶるものなり。』これは桂園の唯一の教義だが、それを細かくわかるやうに私達に教へて呉れたのは先生である。或は歌の實際の上に於て、或は歌論の上に於て……。

その冠木門をあけて入ると、暗い陰氣な玄關があつて、そこは式臺風になつてゐる。そこを訪れると、『ゐらしゃいます』とか『ゐらつしゃいません』とか丁寧に挨拶する親類の娘が出て来た。

先生はひろい十疊ほどの一間で、私達に應對した。

無遠慮な私達は、深い先生の造詣も経験も知らずに、いろいろ藝術上の議論などを、生ない、加減な藝術観などをよく先生に打突けた。それでも先生は諄々としてその教ゆべきところを私達に教へた。

先生の歌集は、『萩の古枝』と言つた。歌は何方かと言へば固い方だ。直好よりも景樹、貫之と言ふ方だ。従つて、それには、直情徑行なところがない。天真爛漫なところがない。それが惜しい。

先生は直好のやうに八方無碍といふ方には行かずに、一路を素直に、神祕の境に入つて行かれた人だ。晩年には、幽玄の境に深く深く入つて行かれた。

歌でも俳句でも、藝術としては同じである。第一歩は内容である。第二歩は表現である。第三歩は自然——この大自然との同化である。私はアルノオ、ホルツの徹底自然主義の教義なども、先生の歌論の中に明かに見出すことが出来た。

その座敷に面した中庭、秋の七草の一面に栽ゑられたその中庭を、私は今だに眼の前に浮べることが

出来る。そこには廻り縁があつて、その向うの離れに先生の老いた母親が住んで居られた。凡そ私の知つてゐる人で、先生ほど母堂に至孝であつた人を私は見たことがない。先生は言はれた。『矢張性が合ふのですな。孝行つて言ふことはしたくつたつて出来ない。しやうと思つて出来るものではない。矢張、神祕、幽玄、と言つたやうな境ですな。つまり縁が深い母子なのです。』根本まで入つてゐるではないか。

その先生の死の通夜を、私は柳田君と一緒にした。それはもうぐつと後で、自然主義が天下を風靡した頃で、形式打破や情偽打破の思想が燎原の炎のごとくあたりを張りわたつてゐた。自由を欲する *Free thinker* である私達に取つては、通夜などは古い窮屈ないやな形式であつた。しかし猶私は袴を穿いたまま、手を膝に置いて、一睡もせず、先生の遺骸に侍した。秋で、蟲の音が終夜きこえた。

人格の尊さ、経験の意味深さ、神祕幽玄の不思議、さういふものを私は先生から學んだ。先生は私の小説を読んだことはないであらう。又先生は私の小説を読んだとして、その十中八九は解せられずに終るであらう。しかし、今日考へて見ると、私の藝術はその七八分を先生の人格と歌論とに得たものであることを思はずには居られない。

紅葉、鷗外、さういふ先輩の感化をも私はかなりに受けた。外國の作家、ツルゲネフ、ドオデエ、ゾラ、モウバツサン、フロオベル、トルストイ、さういふ人の書いたものからも受けた。しかし感化は書物よりも生きた人より受けたものの方がぐつと大きい。私は先生の魂の一部を受けたものの一人である

ことを喜ばしく思ふ。

なつかしい卯の花の垣よ。中庭よ。秋草の花よ。

### その時分の文壇

その時分の文壇は、硯友社派、早稻田派、千駄木派、國民文學派、根岸派、女學雜誌派、概してこの六つにわけることが出来た。この中で、硯友社、早稻田が一番勢力があつたが、しかし文壇の暗潮は千駄木派、國民文學派などの方に偏つて流れてゐた。根岸派には、露伴あり、篁村あり、思軒あり、その一角は半は逍遙博士を通じて早稻田に、半は露伴から千駄木派の鷗外漁史へと通じてゐたけれども、何方かと言へば、研究的でなく、道樂的乃至交遊的であつたがため、その團結力は餘り鞏固ではなかつた。しかし、その中の空氣は面白さうであつた。またいくらか戯作者風のところなども残つてゐて、通なこみや市井のことや演劇のことなどに深い興味を持つてゐた。旅などもその連中はよくした。篁村と露伴が木曾旅行中、喧嘩をして別れたことなどを想起すと、その時分はかれ等も若かつたものだと思ふ。それから高橋太華其他の人々と一緒にかれ等は妙義に遊び、その旅行費をつくるために、銘々に旅行記を合作したことなどもあつた。宮崎三昧氏などもその傍系の一人であつた。

しかし、さうした根岸派の態度には、若い當時の文學青年は多くは反感を持つたやうである。現に、

私なども、露伴が何うしてあゝいふ連中の中に入つたかと疑つた位であつた。

齋藤綠雨のつむじ曲りは、従つて當然加はるべきこの派に加はるを屑としなかつた。その癖かれは露伴と近く、いくらかれを尊敬してゐたやうなところがあつたので、それを透してか、それとも亦別に意味があつたのか、かれは後には、千駄木派の鷗外漁史へと近づいて行つた。

鷗外漁史が『舞姫』を出した時分には、『いやに牛肉くさい小説だ』とか、『翻譯ものぢやないか』とか言はれたが、漁史の精力と學識とは、忽ち群小の批議を抑塞するに就いて、何等の面倒をも容れなかつた。漁史の眞面目な評論の前には誰も屈服した。逍遙博士ですら受太刀であつたのだから、傲岸な紅葉山人も後にはそれを承認せずには居られなかつた。その癖、紅葉は一大敵國としてかれを見てゐたと見えて、その子分の漣山人の獨逸文學出身であるのを利用して、鷗外漁史の批評に、少しでも隙があつたら、ケチをつけさせやうとしてゐた。しかし漣山人のドイツは到底鷗外漁史の敵ではなかつた。漣山人はいつも減茶減茶に粉齧されるのが例であつた。

鷗外漁史の方では、あの硯友社の人達の不眞面目な、洒落澤山な、負けさうになるとちやつほこを言つてごまかさうとする態度を殊更に憎んで、益々正面からそれに向つて切つてかゝつた。しかし漁史も流石に紅葉の才と文とだけは認めたと見えて、『われもかの紫の一本ゆゑにかの雜誌を愛讀するものなれば』と言つてゐた。紫の一本は紅葉で、かの雜誌と言ふのは、硯友社の機關雜誌『江戸紫』であつた。

『しがらみ草紙』をひもとくと、芝罘園對鷗外の論戦があるが、これがその敵對行爲の最も露骨にあらはれたものであつた。

鷗外漁史は四方八面に戦を宣した。しかし鎧袖一たび觸れ、ば、敵は皆々粉齏されるといふ形であつた。繪畫論、演劇論、往くとして可ならざるなく、その議論は彫刻、朗讀法などといふのにまで及んだ。今日讀んで見れば、さう大して驚くほどのものもなかつたけれど、思潮の進まない批評の幼稚な當年にあつては、群羊の中に一人咆哮せる狼のやうな感があつた。従つて、眞面目な文學青年は、皆々その『しがらみ草紙』へと向つて靡いて行つた。

否、文學青年ばかりではない。多少既に名を出した作家でも、皆な『しがらみ草紙』を愛讀した。『埋木』即興詩人の翻譯が何んなに文壇的革新を促す材料となつたか知れなかつたのであつた。

であるから、『水沫集』一卷、これは、ことにその頃のすぐれた記念文集であつたといふことを私は思ふ。勿論、それはかれの創作ではなく、翻譯である。しかし、そのさまざまの各國の翻譯が、紅葉萬能、硯友社萬能の文壇にいかにも異つた清新な氣分を齎して來たであらうか。

二葉亭の『あひびき』に始つた外國文學翻譯は、鷗外の『惡因縁』浮世の波』更に『埋木』に至つて、益々その光輝を増した。私達は篁村や、露伴や、紅葉や、更にそれ以外に發展して行かなければならぬ新領地のあるのをそれで知つた。

早稻田の逍遙博士は、これに相對して立つてゐるが、その主張する處が主に英文學であり、沙翁であつたために、新しい大陸的文藝の思潮を喜ぶ文學青年に取つては、甚だじみな、煮え切らない、齒切れのわるいものであつた。近代の英文學からは、到底鋭い現代的氣分をさがすことが出来なかつた。

ところが、この鷗外と逍遙との二大傾向を餘所に、最初から發達して來た外國思潮派があつた。それは國民文學派である。『國民之友』『國民新聞』を舞臺としてゐる一つの流派である。この派は外國思潮派ではあるが、何方かと言へば、英國派、基督教的派で、新聞雜誌を透して外國の思潮に觸れてゐるために、『早稻田』の英文學よりは、いくらか新しいところがあつた。何しろ『あひびき』や『惡因縁』が『國民の友』に載せられた形から押しても、この派の急進派であつたことを知ることが出来る。

この國民文學派は、無論初めは徳富蘇峯氏であつたが、氏が政治方面に入つて行くにつれて、その後、弟の蘆花氏、宮崎湖處子、山路愛山氏、嵯峨の屋氏、後には國木田獨歩といふ風に移つて行つた。この派の中で、基督教的の傾向を持つたものが、『女學雜誌』を始めた。巖本善治氏がその首領であつた。ところが、その基督教的な部分に嫌らないで、その別派として世にあらはれたのが、所謂文學界派である。従つてその派の傾向は、純英國派で、沙翁、キイツ、バイロン、シエレイなどの系統を帯びて世に出て來た。天知、禿木、秋骨、透谷、藤村などの人達である。

この派は勿論、硯友社とは遠く離れてゐた。勿論、後にはその一部が紅葉に近づいては行つたが……。

それに、この派は國民文學派、千駄木派にも遠かつた。早稻田にも無論關係がなかつた。藤村氏がその處女小説『うたゝね』を新小説に載せた時、その當時の新進小説家のチャンピオンであつた泉鏡花氏は、『ふん、あれでも小説か。』といふ風な語氣を洩したことがあつたが、それを思つても、當時の硯友社のいかに勢力があつたかが點頭かれる。

兎に角さういふ風に、その時分の文壇は混沌としてゐた。それに、内容よりも文章が先きであつた。『さうさな、奴もちつとは書けるやうになつた。』とか、『イヤにバタ臭い文章だな。』とかいふ評語が、誰でもの口に上つた。その癖、文體の統一と言ふことはまだ少しも出來てゐなかつた。言文一致、それにも澤山の種類があつたし、雅俗折衷、それにも思軒調、篁村調、西鶴調、近松張、などといふ別があつた。紅葉などでも一作毎にその文章の變化を考へて筆を執つた。『何うも言文一致も好いが、旨味が無い。骨を折つて書いても張合がなくなつてね。』などと紅葉は言つた。

宙外氏などの小説にも、雅俗折衷とも言文一致ともつかないものがあつたのを私は覚えてゐる。

一葉女史があのだ才を抱いて、あゝした不自由な文章を書いたのも、當時の文體の不統一を語つてゐる好い證據だ。

鷗外漁史の翻譯をたどつて見ても、文體の不統一な事は、今でも明かに指點することが出来る。『埋木』と『悪因縁』とでは餘程文體が違つてゐる。かと思ふと、『洪水』のやうに、すつかり言文一致でやつて

見たのもある。『即興詩人』あたりに行くと、すつかり鷗外一流の固い調子である。

しかし、かうした Sturm und Drang の中にも、文體が一に歸さうとして進んで行つてゐたことは事實である。そしてそれは何うなつて行くか？ つゞいて起つて來る答は、『何うしても、外國の小説の文脈を参考するより他仕方がない。』かう誰も彼も考へたらしい。

私は紅葉の『多情多恨』鷗外の『即興詩人』この二作が後に來るもののために、ある文體を暗示してゐたことを、今では思はずにゐられない。

それに、小杉天外氏のあるもの、小栗風葉氏のあるものなども、眞直に今の文體に向つて進んで行つた。

しかし、鷗外氏がさういふ花々しい奮闘振を見せたにも拘らず、創作の天下は依然として紅葉の天下であつた。鷗外氏は、創作では何うしても硯友社に對抗することが出來なかつた。それに、一時、紅葉と名を齊うした露伴はすつかり筆を戟めて、もう減多に小説を書かなかつた。齋藤綠雨も理窟だけは立派なことを言ふが、いざ書くとなると、『門三味線』のやうなものを書いた。さうかと言つて、湖處子の書いた『まほろし』などといふ小説も決して旨いものではなかつた。

紅葉、眉山、柳浪、さういふ人達がその時分の大家であつた。

そこに、日清戦争を境にして、新しい機運が鬱然として首をもたけて來た。雑誌なども非常に殖えた。



『太陽』の出来たのも、『文藝俱樂部』の出来たのも、『帝國文學』の出来たのも、皆なその年である。新しい作家としては天外、宙外、風葉、鏡花、春葉、秋聲などが崛起した。

その時、紅葉は言つた。『でも、新進作家と言はれるものは、皆な、家に來るものばかりだ。家の子郎黨だ。』かういふ意味のことを言つたが、その言葉の中には、流石文壇に覇を唱へた紅葉も、そろそろ新時代の若い氣運に壓された形になつて來てゐたのを想像することが出来る。そして一方『しがらみ草紙』が『めざまし草』となつて、所謂大家連が新進作家と相對抗するといふ形を取つて來た。

それに、評論の新進、樗牛、桂月などもそろそろ頭を擡げて來た。

これが明治二十八年から三十一二年までのことである。

『めざまし草』はこの意味で見て面白い。鷗外が露伴、綠雨で満足せず、思軒、紅葉までをもそのグループの中に入れて、盛に『ひいき』とか『わる口』とか言ふ小説批評をやつたのは、文壇的に見て來ても、頗るめづらしい現象であつた。樗牛、桂月なども常にその檜玉に擧げられた。『一葉閱歷論』なども其の紙上に出た。

### 當時の大家連

『めざまし草』の合評、あゝいふものは文壇にはめづらしい。

機智、皮肉、滑稽、さういふものが盛んに出るかと思ふと、恐ろしく細かい術學的の研究などがその一方に出た。わる口を言はれながら、そのわる口を浴せられた當人が、自分で嘖き出さずには居られないといふやうな批評が澤山にあつた。

主として、綠雨、露伴などが、もういふ旨い洒落を言つて、抑塞された溜飲を下けてゐたのであらうと思ふ。

また一方、その時分の新進作者は、知識に於ても、學問に於ても、又その文章に於ても、頗る半熟のものが多かつた。すき間だらけであつた。一本突つ込まうと思へば、何處からでも突込めた。

綠雨の『金剛杵』それを「こんがうきね」と言つたとて、桂月が笑はれた。實際その金剛杵は旨かつた。あゝいふ洒落れたものは、今の文壇では誰も書けまいと思ふ。

新進作家は、誰も大抵はわる口を言はれたが——殊に、私などは、腹にも据ゑかぬといふほどひどいわる口を言はれたが、しかしその批評は、今日考へて見て、決してわる口ばかりでなかつたと言ふことがわかる。その内容には、非常に有益な、今日讀んで見ても有益な批評があつたのである。中でも、綠雨、露伴、鷗外三氏の言つた言葉の中に……。

しかし若い時には、そんなことはわからない。又わかるほど餘裕のありやう筈がない。従つて、人に逢つては、『あれは逢つちやかなはない。誰も片なしだから、』などと言つてゐるけれども、内心では、『め

『ざまし草』の新刊が雑誌屋の店頭で並んでゐるのを見るのが辛かつた。見たいには見たいし、見るのもイヤだし、さうかと言つて見ぬわけにも行かぬので、店頭に立つて自分のわるい口を言はれてゐるところだけを見て、顔を赤くして、腹を立ててさつさと出て行つた。今思つてもあはれな惨めな文學書生であつたことが眼にちらついて見える。

その『めざまし草』の初號の出た同じ正月の『國民之友』の新年附録には、新進作家のチャンピオンである鏡花君の『琵琶傳』と一葉の『わかれ道』とが出た。『國民之友』の附録は大家號授與所と言ふ名があつたもので、丁度今の『中央公論』に似てゐた。『わかれ道』の評判の好いのが、私には堪らなく妬ましく且つ羨しかつた。

『文學界』の人達も、その頃には、もうたゞの原稿を書くのがイヤになつてゐて、銘々他の雑誌へとその文章を載せるやうになつてゐた。秋骨氏はY新聞の批評家となつた。禿木氏は『帝國文學』にその研究を寄せた。島崎君は、詩から小説に筆をつけて、『うたゝね』といふ處女作を公けにしてゐた。

### H書店の應接間

H書店の應接間は私が知つてゐるだけでも、一度、二度、三度變つた。最初は店のすぐ上の八疊、その次は少し奥になつた六疊の狭い一間、其處には若い男女の密のやうな傭曳の春の月夜のコロタイプ版

の額がかゝつてゐた。

その次は、編輯部の隣りで、たしか八疊の一間。

『癪で仕方がないけれど、たうとうあの應接間へ行つた。金が欲しいんでね。仕方がないね。』かう湖處子が言つた。

湖處子はその時分『國民之友』の批評欄に、三面樓主人といふ名で筆を執つてゐて、いつも硯友社側の柔らかい作品を攻撃してゐた。

湖處子に限らず、誰も皆なこんなことを言つたらうと思ふ。文を賣る痛苦、雑誌の主筆に泣きつく羞耻、さういふことを誰も彼も味はせられた。

鏡花、風葉——新進の人達でもさういふ流行兒は好かつたけれど、私のやうな評判のわるい奴は、金がなくなると、いつも雑誌の主筆に泣きつかなければならなかつた。文を賣るについて、さう先輩や友人ばかりを煩はしては居られなかつた。

其時分、硯友社の乙羽君がH書店の婿となつたので其羽振りには凄しい勢であつた。戸崎町の其新宅には鏡花君が紅葉の玄關から行つて住んだ。乙羽君は新進の花形である鏡花君と一葉女史とを最負にした。私も折々その新宅を訪ねた。

乙羽君は、艱難を経て來た人だけに、思ひやりの深い人であつたけれども、洒脫な、人を馬鹿にした

やうな、瓢箪鯨でつかみどころのないやうな態度は、キ一本な私のやうな若い者には、常に反感を起させるのが例であつた。私はかれの新宅などには行きたくないのだが、しかし行かなければならない身を何んなに耻かしく情けなく思つたことか。

しかし、何の彼のと言つても、乙羽君は私に取つては恩人だ。私の『日光山の奥』の一文を『太陽』に載せて呉れたのも、一廉の紀行文家にして呉れたのも皆な乙羽君の周旋であつた。乙羽君も、紅葉山人と同じく、私の小説にはねつから價値を置いて呉れなかつた。バタ臭い小説、泣き蟲の小説、世間見ずの小説、かういつも批評して、『小説家に君がならうたつてそれは無理だよ、それより紀行文の方が好い。』かう言つて、かれは私の紀行文をいつも買つて呉れた。乙羽君にして見れば、實際私の書く小説なんか物になつてゐなかつたに相違なかつた。それがまた私には少なからぬ苦痛であつた。

私はその時分、『野の花』を書いた。それはかなりの長篇で、百七十枚近くあつた。それをそのH書店の應接間へ持つて行くと、乙羽君はそれをひねくり廻して、『こんな長いものを書いたつて、しやうがないね。一三十枚のものなら、何うにかなるつて言ふこともあるけれど……』かう言つて、『まあ、しかし主筆に話して見よう。僕一人の了簡にも行かないからね。』

かう言つたきりで、半年ほど経つてからその原稿を返してよこした。

私は其の應接間——そこで乙羽君なり雑誌記者なりを、ほつねんとして待つてゐる自分を歴々と眼の

前に浮べることが出来る。その應接間には、いろいろな人がやつて來た。探菊山人などにも逢つたことがある。三昧道人にも逢つたことがある。たしか露伴氏にも、柳浪氏にも逢つたことがある。柳浪氏はその時分全盛で、よく『文藝俱樂部』に巻頭の小説を書いてゐたが、かれはそれを大抵は吉原の女郎の室で書いた。そして原稿引かへの金を貰ふべく其處から使のものなどをよこした。

『先生、まだあそこにあるんだぜ……』こんなことを笑ひながら乙羽君はよく言つた。それに柳浪氏は當時でも名代の健筆であつた。五六十枚は一夜で書いた。

それに、その時分は、小説を買ふ本屋としては、H書店とS書店との二つしかなかつた。『都の花』のK書店は、その時分は文藝物に全く手を引いてゐた。

乙羽君の半生は短かつたけれども、その大橋家に婚に行つた三年乃至四年は、頗る花々しいものであつた。渡邊姓を名乗る中は、單に一作家としてきこえてゐたばかりであつたが、大橋姓を名乗つてからは、誰も彼も皆なかれの家へ行つた。露伴などもかれの家へ遊びに行つた。

紅葉山人はしかしH書店よりもS書店の方が親しかつた。何故か紅葉山人はH書店とあまり仲が好くなかつた。その癖、門下やその周囲の友人などがH書店に親しくするのは咎めなかつたが……。

紅葉の作物を読んだものは、紅葉が男女の心理について、かなり深い到達を發見することが出来ると思ふ。『金色夜叉』の中心を貫いた作者の思想、又は『三人妻』の中にあらはれたある一部、『多情多恨』

の中に見える鷺見柳之助の苦悶、あの柳之助の苦悶は、妻にわかれた苦悶ではなくて、女に別れた苦悶ではないか。死別ではなくて生別ではないか。さう見た方が少くとも自然でないか。

『金色夜叉』のお宮、あれほど通俗を動かす女主人公のモデルには、誰がなつたことであらう。又、あの貫一のモデルには誰がなつたことであらう。私はN氏やO氏を通じて、その間の二三の消息をきいたが、しかし今更それを此處に披瀝する必要もない。

當時の作者達も——金のとれる人達は、かなりに遊蕩をやつたのであつた。芝の紅葉館の全盛時代、その頃には紅葉もN氏もS氏もよくそこに行つて遊んだ。

紅葉が柳橋あたりの花柳界に遊んだことは、その晩年の日記を読むものの皆な首肯くところである。

乙羽君は養子になつてから、一時寫眞に熱中した。しかし、これは寫眞は寧ろつけたりであつたかも知れない。何故なら、かれはその時ほん太の鹿島氏と懇意であつたから……。又後には例の有名な光村利藻氏とかなり濃やかな交を結んでゐたから……。柳橋か向島あたりに行くと、今でも『乙羽さん』を知つてゐる老妓がある。

## 市 區 改 正

其頃は東京は市區改正で喧しかつた。

明治初年の東京は、次第に新しい日本帝國の首府として打建てられつゝあつた。土藏造りの家屋は日に減つて、外國風の建物は日増に加はつて行つた。日本橋の大通の改築が口の上されて、『無理に西洋風にするのも考へもんだ。日本風の土藏が却つて首府の美觀をそへてゐるぢやないか。』などと言ふことが新聞などに書かれた。

しかし新しい都市の要求は、漲るやうにあたりには満ちわたつた。御成街道は見る／＼大きな通りになり、大通もぐつとひろくなつて行つた。橋梁のかけかへ、火消地の撤廢、狭い通りの改良、昔の江戸は日に日に破壊されつゝあつた。

水道工事もかなり面倒であつた。私は牛込の山の手の町の通りが、すつかり掘り返されて、全くの泥濘に化し、足駄でも歩くことが出来なかつたのを覚えてゐる。私の歌の師匠の住んでゐる田町の細い通などは殊にそれがひどかつた。

『丸で泥海ですな。』

『何うも水道工事でな。』

かう師匠も言つた。

鐵管が彼方にも此方にもごろごろところがされて、泥鼠のやうになつた人足が、朝の寒空に、焚火をして、その周圍を取巻いてゐたりした。例の鐵管事件などといふのがその頃にあつたのである。

都下の五大橋、この内で新大橋が一番最後まで元のまゝの木橋で残つたが、厩橋、吾妻橋、兩國橋、新大橋、永代橋、それがすべて、古風な江戸式の木橋であつた時代が今更なつかしい。屋根舟なども、今では東京中で二艘とか三艘とかしかないさうであるが、それを思ふと、いつの間にか——いつ變つて行くともなく變つて行つた東京だ。

田舎からやつて来た昔の友達などには殊にその感が深いしかつた。SやOなどと同じやうに歌を咏んだTといふ友は、明治二十五年頃に、郷里の鹿兒島縣に歸つて、久し振で出て来たが、昔の跡をさがすことが出来ないで、市街の中を彼方此方に彷徨した話を私にした。「何も彼も變つて了ひましたよ、眼鏡橋（その言葉のなつかしさよ）あたりなんか、何う考へて見ても、昔の面影をさがすことが出来ませんね。講武所へ入つて行けば、それでもいくらかその時分のさまが残つてゐますけれど、須田町あたりでは、とても昔のことは考へられません。それに、御成街道、淺草も變りましたな。もとの狭い通の氣分などは、もう何處にもありません。ですから、文壇の空氣なんかでも、わからなくなつて了ふ筈です。すつかり田舎ものになつて了ひました。』

都會の變遷の中にあるために、——見馴れてゐるために、それほどにも思はない變化、その中には時を経つて行くのであつた。

毎年見る上野の花、向島の花だ。それでゐて、上野も向島もその時分とは既に夥しく變つてゐた。上

野には例の記念の黒門が既になかつた。東照宮の傍の大きな通りなども出来た。公園の樹木は日に月に煤烟に襲はれて枯れつゝある。鳥ももう昔私が子供で根岸にゐた時分ほど澤山集つて来ない。図書館も大きく出来た。それよりも、更に更に一層變つたのは向島の花だ。多くの工場の煤烟のために、又た土手を歩くものの多いために、櫻は年々枯れて行つて、昔は花のトンネルだと言はれた言問あたりも、すつかりもう駄目になつてゐた。何も彼も移り變りつゝあつた。

言葉などにも、いろいろと新しい言葉が出来た。豆腐屋が鈴を鳴して歩いたり、齒入屋が鼓を鳴して通つて行つたりした。出来た當座だけは、めづらしいと思ふが、それがすぐ馴れて、昔からあつたもののやうに思ひ込んで了ふ……。

東京は益變りつゝあつた。

### 私達のグルウプ

島崎君と私との交際は、その頃から始まつた。國木田君と島崎君とでは、島崎君の方が少し早かつたかも知れないと思ふ。

私が『文學界』の人達と知り合ふやうになつたのは、透谷の死後だ。矢張若い心がそれを結び附けた。私としては、『文學界』の人達の態度では満足が出来なかつた。何うしても小説を書かなければならない。

戯曲や詩よりも何うしても小説、かう私は深く思ひ込んでゐた。

それが崇拜してゐながら千駄木派に行かずに、硯友社のグループの中に入つて行つた動機であるが、私の小説が何うも硯友社の人達に認められない。又一方には、硯友社の人達の態度では、とても將來の新しい小説を書くことが出来ない。それに、通人らしい洒脱な硯友社の人達の氣風も私に合はない。それも、もし鏡花、風葉、春葉などといふ人が、多少自分を認めて呉れたなら、或はそこにじつとしてゐたかも知れないが、兎角他人扱ひにして敬して遠ざけられる。紅葉の門下生にならないといふので、いやに皮肉にあてこすられる。時には、『Tの原稿なんか買ふのはよせ。』位のことを紅葉は乙羽に言つたかも知れないといふ邪推なども起る。で、私の心は段々硯友社を離れて、別なグループに行くやうになつた。

『文學界』に透谷の死に對するくやみの歌を送つたのが、『文學界』の人達と觸れて行く基となつた。それに、柳田君の従兄に中川君といふ人が、『文學界』の主任星野天知君やその弟の夕影君と懇意であつたので、段々原稿を『文學界』に載せるやうになつた。『文學界』の人達は、其時分は、もうたゞで原稿を書くのが張合がないといふ風になつてゐた。

で、その『文學者』の新年會、根岸の伊香保の一間、そこで私は島崎君や馬場君や平田君や上田君や戸川君に逢つた。レールに添つた、汽車の通る度にガタガタと家の動くやうな細長い一間で、私は若い

人達の熱した氣焔を聞いた。『鷗外さんなんか誤譯ばかりしてゐる。今に誤譯調べをやつてやる。』紅顔の金釧姿の上田敏君が言つてゐるのなどが私を驚かした。歸りはたしか島崎君と馬場君と一緒に池の端の向う側を歩いて、本郷の通の方へ歸つて來た。島崎君は色の白い感じの好い靜かな若者であつた。かれは歩きながら、私が『文學界』に載せた短篇小説の批評などをした。

新花町で島崎君と別れて、それから馬場君と本郷の通りをかなり此方の方まで來た。馬場君は島崎君と比べては、元氣な快活な青年であつた。たしか其時、馬場君は鏡花の小説の批評をした。

『文學界』の人達は、私の嫌ひな英文學の方ではあつたけれど、それでも私達などよりも外國の文學に明るいのを私は見た。平田君は高師の學生、戸川君は大學の選科、いづれも英語に長けてゐて、平田君は湯島の下宿で、ジョージ・エリオットの『サイラス・マナー』などを讀んでゐた。私は平田君にドオデエの『サツホオ』などを持つて行つて貸した。

柳田君が島崎君の大根畑の家に行くやうになつたのは、確か私が紹介したのだと思ふが、下宿が近いので、後には柳田君と島崎君との交際が、私と島崎君との交際よりも却つて頻繁になつた。柳田君は白い縞の袴を穿いて、興奮した顔の表情をして、よく出かけて行つては、詩や戀や宗教の話をした。

一方私は宮崎湖處子を透して、國木田君に逢つた。國木田君はその時、例のお信さんと別れた後で、澁谷の郊外の丘の上の家に住んでゐた。かねて湖處子君からその話をきいてをり、且つその戀愛談に興

味を感じてをり、そのフレッシな鮮やかな筆に感心してゐた私は、湖處子の道玄坂の寓を訪れた次手に、突然かれの丘の上の家を訪問した。

## 丘の上の家

それは十一月の末であつた。東京の近郊によく見る小春日和で、菊などが田舎の垣に美しく咲いてゐた。太田玉茗君と一緒に湖處子君を道玄坂のばれん屋といふ旅舎に訪ねると、生憎不在で、歸りのほどもわからないといふ。『歸らうか』と言つたが、『構ふことはない。國木田君を訪ねて見ようぢやないか。何でもこの近所ださうだ。湖處子君から話してある筈だから、滿更知らぬこともあるまい。』かう言つて私は先に立つた。玉茗君も賛成した。

澁谷の通を野に出ると、駒場に通する大きな路が楢林について曲つてゐて、向うに野川のうねうねと田圃の中を流れてゐるのが見え、その此方の下流には、水車がかゝつて頻りに動いてゐるのが見えた。地平線は鮮やかに晴れて、武藏野に特有な林を持つた低い丘がそれからそれへと續いて眺められた。私達は水車の傍の土橋を渡つて、茶畑や大根畑に添つて歩いた。

『此處等に國木田つて言ふ家はありませんかね。』  
かう二三度私達は訊いた。

『何をしてゐる人です？』

『たしか一人で住んでゐるだらうと思ふんだが……。』

『書生さんですね。』

『ん。』

『ちや、あそこだ。牛乳屋の向うの丘の上にある小さな家だ。』

かう言つてある人は教へた。

少し行くと、果して牛の五六頭ごろごろしてゐる牛乳屋があつた。『あゝ、あそこだ、あの家だ！』かう言つた私は、紅葉や栽込みの斜坂の上にチラチラしてゐる向うに、一軒小さな家が秋の午後の日影を受けて、ほつねんと立つてゐるのを認めた。

又少し行くと、路に面して小さな門があつて、斜坂の下に別に一軒また小さな家がある。『此處だらうと思ふがな。』かう言つて私達は入つて行つたが、先づその下の小さな家の前に行くと、其處に二十五六の髪を亂した上さんかゝるて、『國木田さん、國木田さんはあそこだ！』かう言つて夕日の明るい丘の上の家を指した。

路はだらだと細くその丘の上へと登つて行つてゐた。斜草地、目もさめるやうな紅葉、畠の黒い土にくつきりと鮮かな菊の一叢二叢、青々とした菜畠——ふと丘の上の家の前に、若い上品な色の白い瘦

削な青年がちつと此方を見て立つてゐるのを私達は認めた。

『國木田君は此方ですか。』

『僕が國木田。』

此方の姓を言ふと、兼ねて聞いて知つてゐるので、『よく来て呉れた。珍客だ。』と喜んで迎へて呉れた。かれも秋の日を人懐しく思つてゐたのであつた。

『湖處子君のませんでしたか。何處へ行つたかな先生、今日はゐる筈だが……。又、妹でも戀しくなつて歸つて行つたかも知れない。』若い私達には一種共通の處があつて、一面識でも十年も前から交際でもしてゐる人のやうに、心に奥底もなく、君、僕で自由に話した。

『好い處ですね、君。』

『好いでせう。丘の上の家——實際吾々詩を好む青年には持つてこいでせう。山路君がさがして呉れたんですが、かうして一人で住んでゐるのは、理想的ですよ。來る友達は皆な褒めますよ。』

『好い處だ……。』

『武藏野つて言ふ氣がするでせう。月の明るい夜など何とも言はれませんが。』

國木田君の清い、哀愁を湛へた眉と、流暢な純な言葉とは、私の心をすぐ捉へた。『あゝ、いふフレッシュな文章が書けるのも尤だ。』かう少し話してゐる間に、私は思つた。

弟の北斗君は、その時十八九で、紅顔の美少年で、私達の話すのを縁側に腰をかけたたり、庭をぶらぶらしたり、ステッキを振り廻したりして黙つて聞いてゐた。縁側の前には、葡萄棚があつて、斜坡の紅葉や樺樹を透して、澁谷方面の林たの丘だの水車だのが一目に眺められた。

その家は六疊一間、そのつぎが二疊、その向うが勝手になつてゐて、何でも東京の商人が隠居所か何かに建てたものであるといふことであつた。室の隅に書棚、そこにはウォルヅウォルス、カアライル、エマソン、トルストイなどが一面に並んで、たしかゲエテの小さな石膏像が置いてあつた。一閑張の机の上には、『國民の友』『女學雜誌』などが載せてあつた。

そこに——このさびしい丘の上の家に、かれは、お信さんにわかれた後の戀の傷痕を醫してゐたのであつた。

その時は何を話したか、今はすつかり忘れて了つたが、少くとも若い心は、さばるものなくお互の會話の中に流れ合ひ混り合つて行つたに相違なかつた。ツルゲネフのことも話したらう。トルストイのことも話したらう。ハイネの詩やウォルズウォルスの詩のことも話頭に上つたらう。殊に玉茗君はその時分湖處子、嵯峨の屋などと共に、詩の方のチャンピオンであつたので、詩についての話は、私より一層國木田君と共鳴したに相違なかつた。私達は日の暮れて行くのも忘れて話した。

歸り支度をするを、



『もう少し遊んで行き給へ。好いちやないか。』  
袖を取らぬばかりにして國木田君はとめた。

『今、ライスカレーをつくるから、一緒に食つて行き給へ。』かう言つて、國木田君は勝手の方へ立つて行つた。勝手の方では、下のその上さんがかれの朝夕の飯を炊いて呉れるのであつた。その上さんの名は忘れたが何でも磯といふ大工の唄で、新宿で女郎をしてゐて、年が明けてそこに來て一緒になつたのであつた。『もう、飯は出來たから、わけはない。』かう言つて國木田君は戻つて來た。

大きな皿に炊いた飯を明けて、その中に無造作にカレー粉を混ぜた奴を、匙で皆なして片端からすくつて食つたさまは、今でも私は忘るゝことが出來ない。

『旨いな、實際旨い。』かう言つて私達も食つた。

歸りは月が明るかつた。私と玉茗君とは、澁谷の停車場の方へ急いで歩きながら、『面白い好い男だね。あんなさつぱりした人は見たことはない。』などと話した。

それ以來、その丘の上の家は、私達のよく行くところとなつた。時の間に、私達の間には深い固い交際が結ばれた。國木田君も私の喜久井町の家をたづねて來れば、私も行つてはそこに泊つて來たりした。それに、その丘の上の家の眺めが私達を惹いた。

柳田君をも私は其處に伴れて行つた。

その丘の上の家の記憶は、私にはかなり澤山にある。訪ねて行くと、國木田君は縁側に出て、『おい。』と聲をあけて、隣の牛乳屋を呼ぶ。そして絞りに立ての牛乳を二合取り寄せて、茶碗にあげて、それにコオヒイを入れて御馳走をした。

何うかすると、何處かに行つてゐないこともあつた。さういふ時には、私はひとり上にあがつて、一二時間待つてゐたりなどした。ある時雨の降る日には、矢張留守ではあつたが、ふと見るとそこに讀みたいと思つた二葉亭の『かた戀』が置いてある。で、私は一人そこにねそべつて、一日靜かにそれを讀んで、歸つて來た。『昨日は君は留守だつたが、『かた戀』があつたので、それを讀んで、靜かに君の家で日を暮した。いろいろなことを考へた。忘れられない一日だ。』こんな手紙をそのあくる日書いてやつた。

丘の上の後の方には、今と違つて、武蔵野の面影を偲ぶに足るやうな林やら丘やら草藪やらが澤山にあつた。私は國木田君とよく出かけた。林の中に埋れたやうにしてある古池、丘から丘へとつゞく路にきこえる荷車の響、夕日の空に美しくあらはれて見える富士の雪、ガサガサと風になびく菅原薄原、野中に一本さびしさうに立つてゐる松、汽車の行く路の上にかゝつてゐる橋——さういふところを歩きながら、私達は何んなに人生を論じ、文藝を論じ、戀を論じ、自然を語つたであらうか。又いかに悲しいお信さんとの戀のいきさつを聞かされたであらうか。それを私は後に、『わかれてから』と言ふ小説の中に書いた。

その丘の上の家には、湖處子の他に、山路愛山君が来た。愛山君は今でも澁谷にゐるが——その時と同じ家に住んでゐるが、そこからその丘の上の家はいくらもなかつた。愛山君はその總領の娘の何とかいふ七八歳になる兒をよく伴れて来た。その時分も肥つて、がつしりしてゐた。「子供つて言ふものは、面白い觀察をするものだ。今、こいつが風に向つて歩いて來ながら、「父さん、風が私の着物を捲つてしまふが、言つたが、ちよつと我々にはさういふ觀察は出來ないね、」などと言つて笑つた。(その山路君も死んだ!)

玉茗君、柳田君、湖處子君などの感化があつたと見えて、その頃から、國木田君は例の『獨歩吟』の中にある詩をつくるやうになつた。『山林に自由存す』といふ詩も、『遠山雪』といふ詩も、『翁』も、『去年の今日』も皆その丘の上の家で出來たのだ。

『春や來し、冬やのがれし』といふ詩の出來たばかりのを、私は其處で朗吟してきかせられたのを覚えてゐる。

夏の末から、翌年、日光に行くまで、國木田君は、その丘の上の家で暮した。思ふに、國木田君に取つても、この丘の上の家の半年の生活は、忘るゝことが出來ないほど印象の深いものであつたらうと思ふ。紅葉、時雨、こがらし、落葉、朝霧、氷、さういふものが『武藏野』の中に澤山書いてあるが、それは皆なこの丘の上の家での印象であつた。

私は今此處に、國木田君からの手紙を引く。これは翌年の春、日光に行く少し前に私に寄せたものである。國民新聞の原稿用紙に書いてある。

先行はまことに行はるべきや、霧深 水多き彼地にありて心靜かに此春をくらし、君と共にわが燃ゆる心を筆に上すを得んには如何に幸なるべき。たゞ氣にかゝるは貧しきわれ等が彼地にて暮し得べき金のことなり、されどこれ又君がたまひし如くにて暮し得んには、左程のことにもあらずと思ふ。われ等二人月に十六圓位にて事すむすべもがな、寺の主人は財貪る人とも覺えねば、われ等だにつつまやかに暮さば此事またたやすかるべし。

唯わが家の櫻見捨て、行くは惜しき心地す。梢をわたる風をき、つゝ冬の夜寒にも待ちしは此庭の春なりしものを。心せく君もわがこの心をば汲み給ふべし。庭の桃昨日今日の雨に綻びそめたり。されば櫻の咲き出でんも遠からずとぞ思ふなる。四月十二日は九段の櫻ちりてわが妻のわれを捨て行きし日なり。此日を都の空にて迎ふるは悲しけれど、われはこの悲しき日を待たむとあり。わが心はこの日を泣かんとて待ちわびつゝあり。都の春を都にて送り、かくて又日光の春を日光に迎ふるも樂しからずや、いかに。

今日は松岡(柳田國男氏)來るべきを思ひて朝より待ち侘びつ。此雨にかの人も日頃の勇氣くじけしとおほしく、遂に來らず。あまりに待たむと、すひなれぬ巻烟草のみすぎ、血、頭に上りしかば、庭

に出でて霧雨に顔をさらしつ。仰ぎて大空の雲のゆききの急なるを眺めなどする中に日暮れぬ。今はたそがれなり。雨戸は閉ぢず、風立ちて西の立木に波の音きこゆ。軒の玉水近く又遠し。机の上にはしがらみ草紙置かれて、『ふた夜』の巻ひらきあり。これを読み了りて君を思ひつ、此筆とりぬ。

『ふた夜』は、いみじき文なり。かのをとめわれも戀し。かゝるをとめのためとあらば、この命も惜しからじと覺ゆる。かく言ふは浮きたる心にあらじ、けにあはれなるは戀ぞかし。此戀思ひて、わが身の上にも思ひあたること少なからず。思ひ起せば、夢をたどる心地す。遠き物音きく心地す。あゝあやめもわかぬ暗き人の世に虹の如くあらはれて虹の如くきゆるは戀なり。君はこの虹見んと願ひ給ふ。われは消え行きしその色の一つ一つを今一度つなぎ合してこの暗き命の大空にかけばやと願ふ。もろともに果敢なき望ならずや。二日前の夕暮、われ又かの大尉の家を訪ひぬ。大空晴れて西の星きらめきし頃、丘を越しつゝ物思ひて行きぬ。此日は朝より腹痛みて苦しきまゝに、夕暮の散歩こそよからめとて出でしなり。林の中にて赤き火燃えるたり。西の空地に垂るゝあたりは、雨雲重なりて富士も見えず。春の初めながら秋の末かと思はるゝばかり物哀れなり。去年の秋しぐれて落つる木の葉の音をきゝつゝ、寂寞をめでし林は、いつの間にか刈りつくされて切株白き平地と變りしもあり。坂の上より望めば、彼家の雨戸未だ閉ぢず。白き障子なり。黒き條は半開きしなり。坂を下り又坂を上れば門なり。門を入りて板をふむ音高く内にひゞきし時、犬出て吠えつけども、いつものこととて

氣にかけず。庭に入れば、雨戸すでに閉ぢあり。入口の障子二枚は火影鮮やかにさしつ。わがおとのふをきゝて障子開きしものは誰ぞ。うれしき花子の君なりき。

わが此夕の樂しき二時間をいかでこのつたなき筆に上し得ん。父なる大尉は、今年五十幾歳の老人なれどわれと語りて笑ひ興じぬ。傍に少女坐り、これも笑ひてのみるたり。わが腹痛むよしを語りしに、鹽焼きて紙に包みつ。わが懐に入れしなさをいつの時か忘れん。

されどわがこの少女にそゝぐ夢よりも淡き戀は、『ふた夜』の戀よりも果敢なかるべし。遠からずこの少女、伯母の家に托されて、父なる大尉はわが友水上氏と同居すべしと言へば、此後少女を見んことなかなか難かるべし。あゝなつかしき少女、行末も清き幸あれかし。『ふた夜』の伯爵は三つの熱き接吻を得たれど、われは未だかゝるめぐみを得ず。行末もまたかゝるものわが額に燃ゆべしとも思はれず。

三月廿七日夜に入りて

哲 夫

録 彌 様

この手紙を讀むと、その時分のこと脈々として哀愁を私の胸にさそはずには置かなかつた。悲しいかれ、清い純なかれ、人なつつこい美しい感情を持つたかれ、そのかれと混り合つて、その丘の上の家

東京の三十年

のさまがありありと私の眼に映つて見えた。その時分、想像した人生、その人生の形と内容とは、非常に違つてゐるけれども、時が過ぎて、そしてその時の中に人生が陥没して行くさまは、かれと私と常に語り合つてゐたものと少しも違つてゐなかつた。

それは明治二十九年で、その四月の二十日に、私達は飛鳥山の花を見捨て、日光のS院に行つて寓した。そして一月そこをゐて、六月の初めに東京に歸つて來たが、その時はその丘の上の家を弟の北斗君が留守にたゞんで了つて、麴町の番町の二松學舎の近所に下宿しなければならなくなつてゐた。國木田君はそこに半年、或はもつと以上ゐたかも知れなかつた。その下宿の隣に、ある畫家の未亡人が大勢の娘達と一緒に住んでゐて、その總領娘の二十三になるのと、國木田君は再び戀に落ちた。

それが今の未亡人だ。

この未亡人との戀の物語も私はよく國木田君から聞かされた。「君は西にわれは東に野邊の路別れんとすれば時雨ふり來ぬ」これは未亡人が八王子に行くのを送つて、吉祥寺驛あたりで別れやうとした時に國木田君が詠んだ歌だ。

なつかしい丘の上の家は今何うなつたか。もう面影もなくなつて了つたことであらう。林も、萱原も、草薙も、あのなつかしい古池も……。

### 新しき思想の芽

紅葉を中心にした藝術が次第に新しい時代に壓迫されて、いろいろな方面から、新運動らしいものが起つた。これは明治二十八九年頃からで、これから紅葉の病死まで五六年の間、かれは常に陰に陽にこの新しい運動と戦つた。

一番早く反G社の傾向を表はしたものは、國民文學派であつたと思ふ。つゞいて千駄木の鷗外漁史の提唱が間接に若い人達にさういふ氣分を起させる動機をつくつた。「國民之友」の批評家八面樓主人などは殊に紅葉を排するために、その社中の川上眉山を分外に賞めたりなどした。それに、帝國大學から出た若い人達の間にも、大家——舊時代に對する新しい運動がかなり盛んに起つた。高山樗牛がその第一人者であつた。

しかしG社の勢力はまだ中々盛んであつた。紅葉は自重して多く書かないやうになつたけれど、社中同人の團結は頗る固く、それに純粹なかれの門下生で成立つた藻社の若い人達にも、學問こそなけれ、筆にかけてはすぐれた腕を持つた人が多かつたので、矢張創作界はG社の手中に握られてゐる形であつた。早稲田の一分派である宙外一派なども矢張その麾下に屬してゐた。

しかし、鷗外漁史や二葉亭氏やその他の新しい先輩に培はれ養はれた新思想、新運動、さういふもの

は、當然G社の中ぶりんな妥協的な面白半分な藝術に満足しては居られなかつた。ドイツ、フランスを透して、歐洲大陸の新しい思潮が、澎湃としてこの極東の一孤島にも押し寄せて来た。

それにしても、鷗外漁史の武者振りは、天馬空を行くと言つた形で、その學識と讀書とは十年も二十年も先に進んでゐたのである。例のレルモントフのベチヨリンなど、何んなに若い文學書生の胸を轟かしたか知れなかつた。今日でも『月草』『かけ草』の二書を繕いて見たならば、G社の藝術などがいかに後れてゐたかと言ふことがすぐ飲み込まれるであらうと思ふ。藻社の風葉、秋聲などでも、鷗外の翻譯物によつて新境をひらかれたやうな點が澤山にある。一番、さういふものに影響されない泉鏡花でさへ、『即興詩人』を愛讀して、『照葉狂言』といふ一作を得た位である。

紅葉自身がこの澎湃とした新運動の中にあるて、懊惱煩悶した形は、私はよく想像することが出来る。

紅葉はもう昔の『色懺悔』『紅白毒饅頭』の作者ではなかつた。かれはゾラも讀めば、ヂツケンスも讀み、英國通俗の作家の作品なども讀んで、新機軸を出さうと絶えず苦心してゐた。

『多情多恨』は従つてかれの力一杯の作である。その意氣込る自信もまた頗る大きかつた。それはそれを其新聞に載せる時に出した自筆の廣告文を讀めばわかる。

紅葉は所謂策略のあつた人だか何うだかそれは知らない。しかし、さうした新運動の壓迫に對して、自然にそれを防禦するやうな形を取つたのは事實である。宙外以外に一葉女史などをもかれはその社中に

近づけやうとした形跡がある。又、『文學界』の二三人もその麾下に誘はうとしたやうなところもある。秃木、秋骨、殊に、後者にはさういふ跡が歴然としてゐた。

それから、高山樗牛がその才と學と文とを抱いて、鷗外にも直接に挑戦し、G社にも反對の旗幟を樹てたので、樗牛の一敵手上田敏氏を自家のもとに引寄せやうとしたのも隠れなき事實であつた。

上田敏氏は、紅顔の美少年時代に、『鷗外の翻譯なんか誤譯だらけだ。』と言つたほどあつて、頗る秀才で、外國の新文藝にも通じ、文章も典雅幽麗の致を極め、或人からは、キザと言はれたが、又、新思潮の核心には觸れ得ないやうな處があつたが、兎に角樗牛と相對して赤門の二大秀才であつた。私の考へでは、樗牛よりも敏氏の方が或はすぐれた批評家翻譯家乃至詩人であつたと思ふ。

しかし、『文學界』の二三人の人達、乃至上田氏が紅葉の藝術に近寄つて行つたのは、一面何處か趣味の共通したところはないではなかつた。それは何かと言ふと、江戸趣味である。情緒文學趣味である。紅葉の女性描寫に對するある一種の憧憬的共鳴である。

其頃はG社の同人も頗る振はなかつた。柳浪もその名聲に捉へられて濫作した。水蔭も勉強しなかつた。漣山人は賢くも少年文學にかくれた。眉山ひとり眞面目に、筆を執つてゐるが、これも矢張新運動に壓されて、十分にその自己をその藝術に表現することが出来なかつた。G社の何人も矢張紅葉と同じく新機運に對して惑つた。

却つて年の若い藻社の人達の方が、その生々とした姿を見せた。鏡花が『湯島詣』『高野聖』を書き、風葉が『十七八』を書き、秋聲が『雲の行方』に着手し、春葉が健やかなしかし細かい家庭描寫に成功した。

### 紅葉の病死

紅葉が不治の病に罹つたといふことは、一方當時の文學書生に悲痛な念を抱かしめると共に、一方新運動の抑塞に對してある自由な感を起さしめた。文壇は暗々裡に推移した。

この宣告は悲慘であつた。また世間の同情を買ふに十分であつた。紅葉自身も無論、志を抱いて去ることの堪へ難い悲痛を感じたに相違なかつた。

病を得てから、かれは銚子に遊び、成東に淹留し、又大學病院にベッドに親しむ身となつた。戀に面して苦しんだかれは、今又死に對して苦しまなければならなかつた。この時分には、新作家に對して非常な壓迫を試みた『めざまし草』の大家連中も、自から倦んだか、それとも大勢の如何ともすべからざるのを見て止したか、兎に角手を收めて四散五裂してゐた。綠雨もたしか小田原に行つてゐた。露伴は多く沈黙した。鷗外も唯その長い『即興詩人』の翻譯の稿をつけてゐるにすぎなかつた。思軒は萬朝報の赤新聞にかくれた。

死に近づく一年間に、紅葉は書翰に、又は斷片に、死に對する苦悶及び感想をかなりによく書いた。それは今でもちやんと書になつて残つてゐる。私はその四月か五月に大學病院にかれを見舞つたことがあつたが、昵近の人でなければ逢ふことが出来ないやうな形で、遂に私は病中のかれを見ることが出来なかつた。

この時分には、私も國木田君も島崎君も、もう妻を持つて、新しい家庭をつくつてゐた。島崎君は小諸に行つてゐた。その他の若い人達も皆な複雑した生活の巴渦の中に入つてゐた。

『もろひねの量ませ月の今宵也』その秋もすぎて、『死なば秋露の干ぬ間ぞおもしろき』かういふ辭世と共に、かれは三十六年十月三十日に死んだ。

その時の感と光景とを私は忘るゝことが出来ない。かれの死は、私に取つても尠なからぬ感激を齎らす材料であつた。私はその頃、小石川の小日向臺町に住んでゐたが、危篤の報を聞いた夜は、雨が靜かに降つてゐた。私は種々な感じに満たされて、一夜眠ることが出来なかつた。

兎に角一世の文豪であつたかれ、殆ど全く明治の創作壇を風靡したかれ、同人も多く門下生も多く、その邸宅に伺候するものが日に群を成すと言つたやうなかれ、美しい細君を持つたかれ——さういふ世間的榮譽を荷つたかれが、不治の病とは言ひながら、かうして年若くして、『文章報國』といふことを言つたり、七たび生れて必ず大文豪たらんと言つたりして長逝して行くさまは、私達文學青年に深い感激

と印象とを齎らさずに置かなかつた。

通夜はしなかつたが、それでも三時間位私は大勢の門下生や同人などの間にゐて哀を表した。葬式の日には秋晴の好い日で、あの狭い横寺町の通が殆ど車や馬車や人や生花やで一杯になつて、殆ど歩くことすらも出来なかつた。棺は神樂坂の通を通つて、濠端を市ヶ谷、四谷見附へと出て、青山の共葬墓地へと行つた。坪内逍遙博士が葬儀執行中に卒倒せられたのは、今でも私に深いあゝ感激を與へる。

かれの墓は、共葬墓地を笄町の方へ眞直に行く大通を、途中から左に折れて、少ししたらだと低くなつてゐるやうな處にあつた。狭い縦横についた路、そこに一杯に當時の文壇の人達が並んで、棺を入れた穴を人夫が埋めてゐるのを見てゐた。抱一庵は悲痛なことを言つて泣いた。

その時分、私の胸には、個人主義が深く底から眼を覺して來てゐた。宇宙にわれ唯一人あり、共同は妥協だといふ心持や、普通の悲哀を強ひて嚙殺して了ふやうな新しい思潮や、乃至は自然主義的思想が、外國の書物を透していつとなく私の中心を動かしてゐた。私は紅葉の葬儀に列しながら、かう心の中に叫んだ。「かゝる盛大な儀式、世間の同情、乃至義理人情から起る哀傷、又は朋黨、友人、門下生などに見る悲哀、さういふものは新しい思想から見て、何であらう？ 舊道德のあらはれの單なる儀式ではないか。寧ろこの盛んな葬禮よりも、まごころの友の二三によつて送らるゝ方が、かれの爲めに美しくもあり又意味もありはしないか。かうした外形的、壟斷的勢力は、もはや新しい思潮の世界には起らぬであ

らう。かうした大名が華族のやうな葬式をする文學者は、かれ紅葉をもつて終りとするだらう。友人の情、門下生の義理、さういふものに、我々は既にあまりに長く捉へられて來た。普通道德に拘束されすぎて來た。これからは、我々は我々の「個人」に生きなければならぬ！』かう思つた私の眼からは、拂つても拂つても盡きない涙が流れた。

其後、私は度々一人でかれの墓に詣でた。ある日は野菊を途中の草原で折つて行つてそれを手向けた。兵營の射撃では、射撃の演習の音が聞えて、晴れた秋の空に白い雲が淋しく流れた。

### 丸善の二階

十九世紀の歐洲大陸の澎湃とした思潮は、丸善の二階を透して、この極東の一孤島にも絶えず微かに波打ちつゝあつたのであつた。

丸善の二階、あの狭い薄暗い二階、色の白い足のわるい莞爾した番頭、埃だらけの棚、理科の書と案内記と文學書類と一緒に並んでゐる硝子の中、それでもその二階には、その時々歐洲を動かした名高い書籍がやつて來て並べて置かれた。勿論、それは書店でもその價值を知つて取寄せたのではない。唯評判だから、一二冊取つて置いて見ようといふ位の程度である。丁度田舎の、遠い邊陲の田舎の町の書店が、廣告によつて、中央文壇に發刊されたある二三の作を取寄せて並べて置くといふやうに……。

それを何ういふ人が買つたか。又それを何ういふ人が読んで何ういふ感じを起したか。讀んで了つて何とも思はずに書棚の中に徒らに並べられたか。それとも反古にされて捨てられて了つたか。しかしそのまことの種は——人類の中心にふれた種は、捨てられても捨てられてもつひに捨てられて了ふものではなかつた。ゾラのあの強いナチュラリズム、イブセンのあの深い象徴を透して見た人生、ニイチエの強い大きな獅子吼、トルストイの血と肉、「親々と子供」の中にあらはれた *Мир*、ハイゼの女性研究、さういふものは、いくら埋めても埋めても埋めきつて了ふことの出来るものではなかつた。極東の一孤島の新しい處女地には、いつ蒔かれるともなくその種は蒔かれて行つた。

註文した『親々と子供』の一冊を抱いて、戀人にでも逢つたやうにして、丸の内の宮城近い路を歩いて行く青年もあれば、『アンナ・カレニナ』の丸善の二階書棚に並んでゐるのを見て、一月の小遣錢しかない財布を逆さにして、喜んでそれを買つて行く若者などもあつた。アルフォンス・ドオデエの明るい同情に富んだ藝術、ビエル・ロチのインプレッションイズム、アメリカの作者では、カリホルニアの詩人ブレット・ハートの鑛山を詩材にした短篇などがよくさういふ人達に讀まれた。

バルザックの藝術もかなり人々に讀まれた。『ヘリ・ゴリオ』『ユーゼネ・グラランド』などの安い本を若い文學生はよく手にして歩いた。

ドイツでは、パウル・ハイゼ、ゴットフリード・ケルレルのものなどが讀まれた。ニイチエとイブセ

ンとの入つて来たのは、それから少し後だが、紅葉の病死の頃には、ハウプトマン、ズウデルマンの名もいくらかわが文壇の若い人達の口に上つてゐた。

兎に角、この歐洲大陸の大きな思潮の入つて来た形は面白かつた。三千年來の島國根性、武士道と儒學、佛教と迷信、義理と人情、屈辱的犠牲と忍耐、妥協と社交との小平和の世界、さういふ中に、ニイチエの獅子吼、イブセンの反抗、トルストイの自我、ゾラの解剖が入つた来たさまは偉觀であつた。勿論、それが最初から正しく入つて来たか何うか。何の點まで理解されたか何うか。曲らずに、歪まずに入つて来たか何うか。それはわからないが、兎に角、近松と西鶴しかないわが日本文學の中に、烈しく凄しく、颯風か何かのやうに漲つて入つて来たのは事實であつた。若い人達は皆それに向つて憧憬された。その時分、私は柳田國男君とよく一緒にさういふ書をさがして讀んだ。書の後についてある書目、それから雑誌の後についてゐる廣告、さういふものを私達は渴したものの水につくやうにして搜した。そしてありもせぬ金を拂つて、さういふめづらしい本を丸善に註文した。

モウパッサンの名は、上田君の持つてゐた“Odd Number”といふ短篇集で始めて知り、つゞいて『ピエル、エ、ジアン』を日光の洋書店で買つたが、其時分はモウパッサンの如何なる作家であり、又いかなる位置にその名を置いてゐる作者であるかをも誰も知らなかつた。私なども、その短篇集、健全な短篇ばかりを選んだ其の書に由つて、唯、單に美しい戀愛を題材にした短篇を書く作者だとばかり思つて



るた。しかし、さうかうしてゐる中に、モウバツサンは單にさうした作家ではない。ドオデエなどは非常に違ふ作者だといふことがわかつて来た。

ある日、私は丸善の二階に行つた。そしていつものやうに、そこに備へられた大きな目次の書を借りてそれを翻してゐた。ふと、モウバツサンの『短篇集』が十冊か十二冊、安いセリースで出版されてゐるのを發見した。何とも言はれず嬉しかつた。私は金のことを考へず、早速注文した。

その到着したのは、忘れもしない、三十六年の五月の十日頃であつた。私は其頃は博文館に入つて、『太平洋』を編輯してゐた。その日は雨が降つてゐたが、電話でそれを知らされると、もうゐても立つてもゐられなかつた。すぐに行つて取つて來なければ承知が出來なかつた。しかし、それにつけては、錢がない。受取つて來る錢がない。七八圓の金だが、それがない。さうかと言つて、月末まで待つてゐる氣にはなれない。仕方がないから、出版部へ行つて、時の部長U氏に泣附いて、『美文作法』を書く金の中から十圓前借をした。そして降り頻る雨をついて丸善へと出かけた。

安いセリースで、汚い本であつたけれど、それが何んなに私を喜ばしたであらう。ことに、この十二冊の『短篇集』の日本での最初の讀者であり得るといふことが、堪らなく私を得意がらせた。私は撫でたりさすつたりした。

それに、短篇が無限に澤山にそこに收められてあるのがうれしかつた。私は頁を切るのもまどろこし

いやうな氣がして、それに讀取つた。

私の思想と眼と體とは、この十二冊の『短篇集』に由つて、何んなに深い驚異に撲たれたであらうか。エミール・ゾラの "The rase Raquen" にもその前にかかりに深く動かされたが、この『短篇集』に對した驚異は、決してそんなものではなかつた。私はガンと棒か何かで頭を撲たれたやうな氣がした。思想が全く上下を顛倒させられたやうな氣がした。ドオデエの短篇、ユツベの短篇、ツルゲネフの短篇、そんなものからは、もつとぐつと徹底して物が見てあるのを私は思つた。

『あのライトタッチが眞似が出來ない。あゝいふものを書いて見たい。』かう紅葉はモウバツサンの作を見て言つたことがあつた。鷗外漁史の『審美新説』の中には、『明快簡素なるあの調子』と言つて評してあつた。上田敏氏なども、モウバツサンは單に明るい藝術的の作家であるやうに言つた。それが何うだらう？ 私の胸に、體に、心に映つたモウバツサンは？

或は私の心の状態が丁度さうした一種の轉換期に達してゐたのかも知れない。兎に角私は、その『短篇集』によつて、すっかりひつくりかへされた。私はその本を一刻も傍を離さずに、博文館に通ふ途中にも、それをポケットに入れて行つた。編輯の餘暇にもよめば、車の上でも讀み、床の中でも讀んだ、何といふ傾倒！

早速柳田君にも二三冊貸した。柳田君は言つた。『ひどいね、好いのもあるけれど、随分ひどいのもあ

るね。かういふ作家かね。」

『それが面白いぢやないか。』

『面白いには面白いが、何うも臭味が強すぎるぢやないか。』

『さうかね。』

私にはモウバツサンとドオデエの相違などが考へられた。丁度その少し前に、私はビエル・ロチの『氷島の漁夫』を読んでゐた。それとモウバツサンの相違などが痛切に考へられた。事件を叙したものと心理を描いたものの區別、あるところまでしか入つて行くことの出来ない作者と出来る作者との區別、ロマンチックな作者とリアリスチックな作者との區別、さういふことがありありと私の頭に映つて見えた。私の心にひそんでゐた、開けずゐるた、しかも動搖し醗酵してゐた心が忽ちそれに觸れたのであつた。

『今までは私は天ばかり見てあこがれてゐた。地のことを知らなかつた。全く知らなかつた。淺薄なるアイデアリストよ。今よりは己れ、地上の子たらん、獸のごとく地を這ふことを屑しとせん、徒らに天上の星を望むものたらんよりは——』こんなことを私はその時分の感想録に書いた。

西鶴の價値——それも、モウバツサンを読んでから、私にはよく飲み込めて來た。紅葉、露伴、乃至寒月などの唱道した西鶴とは丸で別な西鶴の價値が……。

## 郊外の一小屋

春のまだ淺いある日の午後、社から歸りを山手線でぐるりと品川を廻つて澁谷で下車した。

もう四時すぎであつた。私は停車場を出て宮益の通へ行つて、それからかねて聞いて知つてゐる路を左へと入つて行つた。さびしい田舎道だ。霜解の道はまだ凍らずに、靴が深く深く入つた。私は成だけ路の好いところを拾ふやうにして歩いた。

今では、そこはすつかり家屋が建つて、小さな工場の煙突から細く煙が颯つたりするのが電車の中から見えるが、その時分は、まださびしい郊外の、家と言つてもちらほら藁葺の屋根が見える位のものであつた。柳田君はその時分一二ヶ月ほどその農家のある一間を借りて、そこから役所の方へと通つてゐた。

まだ松岡姓で、柳田家へ養子に行く話のきまつたばかりの時であつた。今の夫人が十八九であつた。まだお茶の水に通つてゐた。

私の風呂敷包の中には、今、丸善に寄つて取つて來た、かねて注文して置いたハウプトマンの『沈鐘』とズデルマンの『カツツエンステッヒ』とイブセンの『小アイヨルフ』とが入つてゐた。その他、ピヨルンソンの山嶽小説の一冊も入つてゐたかも知れなかつた。

泥濘の道を通りすぎると、大きな樺の樹の下に、さびしい一軒の藁屋があつて、その一間に柳田君が住んでゐた。

「君のますか。」

幸にゐて、私は縁側から入つて行つた。竹藪に淡く薄れてゐる夕日、梅の白く咲いてゐる畑、霜に赤くやつれた菜畑、さういふものがいかにもラスチックなさびしい感じを私に起させた。

「好い處だね。」

「ちよつと好いだらう？」

當年の『野邊の往來』の作者、『若菜集』以前の戀の詩人である柳田君は、かう言つて白い顔を夕暮近い寒い空氣の中にくつきりとあらはした。『梅がまだ丘に澤山あるがね……何とも言はれないよ。夕方なぞ、人であると、頭がキーンとしまるやうな氣がするよ。』

大きな銀色の壺のランプだの、朱檀の机だの、書棚だの、大きな派手な座蒲團などがあたりに眼について見えた。皆な柳田家から持つて來たものらしかつた。

私が包から本を出すと、

「や、來たね。いつ來たんだ？」

「今日、今取つて來たばかり。」

『沈鐘』の新しい瀟洒な裝釘をひつくりかへして見て、『洒落れた本だね』新しい思想が匂つてゐるやうな氣がするね。』

『カツツエンステツヒ』の方を手を取つて、

『これも好いな……皆な、すぐ讀みたい本ばかりだな。』

私達の若い心は深くその新しい思潮にふれて行くのであつた。私と柳田君とは、イブセン、ニイツエ、ドオデエ、ツルゲネフについてよく語つた。我々はかうしてゐられない。ぐづじづしてはゐられない。

飽まで新しい社會のチャンピオンとして出て行かなければならない。かういふ話が絶えず繰返された。諾威の山の中にある青年、フィヨルドを背景にして住んでゐる少女、ステツプの中の貧しい農夫、巴里のセイヌ河畔の洗濯女、さういふものも常に私達の話頭に上つた。

『氷島の漁夫』はロチの作中の傑作だつて言ふぢやないか。』

『さうかねえ。』

『上田君が言つてたよ。』

『ロマンチックなところは面白いね。』

『それに、自分を上に置いて、氷海のことを書いた筆で、すぐ南支那の戰爭を描いてゐるのなど、表現の方法としても面白いね。それに、あの娘が、漁夫の海から歸つて來るところを待つてゐるあたりは

何とも言はれないよ。』

かう言つた柳田君は、銚子の海のことなどを思ひ出してゐた。

其夜は、夕飯を御馳走になつて、夜の更けるまで話した。そして、『泊つて行きたまへ』と達つてとめるのを、若い妻が待つてゐるだらうと思つて、最後の山手線で新宿まで来て、そこで乗替へて歸つて来た。其頃は私は牛込の原町三丁目に住んでゐた。

その柳田君の幽栖をその後私は二三度訪問した。その時、割愛して置いて来たレギイネの物語、それを柳田君はいろいろに批評した。クリスマスの晩に雪の落ちるあたりは何とも言はれないなどと言つた。最後の一章がいかにも現代的小説の氣分で満たされてゐることなどを感激して語り合つたことなども覚えてゐる。

ある日はその幽栖で、歌の會をした。私の師匠や柳田君の養家のおばアさんなどが来た。實際その梅は見事であつた。畑をつくしてすべて梅であつた。『いたづらに梅のみ白き夕ぐれのこのさびしさをいかにしてまし』かういふ歌を私はその當座で咏んだ。

### 陣中の鷗外漁史

鷗外氏に始めて逢つたのは、日露戦役當時、第二軍がこれから宇品を出發して、何處かの地點へ向ふ

といふ時であつた。場所は廣島の大手町の大きな旅館の一間。

かう思出して來ると、廣島のあの當時の活躍した光景がありありと今でも眼の前にあるやうな氣がする。騎兵が行く、歩兵が行く、砲兵が行く、砲車が行く……。人の心は焦立つて、騒いで、ある物に向つて絶えずあせつてゐると言ふやうな、又は別れの悲哀と、愛國の精神と、功名の念と、危惧の情との一つになつて渦を卷いたやうな……。

私は志願した寫真班の一員として、一面從軍記を書くべく、第二軍と一緒に、廣島市へと來てゐた。私の若い心も戦争に向つてあこがれ且つ震へた。

私達一行は、元安橋の少し手前を左に入つた汚い狭い旅館の一間にごたごたと入つて、出發命令の來るのを一日一日と首を長くして待つてゐた。それに、志願はしてあるものの、黙つて置いて行かれては大變だと言ふので、何の彼のと手蔓を求めては、私達はよく第二軍司令部に行つた。今、中將の由比光衛氏はその時中佐で軍の參謀次長であつた。そこに行つては私達はよく叱られた。

『一體、君達は煩さいぢやないか。じつとしてゐれば好いぢやないか。』  
でなければ、

『伴れて行くか何だか、俺は知らんよ。一體誰が受合つたんだ。』  
などとおどかさされた。

丁度その時、鷗外氏は軍の軍醫部長で、確か大手町の長沼といふ旅館にをられた。第二軍軍醫部、さう白地に黒く書いた旗を見るたびに、私は是非お目にかゝりたいと思つた。しかし中佐位の人でも、さう嘸鳴りつけられるのだから、將官などには、とても逢へまいと思つて躊躇してゐた。

しかし、何うしても逢ひたいと思つたので、ある日の午前、思ひ切つて、名刺を其處に持つて行つた。「閣下ですな。」

かう言つて、其處にゐた看護卒らしい兵士は私の異様な服と名刺とを比べて見て、「ちよつと待つて……」

かう言つて奥に入つて行つた。

すぐ戻つて来て、「此方へ。」かう言つて縁側の處まで伴れて行つて、「閣下はその二階にをられる。」

私は文藝の難有さを感じずにはゐられなかつた。それに、私はまだ作家としても何もしてゐやしない。それにも拘らず、佐官でも減多には逢つて呉れないこの戦時に、軍醫部長が別に不思議もないやうにしてかうして逢つて呉れるとは！

これも文藝のお蔭だ。

それに、鷗外氏は陰ながら一番尊敬してゐたし、その書いたものからは、非常に利益を受けてゐるので、この前から逢ひたい逢ひたいと思つてゐた。しかし、その頃では、鷗外氏は現今の文壇に愛想をつか

したといふ風で、「めざまし草」もやめ、書くものも出さず、ことに小倉の師團に行つてからは、「末流文壇」などと言つてゐた。それに、上田敏氏と共に、與謝野鐵幹氏の「明星」にいくらか好意を持つてゐたらしい形が、私の訪ねて行つてお目にかゝらうとする心をいつも遮つた。「明星」は私のわる口をよく言つた雑誌だ。

鷗外氏は、

「まア、此處に來たまへ。花袋君だね、君は？」

この「花袋君だね君は？」が非常に嬉しかった。

鷗外氏の個人主義は、私は昔から好きだが、かういふ風にさつぱりした物に抱泥しない態度は、何も言はれない印象を若い私に與へた。

廣い十五六疊敷の明るい二階の間、軍服だの袍だの劍たのを置いてある室で、私は戦争の話や文壇の話をした。「君の他に、文壇の人で従軍するものがあるかねえ？ 日々の黒田君？ ふん、黒田だけだらう。」などと氏は首を傾けられた。

そこに三四十分ゐて、餘り邪魔をしようと思つて、又、戦地でお目にかゝりませうと言つてわかれた。處が、戦地に行く前に、航海中の船の中で、私は一度鷗外氏をそのケビンにたづねた。そこでは前よりは餘程のつたりした氣分で、外國文學の話などまでした。ハウプトマンの「Arme Heinrich」の話や、

メイテルリンクの樂天的傾向を持つた思想の話や、ダンヌンチオの話なども出た。朝鮮の近海だと言ふことだけはわかつてゐても、何處の海岸を船が走つてゐるかわからずに、萬一の敵を警戒して、燈を滅して、船は波をきつて進んで行くのであつた。鷗外氏は、香の好い烟草を吸ひながら、「何うです、君も一本。」と言つて勸めて呉れた。

其後、お目にかゝることはなくとも、その同じ第二軍に鷗外氏がゐると言ふことは、何んなに力強いことであつたか知れなかつた。敵の間諜を恐れて、漢字を片假名にした『ダイニグンゲンイブ』と書いた門前を通るのも常になつかしかつた。

汚ない支那民家、炕の中のアンペラ、何も見るものも食ふものもない遼東平野、それも後には段々暖くなつて、桃や杏が土壁の間に咲いてゐるやうな逸興も出て來たが、上陸した當座は、唯、寒い風と、埃塵と、茶褐色の土とがあるばかりであつた。後に公にされた氏の『歌日記』を見ると、氏はさういふ荒涼とした中にゐて、都に置いて來た若い夫人と生れてまだ幾らも経たない愛娘とのことを思つてをられたのであつた。

氏の夫人の美しいことは、當時文壇の噂の種となる位であつたから、間接ながら、私も知つてゐた。氏の新婚の當座、田村松魚氏が「鷗外め、噂をつれて飛鳥山に遊びに出かけて行つてゐるが、甘いもんだぜ、見てゐられなかつたよ。」かう博文館の編輯で、誰かに言つてゐるが、私はそれを聞いて、却つて

氏のために、松魚氏に對して反感を抱いたことなどもあつた。その若い美しい夫人にわかれて、氏はあのさびしい遼東の野に起臥してゐたのであつた。

上陸地點の車家屯、轉角房附近のある一小村落、其處では、司令官以下十三里臺の戦を見に出かけた跡で、敵襲の誤報があつて、残つてゐる者は皆な大騒ぎをした。鷗外氏は言つた。「なアに、大したことぢやないんだよ。兵に一人變な奴がゐて、それが發砲したんだよ。しかし、一時は大騒ぎだつた。司令官が留守だから、いざとなれば、僕が代理をしなければならなかつたからね。」

金州の戦、得利寺の戦、一戦爭あると、軍醫部は中々忙しかつた。鷗外氏もぢつとしては居られないやうだつた。得利寺戦の後、暫くゐた尖山子といふ村は、遼東ではちよつと風景の好い村で、樹の影なども多かつた。そこゐる時にも、敵襲があつて大騒ぎした。後に、歸國してから、戦地にゐた氏の許に歌を書いて送ると、「君の野糞をのぞみし尖山子」といふことの書いてあるはがきを私によこした。戦地では大抵誰れでも野糞をやるのだが、私のよく行く畑が、丁度軍醫部の後になつてゐたので、氏はこれを指して言はれたのである。「えらい處を見られたもんだ。」と私も考へて可笑しくなつた。

蓋平、大石橋、海城、常に、私は氏と一緒にだつた。殊に忘れられないのは、海城の箭樓子で、私が熱を病んで、軍醫部の御厄介になつたが、その時、氏は「軍醫部に來てゐたら、何うだ。」かう言つて呉れたので、私はそこに行つて寝てゐた。熱が烈しいので、チブスになる虞があつた。私が寝てゐると、氏

は、『何うも取れないか、熱が……』などと言つて私を慰めて呉れた。

その前に、私達は大石橋から營口に遊びに行つた。その歸りのことは、私は『死』といふ短篇に書いたが、その時、營口の雜貨店の一隅で、外國の小説の並べてあるのを發見して、Heinz Tovoteの短篇集とAnatole Franceの“Bienchen”とを買つて來た。そしてそれを鷗外氏に見せた。『うん、これは難有い。』かう言つて氏は、戸板を並べた上に白毛布を布いて、蠅を逐ふ拂子を持ちながら、ちきそれを讀んで了はれた。

鷗外氏の『歌日記』はそのため、私には非常になつかしく面白く思はれた。夫人や愛娘に對する歌が非常に多いのも面白いし、あゝして家郷を思はれたかと思ふと、干役の辛さなどがしみじみと自分の身にも思ひ當つて來る。私も他山浦あたりで、『家にあらば月にわきもがうすけはひ草花見にと添ひて行かましを』といふ歌を詠んだが、それを何本も何本も扇に書いたことなどが思ひ出される。

遼陽で別れをつけて歸る時、暇乞に行くと、『好きな、羨しいな。こつちはこれから段々遠くなるばかりだ。』かう言つて鷗外氏はさびしく笑はれた。

### 小諸の古城址

島崎君は家庭をつくるとすぐ信州の小諸へ教師になつて行つた。従つて手紙の交換ばかりで滅多に逢

つたこともなかつた。私の想像するところによると、小諸に於ける島崎君の數年は、一面藝術と生活との衝突であり、又一面堪へ難い孤獨の心境であつたらうと思ふ。島崎君が黙つて、内面は焦りながら、外面は落附いた、自己と人生とを凝視してゐた形が歴々と見えるやうな氣がする。『常盤樹の歌』『勞働』『收穫』さうした詩の中にも、君が懊惱煩悶したさまが一々指される。しかし實生活も世間の煩累も家庭の束縛もそれを減すことが出來ないほどそれほど島崎君の藝術は力強いものであつた。『小諸古城址のほとり』その頃から、君は小説を書くことを心がけた。

島崎君の其頃の名聲は、博くひろがらないやうなところはあつても、清く婉れざるものであつたことは特記しなければならぬ。島崎君は決して濫作をしなかつた。念の上にも念を入れた。従つて君の作品は、世に公にされるたびに、割合に多く好評を博した。

島崎君と國木田君との交遊は、その時分はまだ一度逢つたか逢はないか位のこと、双方の意思がまだ疏通してゐなかつた。たしか一番最初は、牛込の私の家だと思ふが、島崎君もまだ國木田君を認めず、國木田君もまだ島崎君を認めてゐなかつた。『餘りに形式に捉はれすぎてるぢやないか。』かう國木田君は言つた。

兎に角、其時分は、私達は眞面目に勉強しなければならぬと思つてゐた。實生活の波に流されずに、俺まで後日の計をなさなければならぬと思つた。従つて、外國の書物に私達は没頭した。

その時分の文壇は、柳浪既に倦まれ、天外と風葉とがそれに代つて中心になつたといふ形であつた。天外の寫實主義、これは無論新時代——G社以後の新時代の影響を尠ならず受けたものだが、惜しいことには、その寫實主義がホト、ギス一派の持つたものだけでも持つてゐなかつた。柳浪の淺い寫實主義に唯わづかに一步を進めただけであつた。風葉はそれから比べると、G社の正系であるだけに、文章も絢爛に、觀察も細やかに、もつと内部まで深く自然主義的にならうとしてゐた。

一方には明星派が詩壇にそのグロテスクな特色を掲げて覇を唱へてゐた。晶子の歌などは正に現代青年の群の憧憬的となつた。しかし、明星派には小説を書く才に乏しかつた。それに、外國文學に對する知識も概して受賣的で、自からそれを研究しようとする態度に乏しかつた。

當然新運動が起るべくして、しかしそれを實行すべき人がなかつたといふのが、その當時の文壇の狀況であつた。

柳田君と私と蒲原有明君とは、常に島崎君と手紙のやり取りをした。島崎君も新しい外國文學の研究に次第に指を染め出した。バルサツクは殊に深く研究したらしかつた。それから、ダンヌンチオ、モウバツサン、ゾラ、フロオベル、ゴンクワルなどを讀んだ。イブセンは殊に深く島崎君を動かしたらしい。その時分、往復した手紙は、未だにちやんと保存してあるが、いかに若い心が將來の文藝に向つて波打ちつつあつたかを知ることが出来る。

島崎君はその時分、『藁草履』『椰子の葉蔭』『爺』『老嬢』などを書いた。『爺』などには、モウバツサンの感化が既に著しくあらはれてゐた。

島崎君は一年に二度か三度出京した。『文學界』の舊同人では、主に馬場君を訪問されたやうである。私の家にも来た。柳田君の宅などへもよく行つた。ある春の休暇に來た時には、馬場君、蒲原君、小山内君と私と一緒に、小金井から百草の方へ遊びに行つた。丁度其時、私は足を痛めてゐて、一緒に歩けないので車で行つたが、その時のことが、今でもありありと眼の前に残つてゐる。

明治三十七年の一月だ。さうだ、日露戦争の始まらうとする年だ。私は太陽に『露骨なる描寫』といふ一文を掲げた年だ。私は急に思ひ立つて、島崎君をその信州の山の上に訪問した。

淺間の雪を望んで、上州の平野を次第に碓氷へと近寄つて行つた。何も彼も美しく快く且つ生々としてゐた。碓氷を越えると、一面雪の國で、日影が美しくきらきらと四周の山々に光つた。

小諸の停車場を下りて、耳も手も切らるゝやうな風に吹かれながら、凍りつくした大路を靜かに馬場裏の方へと行つた。小さな川などが半ば氷りつゝ流れてゐた。

『島崎といふ家は？』

かう度々訊いて、遂に私は島の中と言つても好いやうな處に、一軒藁葺の家のあるのを發見した。前には葉の霜がれた畠などがあつた。



そこに鳥崎君は住んでゐた。

それは後年、鳥崎君が『奉公人』と言ふ短篇の中に書かれた家である。そこで鳥崎君は凍る墨を呵して、『水彩画家』の一篇を書いた。

夫人と子供達——あの明るい賑やかな人達がもうこの世にゐないと思ふと、何とも言はれない感傷な念に撲たれずには居られない。私達はその時何を話したであらうか。イブセン、でなければビヨルンソン、でなければ、トルストイ、モウバツサン。で、夜更るまで私達は飽くことなく話した。ハウプトマンの『寂しき人々』などの話は、殊に、家庭を問題にしてゐた私達に共鳴した。そして其夜は火燵に寝た。

私の胸にも、創作に對する熱が盛んに燃えつゝあつた。何か仕事をしなければならぬ。何か目に立つやうな事をしなければならぬ。かう思ひながら、混亂した思想と觀察とは何うも一致しないで困つた。で、あくる日は、小諸の古城址へと私達は遊んだ。松林の間から連山の雪がきらきらとカッやいて見えるやうなところだ。鳥崎君が何遍か東京に行くのだと言つて見送つた汽車が、黒い凄しい煤烟を擧げて、すぐその傍を通つて行つた。

東京に歸ると間もなく、戦争が始まつた、世間は騒がしくなつた。號外の聲が町から町へと響き渡つた。私の二番目の男の兒は、津輕海峡を敵艦が襲つた日に生れた。人生の波、峻しい波は私の生活にも

次第に深く入つて來た。

社に行くと、坪谷君は、

『君、戦争に行かんか。』

『行きませう。』

かう激昂して私は答へた。

國木田君は其時、芝の櫻田本郷町で、『近事畫報』の編輯をしながら、絶えずその短篇を世に公にしてゐた。

やがて私は戦地に立つた。鳥崎君は従軍の希望で、私の立つたあとをやがて東京に出て來たが、好い口がないので、再び山の上に歸つて、従軍したつもりで、あの長篇『破戒』の最初の章を書き始めた。

## 作家短評

恐らく紅葉山人も生きてゐたなら、四十五の年まで生きてゐたなら、その作品に大きな變化を起したであらうと思ふ。紅葉の作品には外形には模倣、内容には未だ深く鍛錬しないものが多かつた。かれの骨の折つたのは文章で、その文章が西鶴のやうな内容の充實——書かすには居られなくなつて筆を執つたといふやうな充實と漲溢とを持つてゐないために、文章と内容とが離れ離れになつて、死語が多い。

外面は美しい錦でも内部は色の褪せたつくり花であつた。

しかし、これも無理はない。かれはまだ年が若かつたのだから、世相に觸れたと言つてもさうまだ深く觸れてはゐなかつたのであるから……。だから、今日まで生かして置きたかつたと思ふ。

獨歩はその意味に於て、まことに早熟の天才であつた。かれには紅葉の外面の美よりも裏面の褪せた色がはつきりと映つて見えた。『ちつとも内部に觸れてゐないではないか。いくら綺麗だつて、死んでるちや駄目だ』とかうかれはいつも紅葉の作を批評してゐた。

硯友社の人達の中では無論、柳浪が一番深かつた。次に、眉山が文章の型から出ようとして懊惱した。水蔭は『水車』時代には、奇警な清新な短篇を公にした。かれなどはもつと／＼出て行かなければならない人であつた。しかし惜しいことには、其時分の文壇の空氣が妥協的で、外交的で、乃至朋黨的で、『群』としての境にとゞまり且つ安んじてゐる人達が多かつた。千朶木山房主人の様な孤往獨邁の氣分に富んだ作者が尠なかつた。つまり自己を深く信ずることが出来なかつたのである。それは柳浪なども、今でもさう言つてゐるさうであるが……。

柳浪の寫實は、一方『深酷』といふ世間の評語に欺かれて、わざと心にもない誇張をやるやうになつてから、段々その純なところを失つて來た。續いて達意な筆の才に任せて、寫實そのものが書齋で空想した寫實になつたがためにその光を失つた。更につゞいて、今度は事件の筋を運ぶ材料に會話を使用した。最も大切で、且最も生氣を帯びなければならぬ善の會話を……。

水蔭には寫實に甘んじてゐられない一種の理想的なところがあつた。そしてこれが芝居らしい不合理と不統一とに續いた。シーンを描く作家としては、確かに時流に一頭地を出してゐたのであるけれども、その誇大な理想的なもののためにそれを打壞して、一種のマンネリズムが出て來た。それに餘りに『新聞小説』といふものに重きを置きすぎた。しかし柳浪にしろ、水蔭にしろ、眞に、社會でなしに、自己を信じてゐたならば、新しい潮流がいかによろしく漲つて來ても、すつかり押流されずに、一握の藥位は掴む事が出來たに相違ない。惜しい事には、彼等には、『群』としての上に、『自己』と言ふものをしつかりつかむものがなかつた。唯一人、自から刃を咽喉に當てた眉山ばかりが、『群』以上に或物を自覺してゐたと言ふことが出来る。

唯、露伴だけは、今でも謎である。修養、教訓などと云ふ方面に出て行つた形から見ても、藝術家としての眞意を疑ふものもあるが、私には何うしてもさう思はれない。獨歩も、露伴には重きを置いてゐた。無論紅葉以上に重きを置いてゐた。『露伴は駄目だなんて言ふが、今の若い者に押されて出られなくなるやうな彼ではない。今に、屹度えらいことをやる。アツと言ふやうなことをやる。』かう獨歩は常に言つてゐた。ところが、『天うつ波』でかれは躓いた。否、躓いたと言つては語弊があるかも知れないが、兎に角あれは期待が大きかつただけに、成功が著しくなかつた。それに、『出處』といふ詩が、當時の新時

代の詩人に笑はれた。しかし、私は今でも露伴を『名和長年』だけとは思つてゐない。矢張未だに謎である。

自己を知るといふことと、新しい知識と言ふことが、あの新時代の大きな潮流の基底を成してゐたのである。それをおろそかにしたものは、皆な押し流された。大きな家屋も、小さな家も、乃至は一村落と言つたやうなものも……。

徳富蘆花などは、その中にゐて、自己を割合に深く知り、且つ新しい知識を積むことを怠らなかつた爲に、思想は舊く且つ通俗的であつても、それでも一握の蘆をその潮流の中に握ることの出来た好い例だ。湖庵子、嵯峨の屋、さういふ人達は、皆なその自信のないために流された。

千朶木山房の主人と、早稻田の逍遙博士とは、その態度に於いて、又はその位置に於て、まことに兩極を成してゐると言つても好いほどそれほど好對照を成してゐる。千朶木山房の主人は、飽までも孤往獨邁である。『箇』の人である。かれの周圍には、子分とか弟子と言ふものがない。煩さくなると、かれはいつでもそれを振拂つて了ふ。『文づかひ』の中のイイダ姫がかれの最も好きなヒロインであるなども、それを考へると深い意義がある。かれは唯自分の好きなことをした。ひとりて自分の歩く路を切り開いた。世間とか、社會とかはかれの間ふところではなかつた。

そのかれが、新思潮の潮流の眞中にあるて、イブセンの『建築師』の序文に、新時代が鼓噪してかれの

周圍を通つて行くさまを書いたのは、文藝批評家の最も見通すことの出来ない面白い一つのシーンである。かれは巧に身を潮流の上に挺して、堤防の上からそれを見てゐるやうな態度を取つた。かれは飽くまで自己を忘れなかつた。又、眼前の潮流を批評し得るの餘裕を保つことを忘れなかつた。『スバル』が今の文壇にある異つた流れを注いだことは、誰も否むことが出来ない。『しがらみ草紙』時代の意氣は、今日にでも矢張かれの上に見ることが出来る。

これに比べると、早稻田の逍遙博士は、『群』の盟主である。決して『箇』ではない。かれの周圍には種々な人達の侍つてゐるのを私は常に見た。そしてその人達が博士を餘所に常に相争ふのを見た。そしてその人達の多くは、千朶木山房の主人に渴仰した若い群よりも、より多くの保護と世話を受けたに拘らず、その文壇に送つた新しい氣分は、むしろ千朶木に多く、早稻田に少いのを私は見た。

有名な没理想の論戰、あれが矢張兩者の區別をよく現してゐるのである。『しがらみ草紙』の彗星のごとく消え去つたのに比して、『早稻田文學』が丸で内容と勢力とが別種のものになつたとは言へ、今日までつゞいてゐる形なども面白いと私は思ふ。

それから、『帝國文學』と言ふ雑誌があつた。あれは何うしたらう？ 今もつづいて發刊されてゐるか、何うか、かう訊くと、或人が、それは矢張今でも發刊されてゐるが、丸で内容の變つたものになつて了つたといふことを話して呉れた。

『帝國文學』——赤門出身の若い人達の機關雜誌、これは最初はかなり賑やかであつた。樗牛、桂月、柳村、(上田敏)などのゐる時分は、それでも是非毎月讀まなければならぬ雑誌であつた。『しがらみ草紙』とその後身の『めざまし草』と『早稲田文學』とに對抗した形が面白かつた。無論その中から幾多の人才が出た。批評家は殊に多かつた。私にしろ、獨歩にしろ、よくその六號活字でわる口を言はれた。獨歩はよく怒つた。

『何だ、あいつ等は、卒業して田舎に行けば、文學のぶの字も忘れて了ふ奴等ぢやないか。そんな奴に批評が出来てたまるもんか。』

實際その通りで、此處から出て、大氣焔を吐いて、一二年で音も香もなくなつた人達は腐るほどある。豪い學者、乃至はすぐれた語學の先生になつたものはあるが、一生を文藝に託した人は數へるほどしかない。これもしかし大學の文科の方針がさうなのだから仕方がないではないが……。

この中で、樗牛と上田敏とのこの二氏は、私達に取つても考へなければならぬ人達だつた。樗牛の才筆は、世間では無論敏氏の上にその位置を置いてゐたが、私の考へでは、敏氏の方が寧ろ多く文壇に貢獻するところが多かつた。『樗牛全集』の中には、別に大したものはないが、敏氏の書いたものの中には、當時にあつて、新しくすぐれたもの、若い人達をひき附けたものが非常に多かつた。新しい知識の輸入者としては、千桑木山房の主人の次ぎに位する人と言つて差支なかつた。しかし敏氏は不幸にして人を

鼓吹する力の半分もその實行の力を持つてゐなかつた。實行に行くと、かれはいつも逡巡した。躊躇した。又よく傍觀した。

思ふに、自然主義に對抗した思想の中で、かれの抱いた思想が一番新しく且つ價值のあるものであつたに相違ない。私は常にかれを向うに廻した。私などの考へてゐる正面の對者は、實にかれでなければならなかつた。『藝苑』といふ雑誌の生れた時分には、殊に私はさういふ氣がした。

『明星』は晶子の天才のために光を放つたが、實は敏氏に負ふところが最も多かつたのである。海潮音の翻譯——あれなどは殊にさうだ。少くとも、あれは當時の讀者には、過寛の衣であつたに相違なかつた。私達はしかしそれに赴かうとはしなかつた。何故なら、もつと實際でなければならぬと思つたから、もつと徹底の寫生でなければならぬと思つたから、フランス文學以上にロシヤ文學の素朴と眞剣と無邪氣とを愛したから……。

## 電車以前の東京

其頃でもまだ東京には電車は出来てゐなかつた。馬車鐵道も大通に一條あるばかりで、交通は十の八九は、車に由らなければならなかつた。

私は博文館を出て、本町の角で、そこに待つてゐる車に乗つて、濠端を九段の下に出て、飯田町の坂